YUN-KANG

CAVES ELEVEN AND TWELVE

VOLUMES VIII AND IX

TEXT

8691834298
京都大学文学部

PUBLICATION OF THE JIMBUNKAGAKU KENKYŪSHO

YUN-KANG

THE BUDDHIST CAVE-TEMPLES OF THE FIFTH CENTURY A.D. IN NORTH CHINA

DETAILED REPORT OF THE ARCHAEOLOGICAL SURVEY CARRIED OUT BY THE MISSION OF THE TŌHŌBUNKA KENKYŪSHO 1938—45

PROFESSOR SEIICHI MIZUNO
AND
PROFESSOR TOSHIO NAGAHIRO

VOLUMES VIII AND IX
CAVES ELEVEN AND TWELVE
TEXT

JIMBUNKAGAKU KENKYUSHO
KYOTO UNIVERSITY
MCMLIII

京都大學人文科學研究所研究報告

雲岡石窟

西暦五世紀における中國北部佛教窟院の考古學的調査報告

東方文化研究所調査

昭和十三年——昭和二十年

水野清一

長廣敏雄

第八卷·第九卷

第十一洞および第十二洞

本文

京都大學人文科學研究所

1953

例　　言

本書は『雲岡石窟』全十五卷のうち第八，第九卷にあたり，第十一洞と第十二洞の調査と研究をまとめたものである。本文は第八卷，第九卷を合本にしたけれども，圖版は第八卷第十一洞，第九卷第十二洞と通常どほり洞別にわけた。

第十一洞は，主として昭和十四年(1939)，もと所員羽舘易氏が，もと所員岡崎卯一氏を助手として撮影し，第十二洞は，主として昭和十九年(1944)，羽舘易氏が單獨で撮影した。第十一洞の測量は昭和十五年(1940)，奈良國立博物館技官小野勝年氏が，もと所員山內啓藏氏を助手としておこなひ，のち北野正男氏によって製圖された。しかし，第十二洞は，遺憾ながら，平面測量のみで壁面測量の機會をえなかった。拓本は昭和十四年(1939)徐立信氏によって作製された。

本書の記述は著者二人の共同執筆であり，英文飜譯は東洋美術研究のため滯在中のオックスフォッド大學東洋美術館 P. C. Swann 氏の手になる。

本書の刊行は，本所の出版費をもととし，文部省當局および京都大學の特別の配慮のもとに達成されたものである。

以上の諸氏ならびに諸機關に對し，心から感謝の辭をさゝげるとともに，過去十數年間の調査と研究に有形，無形さまざまの援助をあたへられた數多くの人々に對し，さらに本卷の編輯に獻身的努力をはらはれた齋藤菊太郎，陳顯明，助手岡崎敬の諸氏，その他に對し，深甚の謝意を表したい。

1953年2月

著　　者

目　　次

例　　言 …… vii
序　　章　雲岡圖像學 …… 1
第一章　第十一洞 …… 21
1. 南壁 …… 21
2. 東壁 …… 24
3. 北壁 …… 24
4. 西壁 …… 27
5. 方柱 …… 27
6. 天井 …… 30
第二章　第十二洞 …… 31
1. 前室 …… 31
2. 主室 …… 34
終　　章　第十一洞 第十二洞の特徴 …… 37
圖版解說 第十一洞 …… 43
圖版解說 第十二洞 …… 57

實 測 圖 目 次

參照頁

I. 第十一洞　横斷面圖(水野清一測,北野正男製圖) · · · · · · · · · · · · · 21

II. 第十一洞　明窓東西壁立面圖(小野勝年測,北野正男製圖) · · · · · · · 21

III. 第十一洞　南壁立面圖(小野勝年測,北野正男製圖) · · · · · · · · · · · 21

IV. 第十一洞　東壁立面圖(小野勝年測,北野正男製圖) · · · · · · · · · · · 24

V. 第十一洞　西壁立面圖(小野勝年測,北野正男製圖) · · · · · · · · · · · 27

VI. 第十二洞　横斷面圖(水野清一測,高柳重雄製圖) · · · · · · · · · · · · 30

拓　本　目　次

		參照頁
RUB. I.	A.楣拱龕(第十一洞 東壁 下層中央 交脚菩薩龕16)	50
	B.尖拱龕(第十一洞 明窓 西側 佛龕3)	44
	C.尖拱龕(第十一洞 明窓 東側 佛龕5b)	44
	D.浮彫塔形(第十一洞 明窓 東側 交脚菩薩龕3 右側)	44
	E.浮彫塔形(第十一洞 明窓 東側 交脚菩薩龕3 左側)	44
	F.浮彫塔形(第十一洞 明窓 東側 佛龕1 右側)	44
	G.浮彫塔形(第十一洞 西壁 上層中央 交脚菩薩龕14 左側)	51
	H.浮彫塔形(第十一洞 西壁 上層中央 交脚菩薩龕14 右側)	51
	I.浮彫塔形(第十一洞 南壁 下層西部 交脚菩薩龕39 左側)	47
	J.浮彫塔形(第十一洞 南壁 明窓 西側 佛龕1 左側)	44
	K.拱端獸形(第十一洞 南壁 下層中央 佛龕25a 左側)	48
	L.菩薩寶冠(第十一洞 南壁 下層東部 交脚菩薩龕21)	46
	M.菩薩寶冠(第十一洞 南壁 下層西部 交脚菩薩龕26a)	50
	N.菩薩寶冠(第十一洞 東壁 下層中央 交脚菩薩龕17)	50
	O.菩薩寶冠(第十一洞 東壁 下層中央 交脚菩薩龕16)	50
RUB. II.	A.楣拱額(第十一洞 東壁 下層中央 交脚菩薩龕18)	50
	B.楣拱額(第十一洞 東壁 下層中央 交脚菩薩龕19)	50
	C.楣拱額と脇侍菩薩(第十一洞 西壁 下層南端 交脚菩薩龕37)	53
	D.佛傳浮彫(第十一洞 西壁 上層南部 坐佛龕10)	52
	E.楣拱額(第十一洞 南壁 下層西部 交脚菩薩龕39)	47
	F.寶帳と楣拱額(第十一洞 門口 西側 二佛並坐龕)	43
	G.楣拱額(第十一洞 南壁 上層西部 交脚菩薩龕17)	47
	H.尖拱龕と奏樂天人(第十一洞 南壁 下層西部 二佛並坐龕26b)	47
	I.尖拱龕(第十一洞 西壁 下層南部 坐佛龕31)	52
	J.尖拱龕(第十一洞 西壁 下層南部 坐佛龕32)	52
	K.供養者と楣拱龕(第十一洞 西壁 上層中央 坐佛龕11,交脚菩薩龕12)	51
	L.屋形龕(第十一洞 西壁 上層南部 交脚菩薩龕13)	51

參照頁

RUB. III. A.獸形三つ斗と叉手束(第十二洞 前室 西壁 上層屋形龕) · · · · · 58
B.三つ斗と叉手束(第十二洞 前室 東壁 上層屋形龕) · · · · · · · · · 60
C.飛天(第十二洞 主室 西壁 中層) · 66
D.交龍(第十二洞 拱門 天井) · 64
E.鳥形浮彫(第十二洞 前室 西壁 上層屋形龕 南側) · · · · · · · · · · · 59
F.鳥形浮彫(第十二洞前室 西壁 上層屋形龕 北側) · · · · · · · · · · · 59
G.三角唐草飾(第十二洞 前室 東壁 上層 屋形龕 北側) · · · · · · · · · 58
H.三角唐草飾(第十二洞 前室 東壁 上層 屋形龕 南側) · · · · · · · · · 58
I.三角唐草飾(第十二洞 前室 西壁 上層 屋形龕 北側) · · · · · · · · · 59
RUB. IV. A-C.唐草文帶(第十二洞 主室 南壁 明窓 斜面部) · · · · · · · · · · · · · 65
D.蓮華文(第十二洞 明窓 天井) · 64
E.尖拱龕と樹下比丘像(第十二洞 明窓 東側) · · · · · · · · · · · · · · 64
F.尖拱龕と樹下比丘像(第十二洞 明窓 西側) · · · · · · · · · · · · · · 64
G,H.奏樂天人(第十二洞 前室 北壁 明窓 斜面部) · · · · · · · · · · · · · 60
I.唐草文帶(第十二洞 前室 北壁 明窓 斜面部) · · · · · · · · · · · · · 60
J.浮彫塔形(第十二洞 主室 東壁) · 66
K.浮彫塔形(第十二洞 主室 西壁) · 66
L.菩薩寶冠(第十二洞 前室 東壁 上層 屋形龕 本尊菩薩) · · · · · · · · 58
M.菩薩寶冠(第十二洞 前室 東壁 上層 屋形龕 右脇菩薩) · · · · · · · · 58
N.菩薩寶冠(第十二洞 前室 東壁 上層 屋形龕 左脇菩薩) · · · · · · · · 58
RUB. V. A.八角柱々頭(第十二洞 前室 南壁 東柱) · · · · · · · · · · · · · · · · · 57
B.八角柱々頭(第十二洞 前室 南壁 西柱) · · · · · · · · · · · · · · · · · 57
C.八角柱々基裝飾(第十二洞 前室 南壁 東柱) · · · · · · · · · · · · · · 57
D.八角柱唐草文帶(第十二洞 前室 南壁 東柱) · · · · · · · · · · · · · · 57

挿　圖　目　次

第一圖　雲岡 太和十三年佛龕(第十七洞 明窓 東側) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4—5

第二圖　雲岡 阿彌陀三尊(第十七洞 南壁 東部) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4—5

第三圖　ガンダァラ 三尊佛(東京 田路周一藏) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4—5

第四圖　雲岡 佛,菩薩手相各種(北野正男圖) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6,7

1—4 佛坐像合手形　5—7 佛坐像觸手形　8—15 佛坐像擧手形

16 佛倚像擧手形　17 佛立像特殊形　18 佛交脚像擧手形

19—21 佛立像擧手形　22—36 菩薩立像各種手形　37—40 菩薩交脚像擧手形

41 菩薩半跏像思惟形

第五圖　雲岡 天,ヤクシャ,バラモン,アスラ,化生,比丘,供養者各種(高柳重雄圖) ・ 16

1—5 天　6—9 ヤクシャ　10—11 バラモン　12—13 アスラ

14—15 化生　16—18 比丘　19—22 拱養者

第六圖　雲岡 侏儒各種(一)(高柳重雄圖) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

第七圖　雲岡 侏儒各種(二)(高柳重雄圖) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

第八圖　第十一洞—第十三洞 平面圖(水野清一測,高柳重雄圖) ・・・・・・・・・・・ 20

第九圖　第十一洞 明窓 佛龕配置圖(北野正男圖) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

第十圖　第十一洞 南壁 佛龕配置圖(北野正男圖) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

第十一圖　第十一洞 南壁 浮彫三層塔(水野清一測,北野正男圖) ・・・・・・・・・・・ 24

第十二圖　第十一洞 東壁 佛龕配置圖(北野正男圖) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

第十三圖　第十一洞 西壁 佛龕配置圖(北野正男圖) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

第十四圖　第十一洞 方柱 略測圖(北野正男圖)

a) 南面　b) 東面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

c) 北面　d) 西面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

第十五圖　第十二洞 前室 佛龕配置圖 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

第十六圖　第十二洞 前室 天井 略圖 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

第十七圖　第十二洞 主室 佛龕配置圖 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

第十八圖　第十二洞 主室 天井略圖 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

序　章

雲岡圖像學

雲岡石窟のつくられた五世紀後半では，まだインドにも，中國にも，圖像學(iconography)といふほどのまとまったものはなかった。けれども，佛，菩薩，天人の像がつくられると，どうしても，そのあひだに，ある種の約束のできることは當然である。まだ儀軌といふほどのものが，固定しなかった時代ではあったが，造像の意味は，おのづから手足のしぐさにあらはれ，身體のかざりのうへにしめされたのである。いま雲岡造像の諸形式を比較することによって，その當時の圖像學をくみたてゝみることはできるであらう。たゞ，これと互證すべき文獻のないことは，まことに遺憾であるが，それは，かへってこの固定しなかった圖像學の狀態をものがたるものであらう。

1

まづ最初に佛である。佛には坐佛と立佛とがあり，ときには交脚像や倚坐像がある。坐像には一尊像のほかに，二佛の並坐像があり，またたくさん並列した像もある。立像にも，まれには並列の像があり，第十一洞西壁(第八卷，Pl. 47)と第十三洞南壁(第十卷，Pl. 13)には，七體の並列立像をみる。七體の佛の並列は，いふまでもなく過去の七佛をあらはしたものである。毘婆尸(Vipaśyin)，尸棄(Śikhin)，毘舍浮(Viśvabhū)，倶留孫(Krakucchanda)，倶那含(Kanakamuni)，迦葉佛(Kāśyapa)に釋迦牟尼佛(Śākyamuni Buddha)の七佛である。[1] インド西北方のガンダーラでは，これに未來の佛，すなはち菩薩形の彌勒(Maitreya)をくはへた八體の列像をみる。[2] 第十三洞でも本尊の彌勒(交脚)菩薩をくはへると八體になる。[3]

第十一洞方柱上層(第八卷，Pl. 60—62)は三面に六佛の並立をみる。正面は交脚の彌勒菩薩である。釋迦牟尼佛だけほかにみとめれば，これも過去の七佛といふことになる。たとへば下層南面の佛立像を，それとみたてるのも一方法である。立った七佛はこの程度であるが，すわった七佛はいたって多い。まづ第十洞主室南壁の七佛(第七卷，Pl. 49)はすわってをり，これに第十洞本尊の彌勒(交脚)菩薩をくはへると八體の像になる。佛龕の拱額には，もっとも頻繁にあらはされ，ときに五佛になり，またときに九佛以上になることもあるが，それは場しょの廣狹によって省略され，累增されたものとおもはれる。

一龕內における二佛の並坐は雲岡に多い。ひきつゞき龍門石窟にもつくられたし，隋唐時代

にもおこなはれたが，雲岡ほどさかんなところはない。いふまでもなく，これは『法華經』(大正大藏經，第九卷，p. 32, 33)卷四，見寶塔品にみえる物語であって，一方は多寶佛(Prabhūtaratna Buddha)，他方は釋迦牟尼佛(Śākyamuni Buddha)である。釋迦牟尼佛が，微妙深甚の法華經をときたまふのを讃歎すべく，過去世の多寶佛が身體をくづさず，その塔中にあらはれ，釋迦牟尼佛をむかへいれたといふ。しかし，雲岡では，のちの造像にまれにみるやうに，一方が他をまねいてゐるすがたには，あらはされてゐない。だから，いづれを多寶佛，いづれを釋迦牟尼佛とはきめがたい。第十七洞の明窓(Fig. 1)には太和十三年(A.D.489)の佛龕があって，刻文のうちに多寶佛と釋迦牟尼佛の名をあげてゐる。それは，その下層にある二佛並坐の佛龕をさすものにほかならない。二佛並坐の像は雲岡以來さかんに中國でつくられたが，中央アジアやガンダァラにさかのぼることはできない。この方面でも『法華經』の信仰はさかんであったとおもはれるが，二佛並坐の像はない。たゞひとつみとめられるベゼクリック(Bāzāklik)第十一洞の二佛並坐は，時代もおくれ，様式も唐ふうで，逆輸入とみとめるのほかはない[4]。これに反し，中國では，その西陲敦煌の千佛洞にも，北魏にさかのぼる，古いものがみいだされる[5]。

定光佛。過去佛のうちで，なほ名稱のたしかに知られるものに定光佛(Dīpaṃkara Buddha)(燃燈佛)がある。定光佛は，かならず立像であらはされ，足下に儒童(Māṇava)のひざまづいて頭髮をしくすがたがある。定光佛は，のちに釋迦牟尼佛となる儒童に，佛となるべき記をさづけたのであり，このことは『過去現在因果經』(大正大藏經，第三卷，p. 620—622)にも，その劈頭にあらはれてくる。そこでは儒童の名を善慧(Megha)とよんでゐる。ガンダァラ[6]や，アフガニスタン[7]にも，これをあらはした圖像は，いたって多い。

過去佛で名稱の判然たるものは，これにつきる。その他はたゞ並列され，あるひは累重された坐佛群である。千佛といってよいであらう。つまり賢劫(bhadra kalpa)の千佛である。過去の莊嚴劫，未來の星宿劫に對して，現在の賢劫にあらはれるべき千佛である。クマラヂィヴァ譯『千佛因緣經』(大正大藏經，第十四卷，p. 66)によれば，過去七佛は，毘婆尸，尸棄，毘舍浮の三佛が過去莊嚴劫の第九百九十八佛，第九百九十九佛，第一千佛で，拘留孫，俱那含，迦葉，釋迦牟尼佛は，現在賢劫の第一，第二，

1 曇曜譯『大吉義神呪經』(大正大藏經，第二十一卷)卷一の劈頭(p. 568)に「七佛眞濟す。毗婆尸，尸棄，毘賒婆早，訖囉迦孫陀，迦那迦牟尼，迦葉，釋師子兩足之尊，大名稱あり，彌勒は兜率天にあり，大衆に圍遶せらる」といひ，七佛と彌勒の名を稱す。また，べつに卷二(p. 571)に「毗婆尸佛は無憂樹 aśoka のしたにあり，尸棄佛は分陀利樹 puṇḍarīka のしたにあり，毗舍菩佛は娑羅樹 śala のしたにあり，迦羅迦孫佛は尸利沙樹 śirīṣa のしたにあり，迦那迦牟尼佛は鬱曇婆樹 udumbhara のしたにあり，迦葉佛は尼居陀樹 nyagrodha のしたにあり，釋迦世雄は毗鉢羅樹 pippala のしたにあり，これ諸如來はこの樹によりて等正覺をなす。七佛世尊は大神力あり，呪を見持するものを長夜擁護し，つねに安吉ならしむ。經常の日ならびに諸宿會において，すべて凶患なく，ひとしく吉に同ぜしむ」といふ。七佛の名をいふとともに，その神力，利益をいふこと明晰である。これについで，また「一切の諸佛は大威德あり，一切の羅漢みな諸漏をつくし，後有をうけず，かくのごときの諸聖に，われいま歸依す。この實語をかつて，帝主を擁護し延祚無窮ならしむ」といふ。一切諸聖の威力あるをいひ，また帝祚の無窮をいのることをしめす。

2 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique du Gandhāra*, Paris 1905–1918, Tome II, Fig. 77, 457.

3 この交脚彌勒像と南壁七佛との關係については第十卷 p. 37 を參照。

4 A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Berlin 1912, Fig. 416.

5 P. Pelliot, *Touen-houang*, Tome 4, Paris 1921, Pl. CXCIII, 第百十一洞後壁。

6 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 139, 140, 141.

7 J. Meunié, *Shotorak* (Mémoires de la délégation archéologique française en Afghanistan, Tome X), Paris 1942, Pl. XI–XII.

第三,第四佛だといふ。第五佛の彌勒以下は,まだあらはれてゐない。實にたくさんの佛が待機の狀態にゐるのである。[1] これが衆生の希望であり,期待である。まんなかに一段大きな坐佛龕をおき(第七卷, Pl. 33, 34, 第八卷, Pl. 6),あるひはまんなかと四方に,やゝ大きな五つの坐佛龕をおく(第四卷, Pl. 9, 第五卷, Pl. 5)のは,一種の造形的アクセントかとおもふが,中心の大きな佛は,もっともちかい釋迦牟尼佛と解してもよからう。

しかし,さきの『法華經』見寶塔品をみると,多寶塔の開扉にあたって,釋迦牟尼佛の分身が諸方にあって,說法してゐるのをよびあつめたといふ。これでは二佛並坐の佛龕をとりまいた坐佛群は,あきらかにこの十方無數の分身佛と解される。それでは,一佛單坐の龕をとりまいた小坐佛群は賢劫の千佛であり,二佛並坐の龕をとりまいた小坐佛群は十方の分身佛だとの區別もできないことはない。また五つの坐佛龕を小坐佛龕の五方に配置したのは,五方,十方の分身諸佛をあらはすものと解するのも一方である。しかし,當時の造像事情からいへば,さうまで嚴密な解釋は不自然とおもふ。現に二佛並坐と一佛單坐とは交脚菩薩とのくみあはせにおいて,いつでも互用されてゐる。また,わが國の天武十四年(A.D. 686)長谷寺銅版には,二佛並坐の佛塔のほかに分身の說法佛あり,それとべつに小坐佛群がつくられ,しかも千佛多寶佛塔とよばれてゐる。だから,これらの坐佛群は賢劫の千佛でもあり,また十方の分身諸佛でもあったのでなからうか。いづれにしろ,この無數の佛が石窟の內外に充滿してゐることこそ,雲岡の雲岡たるすがたである。

三佛。雲岡の佛像には,もうひとつ,かはったものがある。それは三尊三佛の形式である。ふつう三尊佛といへば一佛二菩薩のことである。ところが雲岡では第十六,第十八,第十九,第二十洞,および第五洞はみな三佛の三尊である。第十八洞,第二十洞と第五洞には,三尊のあひだに二菩薩があるけれども,そのほかには菩薩もない。第十七洞は本尊が菩薩であるけれども,左右わきは佛像である。だから第十六洞から第二十洞にいたる曇曜五窟は,みな佛を脇侍としているのである。このことは,つぎの龍門賓陽洞にまでおよんでゐる。けれども,こゝでは三尊佛の制が確立してゐるから,三佛がそれぞれ二菩薩をともなってゐる。これでは,もはや,のちの三壁三佛制にちかづいたわけである。雲岡の三尊三佛は,けっして釋迦,阿彌陀(Amitābha),彌勒(Maitreya Buddha)の三佛を三壁におさめた三壁三佛制[2]とちがふ。アルフレッド・フゥシェ氏は,これをシュラヴァスティ(Śravastī)(舍衞城)における佛の大神變(Mahāpratihārya)と解してゐる。[3] それはシュラヴァスティ城外における外道六師(tīrthikas)との出あひ,神通力のあらそひであるが,釋迦は空中を自由にあるいて自在にふるまひ,また足下から焰をふき,頭上からつめたい雨をふらし,さらに二龍王ナンダ(Nanda)と,ウパナンダ(Upananda)の獻ずる金色千葉の蓮華にすわり,その蓮華から蓮華を生ぜしめ,層々相かさねて天にいたり,各層に自分と同形の化佛をすわらせたといふ。[4] フ

1 長廣敏雄『大同石佛藝術論』京都 1946年刊, p. 73–92.

2 水野,長廣『響堂山石窟』京都 1937年刊, p. 94.

3 A. Foucher, *The Beginnings of Buddhist Art*, London 1917, p. 166, 以下。

4 *Ibid.*, p. 147–184.　E. Burnouf, *Introduction à l'histoire du bouddhisme indien*, 2e éd., Paris 1876, p. 162 以下。

ゥシェ氏の著想はグプタ期の釋迦八相圖の碑からでゝゐる。この佛傳畫像に關するかぎり，シュラヴァスティの神變をあらはしてゐることにまちがひはない。しかし，それをやゝちがったガンダァラの碑像にあてはめ，また雲岡の佛像におよぼすことには，いさゝか根據が薄弱である。かれのあげたガンダァラの諸像は，けっして單純な佛傳像でない。雲岡でもまたさうである。水火の神變もなく，千葉の蓮華もない。もっと一般的な，もっと抽象的な佛の像かも知れないのである。たゞ，たんに分身の化佛を無數にあらはしたといふのであれば，なにもシュラヴァスティの大神變にかぎらないのである。六年苦行，六年說法ののち，はじめてカピラヴァストゥ(Kapila-vastu)城にかへり，實子ラァフラ(Rāhula)(羅睺羅)に初對面のときも，ひきゐる千二百五十の比丘たちを，みな釋尊とおなじすがたに變じたといはれる[1]。クムトラの壁畫はその一例であらう[2]。靈鷲山に『法華經』(大正大藏經，第九卷，p. 33)をといて，多寶塔のあらはれたときにも，十方無數の分身の諸佛をあつめたといひ，石室をでゝ，賢劫千佛の因緣をといたときにも，「千化佛あり山窟中に坐す」といふ[3]。またジェタヴァナ(Jetavana)園で『觀彌勒上生經』(大正大藏經，第十四卷，p. 418)をとかれたときにも，初夜分に身光あり，その光が段雲となり金色蓮華を雨ふらし，その光明中に無量百千の化佛があらはれたといひ，そのとき釋尊は廣長舌相をあらはし，千光明をはなち，一々光中に無量の化佛をあらはしたといふ。また『般若波羅蜜經』(大正大藏經，第八卷，p. 217)のばあひにも三昧王三昧にはいると，舌根より無量千萬億光をはなち，一々光中千葉寶花をいだし，一々寶座にみな化佛を現出したといふ。かういふ說き方は大乘經典の敍述に通有である。つまり時間的にも，空間的にも，無數の諸佛が遍滿することは大乘の根本的思想ともいへるであらう。だから，水火の神變もなく，千葉の蓮華もない雲岡の三佛を，シュラヴァスティの神變とみるわけにはいかない。むしろ，さういふ特定の情景をあらはすとみるよりは，かへって漠然と，諸佛の累積をあらはしたものとかんがへる方が，眞にちかいのでないかとおもふ。過現未にわたる千佛，十方の諸佛をつくるとおなじ意圖である。たゞその無數の千佛に，造形的のアクセントをつけるため，左右の二體だけが脇侍ふうに擴大されたのでなからうか。これとおなじ工夫は，千佛群のまんなか，あるひは，まんなかと四方に配置されたやゝ大きな坐佛龕にみとめられる。つまり教義的な配置でなく，造形的な工夫と解することが，もっとも自然な解釋ではなからうか。さうして，さういふ三體佛三尊の形式は，いくらか時代はおくれるにしても，すでに明白にガンダァラ(Fig. 3)に成立してゐるのをみる[4]。

阿彌陀佛(Amitābha Buddha)。過去佛をはなれて，名稱のあきらかなものをもとめると，阿彌陀佛と藥師佛(Bhaiṣajyaguru Buddha)とがおのおの一例づゝある。それは第十七洞南壁東部の一龕で，その脇侍をみると，一は寶冠に化佛が

1 曇曜，吉迦夜譯『雜寶藏經』(大正大藏經，第四卷) p. 496, 497.

2 A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 23.

3 クマァラヂィヴァ(鳩摩羅什)譯『千佛因緣經』(大正大藏經，第十四卷) p. 66.

4 フゥシェ氏のあげた諸例は，雲岡三體佛の原型としては，不適當である。むしろ A. von Le Coq, *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*, Vol. I, Berlin 1922, Pl. 9 および J. Meunié, *Shotorak*, Pl. XI が適例である。

第一圖 雲岡 太和十三年佛龕 (第十七洞 明窓 東側)
Fig. 1. Yün-kang, Niches dated A.D. 489
(Cave XVII, Window).

第二圖 雲岡 阿彌陀三尊 (第十七洞 南壁 東部)
Fig. 2. Yün-kang, Amitābha Buddha Trinity
(Cave XVII, South Wall).

第三圖 ガンダァラ 三尊佛
Fig. 3. Gandhāra, Buddha Trinity.

あり，觀世音菩薩，他は寶冠に寶瓶があり大勢至菩薩(Mahāsthāmaprāpta)とわかり，自然その本尊は阿彌陀佛と推定される。まさしく『觀無量壽經』(大正大藏經，第十二卷，p. 343, 344)にいふ阿彌陀佛(Fig. 2)である。[1] 本尊は結跏趺坐し，右手をあげ左手を膝においてゐる。

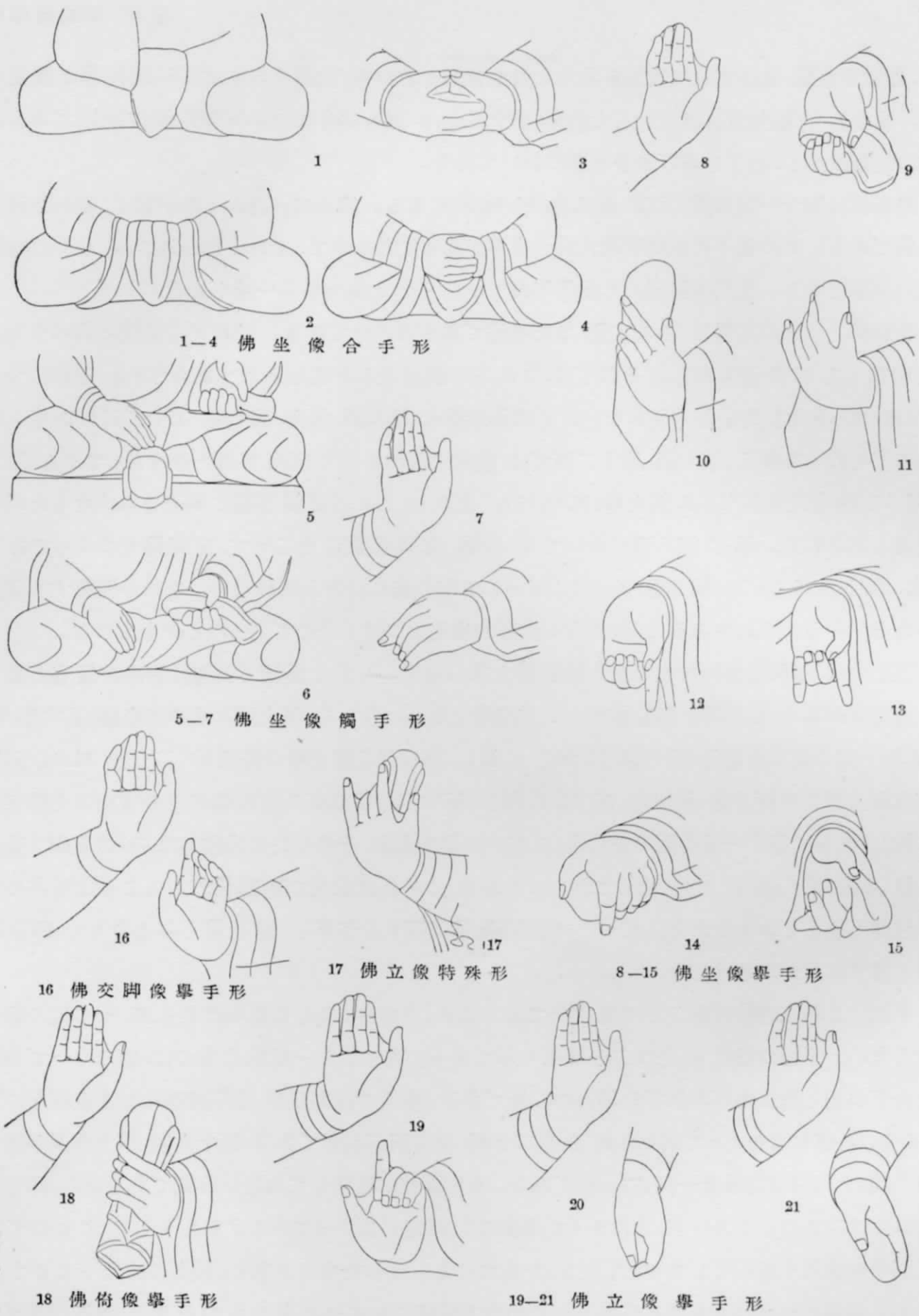
藥師佛は第十一洞西壁(本書，第八卷，Pl. 65A)にある。約0.21mばかりの小龕で，なかは禪定の坐佛である。この龕下に藥師瑠璃光佛の文字が彫ってあるので，それと知れるのみ，なんの特徴もない坐佛である。龍門古陽洞にも造像記によって，それと知られる一體がある。[2]

交脚佛。以上の諸佛は，みな立像，また坐像であらはされてゐる。けれども雲岡の佛のうちには交脚像もあり，倚像もある。それでは，これらの佛はなんとよばれたであらうか。それについて，まだ，はっきりした手がゝりがない。交脚佛は第七，第八洞，第九，第十洞，第十二洞にかぎられてゐる。そのうち第九，第十洞，第十二洞では，前室上層において交脚菩薩とむきあってゐる(第六卷，Pl. 17, 18，第七卷，Pl. 5, 8，第九卷，Pl. 9, 17)。だから，これは交脚菩薩に調子をあはせるための姿態だと解される。第七，第八洞においても，坐佛，交脚菩薩にまじへて，交脚佛をつくってゐる(本書，第四卷，Pl. 55, 71，第五卷，Pl. 49)。けっして中心龕にはあらはれない。なにか照應する佛龕がかならずある。それをみると，おそらく造形的變化をつけるためであったとおもはれる。

倚坐佛は，隋代以後になると多く彌勒佛をあらはす。[3] しかし雲岡では彌勒菩薩の像容としては交脚菩薩があり，倚坐佛が彌勒佛だという證據はない。むしろ，第九洞本尊の倚坐佛(第六卷，Pl. 70)が第十洞の交脚菩薩像(第七卷，Pl. 66B)に對し，第八洞北壁上層の倚坐佛(第五卷，Pl. 34)が第七洞北壁上層の交脚菩薩(第四卷，Pl. 33)に對し，第六洞方柱西面の倚坐佛がその東面の交脚菩薩像に對し，さらに第十一洞南壁中央佛龕(S. 25a)の倚坐佛が，そのしたの佛龕(S. 25b)の交脚菩薩像と一組(本書，第八卷，Pl. 12)になってゐるのをみると，それは未來の彌勒佛であるよりは現在の釋迦牟尼佛であるとおもはれる。だから，雲岡倚坐佛に關するかぎり，彌勒佛とみるよりも，釋迦牟尼佛と解する方がふさはしい。

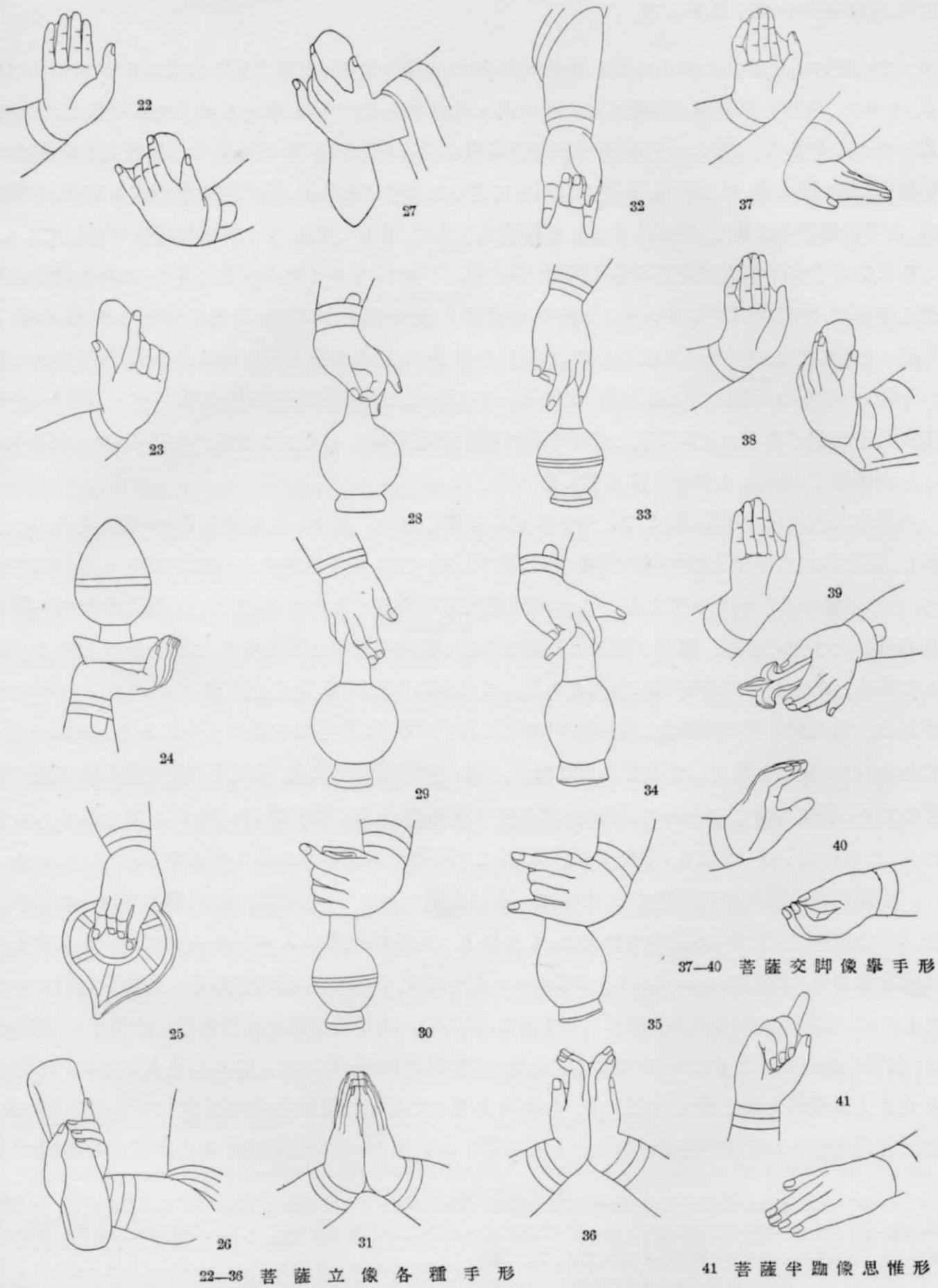
手相。これら諸佛のあひだには，たってゐるとか，すわってゐるの區別はあるが，その他の變化はすくない。手相の變化も，たゞ二三あるのみである。もっとも一般的なものは，膝のうへであはせた合手の相と胸にあげた擧手の相との二種である。[4] 擧手のばあひは，左手は膝におき衣端をにぎってゐる。石窟本尊をもって例をとれば，第二十洞，第五洞が前者であり，第十九洞，第十六洞が後者であり，第十八洞は特殊な一例(Fig. 4)である。まだ儀軌の確立してゐない時期であるから，禪定印(dhyāna mudrā)とよぶのはふさはしくないが，とにかく結跏趺坐し禪定(dhyāna)にはいってゐるすがたをしめすものである。兩手を衣にくるんでしまったものと，おもてにあらはしたものとあり，後者には上下にかさねたものと前後にかさねたものとがある。このうち前後にかさねたものを[5]のぞくと，おほむねガン

1 水野清一「雲岡の阿彌陀像について」(支那佛教史學，第五卷二號)京都 1941年刊，p. 77–79.
2 水野，長廣『龍門石窟の研究』東京 1941年刊，p. 308.
3 同書，p. 138.　4 同書，p. 137，脚註 15.　5 この形式がどこで，いつ成立したかはあきらかでない。



1–4. Hands in Lap (Buddha seated cross-legged). 5–7. One Hand Touching Object (Buddha seated cross-legged). 8–15. Right Hand Raised, Left Hand in Various Positions (Buddha seated cross-legged). 16. Right Hand Raised (Buddha seated with ankles crossed). 17. Right Hand Hanging, Left Hand Raised (Standing Buddha).

第四圖 雲岡 佛, 菩薩 手相各種



18. Right Hand Raised (Seated Buddha). 19–21. Right Hand Raised (Standing Buddha). 22–36. Hands in Various Positions (Standing Bodhisattva). 37–40. Right Hand Raised, Left Hand in Various Positions (Standing Bodhisattva). 41. Hands in Meditative Attitude (Bodhisattva seated with legs folded).

Fig. 4. Hand Postures of Buddha and Bodhisattva in Yün-kang.

ダァラにそのもとがみとめられる。擧手の右手は，衣端をにぎった左手をともなふのがふつうである。しかし，末期の第六洞式佛像には左手をたゞたれてふせたもの，掌をしめしながらも二，三指を屈したものがある。第十一洞東壁の初轉法輪像(E.30)(第八卷, Pl. 27)，第十二洞前室北壁東龕の初轉法輪像(第九卷, Pl. 29)も，左手に衣端をにぎったものであるが，第六洞東壁南龕の初轉法輪像は，右手の擧手形に對し，左手はすこしさげ手首をあげ，掌をしめしつゝ第三指以下を屈してゐる。これに似た手相は第九洞前室西壁交脚佛(第六卷, Pl.18)にもみとめられる。もし，これを說法の特相とすれば，中央アジアやガンダァラ像の，いはゆる說法相(dharmcakra mudrā)[1]をうけついだとはいひながら，かなりちがったものだといはなければならぬ。右手の擧手は，のちの施無畏(abhaya mudrā)の印であるが，左手のこの種の手相は，のちの與願(varada mudrā)の印ともちがってゐる。いづれにしても佛菩薩の擧手形は，すくはるべき衆生に對する相である。これに反し合手の形は靜寂自省の相である。この二つの手相(Fig. 4)がもっとも普遍的で，もっとも多いのは當然であらう。

第十八洞本尊の手相は，このどちらの型にも屬しない。どういふ意味をもつかわからない。しかし，第十洞主室南壁上層西部の佛龕(第七卷, Pl. 55)では，左手は膝のうへで衣端をとるかのごとく，右手は膝のうへにたれてゐる。これは降魔成道の佛龕であるから，まさしく降魔物語の一節をあらはした手相である。釋尊は魔王との問答に，大地神(Mahāpṛithivī)の證明をもとめて大地を指さしたといはれてゐる。[2]その歷史的な瞬間の手相である。これがのちに降魔，もしくは觸地(bhūmisparśa mudrā)の印とよばれるのである。第八洞東壁の降魔龕(第五卷, Pl. 69)は右手は擧手，左手は右膝のうへにおく。衣端をとってゐないが，大地を指さしてゐるふうはない。第六洞西壁の降魔龕，第三十五洞南壁の降魔龕は破損のため，手相不明で，かへって，第十三洞南壁下層西龕(本書，第十卷, Pl. 19)にこれをみる。もちろん，これはガンダァラにも，[3]中央アジアにも，この原型とみとめられるものがある。

雲岡初期の第八洞式佛像では，たいてい衣は左肩をおほひ，そのはしが右肩にかゝってゐる。合手形の坐佛は，さういふ衣のつけ方と，もうひとつ左右の肩にシムメトリックにかゝるものとの二種類がある。兩肩にシムメトリックにかゝったものは，いはゆる通肩である。衣端を右肩にかけたものは，右肩の大部分があらはになってゐて，のちのいはゆる偏袒右肩である。けれども，雲岡では，右肩のあらはれたものが，かへってすくない(本書，第四卷, Pl. 92)。ほとんど大部分は，右肩から大きく衣端がたれさがり，右まへをすっかりおほってゐる。偏袒右肩の原型にはちがひないが，偏袒右肩式といふには不適當である。むしろ非シムメトリックの通肩式である。だから雲岡では

1 ガンダァラで，說法の手相をみるのは特殊な佛，菩薩像や碑像のみである(A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 76, 77, 405, 406–408, 456, 458, 459, 482, 483, 485)。またグプタ期に多い(*Ibid.*, Fig. 209, 489, 507)。しかし，佛傳圖には擧手と合手の手相が多い。初轉法輪の場面でも擧手形である(*Ibid.*, Fig. 220)。

2 グナバドラ(求那跋陀羅)譯『過去現在因果經』(大正大藏經，第三卷, p. 640)卷三，には「魔の菩薩にかたりていふ，『われの果報はこれなんぢの知るところ，なんぢの果報はたれかまた知るものぞ』，菩薩のこたへていはく，『われの果報はたゞこの地知れり』と，この語を說きをはるに，ときに大地は六種に震動し，こゝにおいて地神は七寶の瓶をもち，なかに蓮華を滿たし，地より湧出し魔にかたりていふ……」とある。

3 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 201, 203.

シムメトリックな通肩と，非シムメトリックな通肩との二種が，交互にあらはされるのである。さうして，この二つの型は，さかのぼってガンダァラにもみとめられる。[1]

これらは，もとより大衣とも，鬱多羅僧(uttarāsanga)ともいはるべきものであらう。偏袒右肩，もしくは非シムメトリックの通肩では，大衣のしたに左肩から右わきにかゝる内衣，もしくは，掩腋衣(安陀會)(antara-vāsaka)とでもよばるべきものがみえてゐる。[2] しかも，その内衣のふちには，ときにこまかい唐草文の文様帶があつてうつくしい。

佛の特相は三十二相八十種好といふ。三十二相については後秦のクマァラヂィヴァ(鳩摩羅什)(Kamārajiva)譯『大智度論』(大正大藏經，第二十五卷，p.90, 91)卷四に記述がある。その第三十一の頂髻相(uṣṇīṣa)は肉髻ともいはれる。[3] これは雲岡の佛にもみなそなはってゐる。けれども一般に頭髮はきざんでゐない。頭髮をあらはすものは，第十六洞本尊，第六洞の諸佛である。これらは，みな第六洞式の佛像で，末期のものにかぎられてゐる。これも波狀の頭髮ばかりで，螺髮はない。第十一洞西壁七佛も，そのとほりである。これは中央アジア，[4] ガンダァラ[5]にもさかのぼるが，ガンダァラのものは，たんに波狀といふよりも，もっと寫實的である。

第三十二の白毛相(ūrṇa)は白毫ともいふ。[6] 雲岡では，あまり一般的でない。初期のものには，間々あらはれるが，末期のものにはみないやうである。たとへば第二十洞光背わきの佛龕などにみられる。これも中央アジア，[7] ガンダァラ[8]佛の傳統である。ガンダァラでは佛，菩薩に通じてあらはれてゐるのが注意される。

第五の手足指綾網相(jālāvanaddha-hasta-pāda)は，指のあいだにあるみづかき(蹼)である。これも一般的にあらはされる(Pl. 23, 24)が，第十八洞本尊のはとくに顯著である。末期のものには，あらはれることがすくないし，顯著でないやうである。これもガンダァラ[9]以來の傳統である。

第三の長指相には「指は纖長にして端直，次第は嚴好にして，指節は參差たり」といふ。[10] これも，いちおう，みとめられるとしてよいであらう。その他の相は，一々佛像のうへにみとめられないが，もうひとつガンダァラ佛[11]のながれをくむものとして指摘できるものは口ひげである。たとへば第十八洞脇佛にみられる綠青の口ひげは，もとのものであらう。第二十洞本尊の口ひげは，うすくではあるが，あきらかに彫りだされてゐる。[12] 古式の金銅佛においても，この種の口ひげは，しばし

1 A. Foucher, *Ibid.*, Fig. 134, 201, 203.
2 本書，第四卷，p. 48.
3 竺佛念譯『長阿含經』(大正大藏經，第一卷) p. 5.
4 A. von Le Coq, *Spätantike*, Vol. I, Pl. 23 a.
5 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 445, 446, 448, 449, 452, 456. J. Barthoux, *Les fouilles de Hadda* (Mémoires de la délégation archéologique fransçaise en Afghanistan, Tome IV), Paris 1930, Fig. 1–29.
6 竺佛念譯『長阿含經』p. 5.
7 A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, Berlin 1920, Pls. XXX–XXXI, XXXIV–XXXV. Le Coq, *Spätantike*, Vol. VII, Berlin 1933, Pl. 22.
8 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 445, 446, 448, 449, 452, 456. J. Barthoux, *Les fouilles de Hadda*, Pl. 1–29. 白毫のないものがかなり多い。
9 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 452, 453.
10 『大智度論』(大正大藏經，第二十五卷) p. 90, 91.
11 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 189, 212, 242–245, 252, 254.
12 水野清一「中國における佛像のはじまり」(佛教藝術第七冊) 大阪1950年刊，Fig. 7, 8.

ば，みとめられるところである。

なほ三十二相の第十四に金色相をかぞへてゐる。金銅佛では，まさにそのとほりであるが，雲岡の石佛では金色をぬったものはない。衣を朱，綠青にぬりわけて，肉體は白くのこすか，白土をぬったのが一般で，第十八洞脇佛は後者の例，第十一A洞の諸尊（本書，第十卷，Pl. 4）は前者の例である。

2

菩薩については，まづ獨尊の菩薩と脇侍の菩薩とがかんがへられる。雲岡における獨尊の菩薩は交脚菩薩にかぎられる。立像はない。たゞ第四洞西壁の一小龕（本書，第一卷，p. 54）が例外的に獨尊の菩薩立像である。獨尊の菩薩立像は，北魏の造例[1]によると，かならず觀世音菩薩（Avalokiteśvara）である。現世の諸災厄をはらふといふ點から，この時代にもさかんにつくられたが，多くは青銅像，金銅像であったらしい。石像になるとまれで，雲岡にも，うへの一例だけである。これに反し，交脚菩薩像はいたって多い。ふつう釋迦牟尼佛とくんで一組の造像としてあらはされるが，第十洞では本尊としてあらはされてゐる。第十洞本尊の交脚菩薩は第九洞本尊の倚坐佛に對するものであり，第七洞北壁上層の交脚菩薩は第八洞北壁上層の倚坐佛に對するものであり，第一洞本尊の交脚菩薩は第二洞本尊の坐佛に對するものであり，その他各所の小龕交脚菩薩も，多くは小龕の佛像とあひくんでゐる。だから，これを現世の釋迦牟尼佛に對する未來の彌勒菩薩とみるのは自然である。しかも，第十七洞明窓東側の佛龕には，これを明記した例もある。この刻文には多寶，釋迦，彌勒の名があがってゐるが，多寶佛，釋迦佛は，その下層の二佛並坐をさし，彌勒は上層の交脚菩薩をさすのである。彌勒を交脚菩薩であらはすことは，龍門の古陽洞をはじめ，その他にいくらも例がある。[2] したがって，交脚菩薩が彌勒であることは，まったく異論の余地がない。さうして，この像は中央アジアにも，アフガニスタンにも，ガンダァラにも，その原型を暗示するものがある。

キジィル（Kizil）では菩薩洞（Bodhisattva-Höhle）の前壁半圓部[3]にあり，合唱洞（Musikerchor-Höhle）の前壁半圓部[4]にあり，第三群マァヤァ洞（Māyā-Höhle）の前壁半圓部にあり，[5] 孔雀洞（Pfauen-Höhle）天井の一隅にもあり，[6] グリュンヴェデル氏はみな彌勒菩薩だと解してゐる。前壁半圓部に彌勒をゑがいたのは，おそらく後壁正面が釋迦牟尼佛を本尊とするからであらう。

1 大村西崖『支那美術史彫塑篇』東京 1915年刊，p. 132, 186–188, Fig. 465, 469, 470.

2 水野，長廣『龍門石窟の研究』Fig. 90–93.

3 A. Grünwedel, *Altbuddhitische Kultstätten*, p. 59, Fig. 118.

4 A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, II, Fig. 8; たゞこの菩薩は足のかがとが接してゐるのみで，まじはってはゐない。

5 A. von Le Coq and E. Waldschmidt, *Die Buddhistische Spätantike*, Vol. VI, Berlin 1928, Pl. 17.

6 A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Pl. XI–XII.

アフガニスタンのバァミヤァンでは坐佛の窟の天井[1]にある。これは坐佛の本尊を釋迦とみて，それに對する造像であらう。ガンダァラにも交脚菩薩は，かなりある[2]。チャルサダ(Charsada)の浮彫像でも，サフリ・バフロル(Sahri-Bahlol)の臺座畫像でも，ラホゥル博物館の畫像でも，つねに合掌の大衆が說法を勸請してゐるやうである。また前者はモハメット・ナリ(Mohamed-nari)出土の畫像，タクティ・バハイ(Takhti-Bahai)出土の畫像にみる彌勒立像のやうに手に水瓶をもってゐる[3]。それでフゥシェ氏は水瓶のあるものを彌勒像とみとめ，またサフリ・バフロルの獨立の交脚像も，水瓶はもたないが，彌勒像とみとめ，さらに雲岡の交脚菩薩まで彌勒像と解してゐる。この解釋はたゞしく，まさしくトゥシタ(Tuṣita)(兜率陀)天にゐる彌勒菩薩であらう。そこで雲岡にも水瓶をもった彌勒像があるかどうか，立像の[4]，また坐像の彌勒像があるかどうか。菩薩の坐佛はもとよりない。立像は脇侍にかぎられるが，脇侍はしばしば水瓶をもってゐる。しかし，これが彌勒像だといふ根據は，まだえられない。

さらにひるがへって，雲岡における交脚像の手相(Fig. 4)をみると，二つの種類がある。一は第六洞方柱東面の交脚像のやうに，左右の手を胸まへにあげ，上下から相うけてゐる。これは一般にガンダァラ[5]，中央アジアなどにみる說法相の變化とみられる。いまひとつは，第十三洞の本尊(第十卷，Pl. 42)や，第三上洞の本尊(第一卷，Pl. 59)のやうに，右手をあげ，左手を膝においてゐる。これは雲岡における擧手形の一變型である。やはり衆生に對する，すくひのすがたといふべきであらう。

ガンダァラの彌勒像には，まだ寶冠に化佛をいたゞいたものはない。しかし，雲岡では化佛のあるのがふつうである。これは劉宋の沮渠京聲譯『觀彌勒菩薩上生兜率陀天經』(大正大藏經，第十四卷，p. 419)に「その天寶冠は百萬億色あり，一々の色中に無量百千の化佛あり，諸化菩薩もって侍者となす」といふにあたる。なほ，この經には七寶の大獅子座(simhāsana)のあることをいひ，寶帳のあることをいひ，また寶帳に寶鈴をかけ，寶帳のうへに羅網をかざるをいふ。獅子座，寶帳のまうけはまさに，雲岡の表現どほりである。ガンダァラその他には，かへってみない。寶冠の形式は，中央アジア以來のいはゆる三面寶冠で，圓板形のものが三方にある。しかし雲岡交脚菩薩の寶冠は，中央の圓

1 A. et Y. Godard et J. Hackin, *Les antiquités bouddhiques de Bāmiyān* (Mémoires, de la délégation archéologique française en Afghanistan, Vol. II) Paris et Bruxelles 1928, Pl. XXVII.　B. Rowland, *The Wall-paintings of India, Central Asia and Ceylon; A Comparative Study*, Boston 1938, Pl. 10, なほ 53メートル大像窟の天井にある菩薩も，兩足のくみかたがやゝちがふけれども，同類とかんがへられる。J. Hackin, *Nouvelles recherches archéologiques à Bāmiyān*, Paris 1933, Pl. XXIV, XXVI. また，カクラク(Kakrak)祠堂窟の頂上，およびまはりにある坐位の菩薩像も彌勒像らしくおもへる。*Ibid.*, Pl. LIII, LXXII.　ショトラックにも二，三ある。J. Meunié, *Shotorak*, Pl. XIV, XV.

2 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 348, 416, 426, 459, p. 234, 235.　A. Grünwedel, *Buddhist Art in India*, London 1901, Fig. 7.

3 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 77, 457.

4 たゞ立像の金銅佛に往々彌勒の名をもったものがある。住友家藏太和二十三年佛立像(『泉屋清賞』Fig. 169)，ダイエタ大使藏太和十六年佛立像(人文科學研究所 考古資料 6229)等は，みな像が立像で，彌勒の名がみえてゐる。

5 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 413, 415, 427, 429.

板上に新月形がある。そのうへ，うしろには三角形の布片がたれ，また，ながい布片がひるがへってゐる。ガンダァラには三面寶冠はない。たゞ頭布をまいて，ま正面に圓形のかざりをつけるのみである。新月形もない。たゞ布片のひるがへったものはみるが，それがいちばん雲岡に似てゐるのはアフガニスタンのものである[1]。このやり方は，イラン系の王冠に，つねにみるもので，イラン的である。そのうへ，この像のポゥズそのものも，いたってイラン的なのである[2]。

文殊菩薩。彌勒菩薩についでみられるのは文殊菩薩(Mañjuśri)である。しかし，これは特殊なあらはれ方をする。主尊でもなく，脇侍でもない。すなはち維摩居士(Vimalakīrti)の病氣を見まひ，これと對問するものとしてあらはされてゐる。病中の維摩居士は牀上に安坐するのに對し，文殊菩薩は腰をかけるか，すわってゐる(本書，第一卷，Pl.14，第四卷，Pl. 123)。『維摩詰所說經』(大正大藏經，第十四卷，p.546，547)にあるやうに牀座が飛來し，舍利弗(Śāriputra)が點景されることもあるが，文殊菩薩そのものには，なんの特徵もない。たゞ二三のばあひに，如意(anuruddha)をもってゐるだけである[3](第五A洞南壁)。それも，たゞほそながい棒で，その先端がやゝまがってゐるのみである。このばあひ，文殊が如意をもつのは，それがつねに說法講讚にもちひられてゐるからであらう。ところが，この維摩居士と文殊菩薩との對問像は，中央アジアやガンダァラには，まったくみられない。二佛並坐のみられないのとともに不思議なことである。

脇侍の菩薩としては半跏像と立像とがある。まれには象にのったものもある。象にのったものは，いふまでもなく，普賢菩薩(Samantabhadra)である。いまみられるのは，たゞ第十三洞南壁門口のうへの追刻小龕(第十卷，Pl.17B)と，第十三A洞南壁の小龕(第十卷，Pl. 114)とにかぎられてゐる。したがって，こゝでは太和の末年以後(A.D. 499—)につくられたものであらう。しかし，龍門時代には，ほとんどみないが，北齊，隋にはまゝ造例がある[4]。雲岡のばあひは，中尊がたゞの坐佛で，釋迦牟尼佛であるらしい。『法華經』(大正大藏經，第九卷，p. 61)「普賢菩薩勸發品第二十八」によると，普賢菩薩は，釋迦牟尼佛の法華經をときたまふところに，東方寶威德上佛(Ratnatejobhyud-gatarāja)の國よりきたり，佛滅後の『法華經』を護持するをちかひ，白象王にのって人々の諸害を，のぞかうといったといふ。これも，また法華經信仰の，ひとつのあらはれである。

半跏像[5]の脇侍は，本尊が彌勒の交脚菩薩にかぎられる。第六洞明窓の左右龕のやうに，半跏像獨尊の龕とみえるものでも，左右一對むかひあってゐるのは脇侍的な構成である。この半跏像は片脚を結跏からはづして，たれてゐるのみでなく，片手を頰にあてゝゐる。つまり思惟の相である。

1 A. and Y. Godard and J. Hackin, *Les antiquités bouddhiques de Bāmiyān*, Pl. XXVII.

2 O. M. Dalton, *The Treasure of the Oxus*, London 1926, Pl. XXXVI–XXXVIII.

3 如意は，說法講讚につかはれたため，こゝにあらはされたのであらう。

4 水野清一「開皇二年四面十二龕像に就いて」(東方學報，京都第十一冊一分)1940年刊，Fig. 2.

5 太子思惟像といふことばは古くからあるが，半跏とはいはない。『四分律』(大正大藏經)第二十二卷，p. 930)比丘尼捷度之下によれば，半跏は，比丘の結跏趺坐に對する，比丘尼の坐法である。決してかういふものではあるまい。これは，むしろ，結跏趺坐をといた安坐のすがたである。こゝでは，たゞ通稱にしたがって半跏の語をもちひたのみである。

さうして，第二洞塔柱（本書，第一卷，Pl. 62B），第六洞明窓では，足下に馬がひざまづいてゐて，白馬カンタカとの別離の狀をあらはすがごとく，また第十七洞前室（本書，第六卷，Pl. 17），第十洞前室（第七卷，Pl. 8）では，樹葉が頭上をおほひ，樹下靜思の狀をあらはすごとくである。それに佛傳圖中では，しばしばシッダァルタ太子の思惟すがたとしてあらはれること，第六洞腰壁浮彫佛傳，第八洞主室東壁浮彫佛傳（本書，第五卷，Pl. 67）にみるごとくである。だからシッダァルタ太子苦悶のすがたであるとは，いちおう知られるが，それが太子思惟像の名でよばれてゐたことは，太和十六年（A. D. 492）の一碑像によって，たしかめられたのである。[1]

しかし，それにしても，交脚彌勒像の脇侍としてあらはされるのは，いったいどういふことであらうか。彌勒菩薩は一生補處の菩薩である。もう一度うまれかはれば佛になるのである。釋迦牟尼佛の，ぢきぢきの後繼者である。いまは兜率陀天（Tuṣita）にゐるけれども，やがてはこの世に佛としてあらはれて衆生を濟度する。シッダァルタ太子も，人生の苦を身をもって，くるしんではゐるけれども，やがては正覺して佛となり，衆生を濟度する。だから太子は，その傳記をかたる經典のなかで，しばしば菩薩の名でよばれてゐる。[2] といふより，菩薩のすがたは，逆にこの世における高貴の存在であった太子などから，逆に案出されたものである。かういふ菩薩と太子との類似の性格が，その結合をもたらしたのであらう。それとともに中尊の交脚といふ特殊な姿態が，また半跏思惟といふ特殊な脇侍を要求した造形的な面も，わすれるわけにゆかない。この像は，その後もさかんにつくられ，彌勒菩薩に轉化してゆくのであるが，唐以後には，あまり，あらはされなかったやうである。

中央アジアにもガンダァラにも，もとよりこの形式はある。[3] しかし，雲岡よりはもっと自由な姿勢である。ところが，ガンダァラでは太子像といふよりは，他の菩薩像である。むしろ觀世音菩薩とか彌勒菩薩であって，太子像であるといふ證據はない。浮彫佛傳をみても，樹下靜思の像は結跏趺坐，合手禪定の相，[4] 白馬との決別も佇立のすがた，[5] たゞ夜半に床をでゝ婇女の睡眠をみるすがたのみが半跏像で，額に指をあてたもの[6]をみる。それから，ガンダァラの末期とおもはれるが，アフガニスタンでは，すでに交脚菩薩を中心にして，半跏思惟の脇侍をもった三尊形式が成立してゐた。[7] しかし，これがシッダァルタ太子の思惟像とかんがへられた證據はべつにない。かへって，太子思惟像ではないらしいのだが，これが中央アジアをへて，雲岡につたはるうちに，つひ太子思惟像になってしまったものらしい。

脇侍の立像はその個性がはっきりしない。ことに雲岡のやうに三尊形式が確立せず，その他

1　水野清一「半跏思惟像について」（東洋史研究，第五卷四號）京都 1640年刊，p. 49.

2　たとへば竺法護譯の『普曜經』（大正大藏經，第三卷）にも，グナバドラ（求那跋羅）譯の『因果經』（同卷）にも，菩薩といはれてゐる。

3　A. von Le Coq, *Die Spätantike*, Vol. I, Pl. 3.　A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 76, 77, 408, 410, 428.　ガンダァラでは戰車を驅る太陽神も，この半跏像であらはされてゐる。（*Ibid.*, Fig. 83）.

4　*Ibid.*, Fig. 175, 176, 413.　5　*Ibid.*, Fig. 184, 185.　6　*Ibid.*, Fig. 178.　7　Meunié, *Shotorak*, Pl. XI 38.

の讃仰供養者たちが自由にくはへられたり，けづられたりするところでは，脇侍がかならずしも菩薩であるとはかぎらない。天人(devatā)の場あひも，當然あるわけである。いまかりに單獨に侍側してゐるのを菩薩の脇侍，群をなして圍繞してゐるのを天人の脇侍としたが，もとより正確な區別とはいへない。龕の内外に大小の差をつけて，二組の脇侍をおく場あひがある。大きい方は菩薩，小さい方を天人とするのは常識的な解釋であらうが，確實なものではない。また寶冠をつけたものと，寶髻だけのものとにわけてみても，これも嚴密な區別にはならないであらう。

いまのばあひは，もっぱら立像の脇侍菩薩を問題にしてゐるわけである。そのうち名稱の知られるものは，たゞ前述の第十七洞南壁阿彌陀佛龕の脇侍たる觀世音菩薩(Avalokiteśvara)と大勢至菩薩(Mahā-sthāmaprapta)だけである。やゝ確實性はおちるが，第八洞南壁第三層東龕(第五卷，Pl. 99)の梵筴をもった文殊菩薩(Mañjuśri)，蓮華をもった觀世音菩薩も想起されるであらう。阿彌陀龕の大勢至菩薩は，なにかみじかい棒のやうなものをもってゐるが，觀世音菩薩は蓮華といへばいへるやうなものをもってゐる。

觀世音菩薩は一名を蓮華手菩薩(Padmapāni)といはれるやうに，北魏のときは，ふつう蓮華と水瓶とをもってゐる。[2] しかし，それだからといって，蓮華，水瓶をもち，あるひは蓮華をもったものを，みな觀世音菩薩だといふこともできない。それは蓮華，水瓶をもったものが，または蓮華をもったものが，しばしば相對してゐることがあるからである。雲岡のばあひは，漠然と脇侍菩薩といふよりほかはないのである。

たゞ第十一A洞北壁左右の脇侍(第十卷，Pl. 13, 20)であるが，これは，めづらしくも拂子をもってゐる。拂子をもち釋尊に侍側するのは，三道寶階して忉利天(Trāyastriṃśas)より降下する說話である。それによれば，拂子をとるのはブラフマァ(Brahmā)(梵天)である。しかし，これに對する脇侍は七寶の蓋をもち，インドラ(Indra)(天帝釋)だといはれてゐる。[3] こゝでは左右が，ともに拂子をもってゐる。儀式としてはブラフマァであっても，こゝではブラフマァであるより，たんなる脇侍像にすぎないであらう。

なほ脇侍像ではないが，第十一洞の太和七年(A.D.483)佛龕には觀世音，大勢至，文殊の名を記した三菩薩が並列され(本書，第八卷，Pl. 31)，當時信仰のあつかった菩薩の名が知られるのは，興味ふかいことである。[4]

莊嚴。菩薩は身上に莊嚴があり，佛にはない。菩薩は，この世における，もっとも高貴なすがたであらはされるが，佛は，その高貴なものからも解放され，なにものにもわづらはされぬ無莊嚴のすがたである。身にあるものは，たゞの僧衣，さうして三十二相八十種好の大丈夫相である。菩薩は下裳をつけ，天衣をつけ，寶冠をいたゞく。寶冠は中央アジアの系統をつたへる三面寶冠であ

1 A. Grünwedel, *Buddhist Art*, p. 203.　2 大村西崖『支那美術史彫塑篇』Fig. 465, 469, 470.

3 『法顯傳』(大正大藏經，第五十一卷)，p. 859. ほかの經典では，三道寶階の出現，ブラフマァ，インドラの扈從をとくものがあっても，白拂とか七寶の蓋には言及してゐない。法顯は，なにか，この種の因緣像を目睹して，かういったのであらう。

4 同書，p. 859 には中インドのことをいひ，こゝでは文殊師利，觀世音菩薩の供養されてゐることをのべてゐる。

る。圓板形のもの三つよりなるが，のちには山形のものにかはる。胸には頸かざりをたれてゐる。かんたんなときは，板狀の頸かざりであるが，複雜なときには，瓔珞の頸かざりがあり，また獸頭の金屬的頸かざりをくはへて三種になる。それから手くびには，また上膊には鐶釧をつけ，また耳朶に瓔珞のかざりをたれる。これらはすべてガンダァラの菩薩に[1]みるかざりである。中央アジア[2]をへて中國につたはったことは，あきらかである。たゞ，ガンダァラのものより，はるかに平板的になってゐることはあらそへない。ところが，これらの裝飾も，雲岡では最後に，第六洞でみるやうに，身體が天衣と下裳とにつゝまれて，頸かざりや鐶釧も省略されてしまふことになる。

交脚菩薩の手は二種(Fig. 4)ある。第十七洞本尊，第六洞方柱東面の菩薩は兩手を胸にあげ，上下に相うけてゐるらしい。おそらくガンダァラに多い，すわった菩薩の手相からきたもの，いふべくば說法の相である[3]。第十三洞本尊(第十卷, Pl. 42)，第七洞北壁上層本尊(第四卷, Pl. 33)，第三洞上室本尊(第一卷, Pl. 95)などは，右手は擧手，左手は俯手といふ，もっとも佛菩薩にふつうなかたちをとつてゐる。この擧手形はガンダァラの坐菩薩にはかへってすくない[4]。むしろ立った菩薩に多くみる[5]。

半跏思惟像には，きまって頰をさした手と膝にのせた手(Fig. 4)がある。ガンダァラでも，ロリヤァン・タンガイ(Loriyān-Tangai)の浮彫のごとく，半跏像は，これにちかいかたちをとってゐる[6]。

脇侍立像の手は，たいてい，そとがはの手をたれて衣端をとるか，水瓶(lota)をもつ。まれには，一方のとがった蓮瓣形の環をにぎる。うちがはの手は胸にあげ，蓮華の蕾とおぼしきものをもち，またまれに梵筴をもつ。手相，もちものなど左右相稱が多く，なに菩薩かの個性がつかめない。たゞ佛に侍する菩薩といふだけで，あまり特定な菩薩を意識してゐなかったものらしい。つまり合掌侍側の菩薩とおなじである。

3

佛，菩薩についてあらはれるのは讚仰の大衆である。あるばあひは脇だちとなり，あるばあひはとりまいた群集となり，またあるばあひには空中を飛翔する。經典には，菩薩について天(devatā)，龍(nāga)，ヤクシャ(夜叉)(yakṣa)，ガンダァルヴァ(乾闥婆)(gandharva)，アスラ(阿修羅)(asura)，ガルダ(迦樓羅)(garuḍa)，キンナラ(緊那羅)(kinnara)，マホラガ(摩睺伽)(mahoraga)，人，非人といふが，雲岡にあらはされるのは天，ヤクシャ，アスラばかりである。龍とガルダは，その本身のまゝで裝飾になり，たとへば拱端，あるひは拱梁においてあらはされる。ヤクシャは空中をかけめぐり，アスラは超人的な力をもつ。超人的なといふ點では，これらも天の

1 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 409–429.
2 A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, Pl. XI–XII.
3 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 423–426
4 *Ibid.*, Fig. 421.
5 *Ibid.*, Fig. 415–420.
6 *Ibid.*, Fig. 408. なほ Fig. 409, 410, 428 なども，おなじ手相かとおもふが，いまはみな破損して不明である。

第五圖 雲岡 天, ヤクシャ, バラモン, アスラ, 化生, 比丘, 供養者各種

Fig. 5. Varieties of Devatā (1–5), Yakṣa (6–9), Brāhmaṇa (10–11), Asura (12–13), Aupapāduka (14–15), Bhikṣu (16–18), Worshippers (19–22) in Yün-kang.

たぐひである。(Fig. 5)

雲岡の天人(devatā)は羅漢，ヤクシャとともに佛を讚仰し，あるときは合掌して左右にたち，あるときは頭上にとんで花をさゝげ，あるときは樂を奏し，または伎を演ずる。みな一樣にたかい寶髻をいたゞき，下裳をつけ，領巾(天衣)を肩にしてゐる。それは形式化してゐるが，いちおうは中央アジア，ガンダァラにさかのぼる形式である。たゞ，こゝの大きなちがひは男女の性別をつけてゐない點である。老幼も，まれにしかあらはされない。第八洞南壁の奏樂の天人(本書，第五卷，Pl. 91, 92)は童子である。第七洞，第八洞東西壁の塔形をさゝへた童子(第四卷，Pl. 58, 59, 76，第五卷，Pl. 56—58)，第九洞，第十洞，前室柱基の童子(第六卷，Plan V，第七卷，Plan IV)になると，天の童子といふよりはヤクシャから轉化したものである。

なほ天の童子といはるべきものに蓮上の化生(aupapāduka)がある。天の蓮華のなかに，うまれでたばかりの童子，淸淨無垢の存在である。これは，いたるところにあらはされ，第七，第八洞坐佛列像のあひだ(本書，第四卷，Pl. 92, 93，第五卷，Pl.84, 85)，第九洞門口や柱上の蓮華のうへ(第六卷，Pl. 9, 28)等のものがいちじるしい。

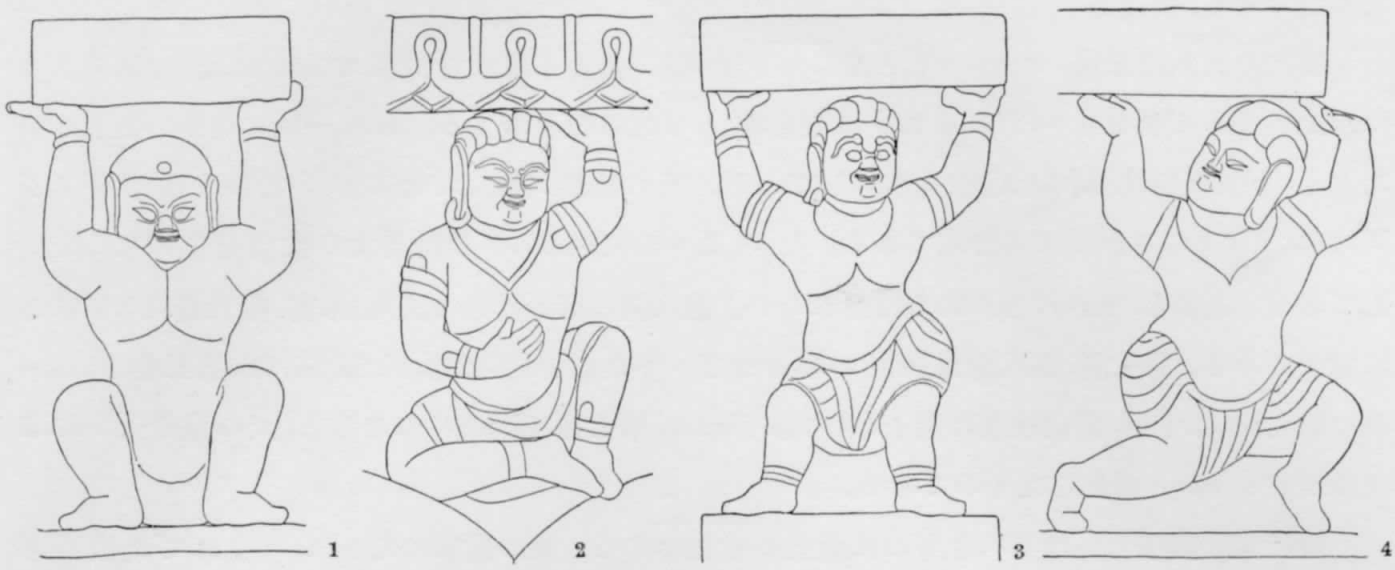
讚仰者のうちには，天にまじって，まれに逆髮形の像もたちならび，また飛翔してゐる。逆髮の原型としては，ガンダァラあたりのヤクシャの，もじゃもじゃした頭髮[1]がかんがへられる。かれらは，また腰布だけの裸形である。顏はしかみ，體軀はぢくんでゐる。こゝでも，そのとほりである。さうして肩からX字形に，たすきやうのものをかけてゐる。ガンダァラでは，物語のうちにヤクシャのでゝくることはあっても，たゞの讚仰者の列にくはゝるといふやうなことはない。

讚仰者のうちには，比丘のすがたもまじってゐる。比丘でも釋尊の生存中にゐあはせたものは，直接に釋尊の說法をきいた聲聞たちである。だから同時に阿羅漢果を成就した羅漢(Arhat)たちであったらう。これらは，つねに天に伍してあらはれる。たとへば第六洞東壁初轉法輪龕のごときものである。こゝにはカゥンディニヤ(Kauṇḍinya)(橋陳如)等の比丘があり，その背後に合掌の天人たちがゐる。第十一洞南壁小龕(第八卷，Pl. 21)では，合掌天人と合掌比丘とを二段にならべてゐる。雲岡では，まだ佛，菩薩，羅漢といふ五尊形式が確立してゐない。第九洞，第十洞前室北壁の上層龕(第六卷，Pl. 13，第七卷，Pl. 20)でも，菩薩がはりの脇侍として比丘のあらはされてゐることがある。第十八洞のごとく菩薩についてあらはされても，十人の阿羅漢たちは，これも佛の讚仰者である。これについで合掌天人の讚仰者たちがゐる。十人の阿羅漢には最長老のマハァカァシャパ(Mahākāśyapa)(大迦葉)と，最年少のアァナンダ(Ānanda)(阿難)だけが指摘できる。五尊形式が確立せず，羅漢たちが，たゞの讚仰者として，あまり重要な位置をしめなかったことは，[2]ガンダァラ，中央アジアでもおなじであった。

以上の讚仰者たちは天の讚仰者である。羅漢たちも，釋尊にぢかに接したといふ點から，一段

1 水野清一「逆髮形について－雲岡圖像學－」(佛教藝術，第十三冊)大阪 1951年刊。

2 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 329–331.



第六圖　雲岡侏儒各種(一)　Fig. 6. Dwarfs in Yün-Kang (a).

とたかい存在であった。これに對して地上の讃仰者たちがある。それはそのとき，その地に生をうけた北魏人である。この石窟に出入した善男善女とその導師(比丘)たちである。みなながい窄袖の外套をつけ，女は裳，男は袴子(クウヅ)をうがってゐる。頭上には頭巾，足にはふかぐつ(韡)をはいてゐる。これは鮮卑など北族の風俗である。比丘はながい僧衣をつけ，合掌するか，柄香爐をさゝげてゐる(第八卷，Pl. 31)。北魏人とはいっても，初期は一樣に朔北の鮮卑服をつけたが，のちには寬濶な中國衣冠の服裝をしたらしい。これは正眞正銘の，かれら自身のすがたである。かういふすがたを彫ることによって，造像の功德を身ぢかに感ずることができたのであらう。

門神(dvārapāla)としては釋尊の生涯に，かげのごとく扈從したといふ金剛力士(vajrapāni)がある。とにかく金剛杵(vajra)をもつといふことで識別されるが，介冑をつけた第九洞前室門わきのやうなもの(本書，第六卷，Pl. 11, 12)，介冑をつけないで筋骨に力をいれた第十二洞門口のやうなもの(第九卷，Pl. 43)，あるひは翼冠をつけ，三鋒の矟をもった第八洞門口のやうなもの(第五卷，Pl. 20)と變化がある。ガンダァラでは介冑をつけたものなく，かへって上體をはだかにしたものさへある。だから介冑もつけず，矟ももたないのが，より原初的で，それが後世ながく金剛力士の傳統となったのであらう。介冑も，矟もなければ，勇猛のほどもしめしやうがないので，兩眼をみひらいたすごい顏にし，手足に隆々たる筋肉をもりあげたのである。介冑をつけた金剛力士は雲岡，龍門時代に二三あるが，[3] これは中央アジアあたりの創作かとおもふ。キジィル(Kizil)暖爐A洞(Kamin-Höhle)および畫工洞(Maler-Höhle)の壁には，介冑の金剛力士がゐる。[4]

第八洞でも，第十洞でも，金剛力士のわきに介冑をつけ，矟をもった門神がゐる。義淨譯の『一切有部毘奈耶雜事』(大正大藏經，第二十四卷，p.283)卷十七には「門の兩頰において，まさに執杖藥叉(yakṣa)をつくるべし」といふ。隋唐の石像では力士のほかに神王像をつくることが石刻文にみえてゐ

1 水野，長廣『龍門石窟の研究』Pl. 33.
2 A. Grünwedel, *Alt-buddhistische Kultstätten*, Fig. 89, 339.
3 大村西崖『支那美術史彫塑篇』p. 438.

第七圖　雲岡侏儒各種(二)　Fig. 7. Dwarfs in Yün-Kang (b).

る。金剛力士をヤクシャの一種とみれば「執杖藥叉」は金剛力士をさすものといってよからう。しかし金剛力士を別格のものとすれば，稍をもち介冑をつけた神像が執杖藥叉にあたり，隋唐の神王にあたるとみてよからう。いひかへれば藥叉神將である。

もし，この門口の介冑神王をヤクシャ神王とし，四天王でないとすると，このヤクシャの統領である四天王は第八洞，第十二洞の佛傳龕(第五卷，Pl. 59，第九卷，Pl. 26)にしかあらはれてゐないことになる。佛傳龕でも，まだ介冑をまとってゐず，のちの四天王とは大きなちがひがある。佛法の守護，あるひは堂塔の守護として四天王はつくられてゐない。かへって，こゝにはアスラ(阿修羅) asura 神が，第十洞前室北壁彌須山わき(本書，第七卷，Pl. 23)のやうにゐる。三面四臂，もしくは五面六臂で，日月と弓矢とをもち，上體をはだかにしてゐる。[1] これと一連の神像は，すべてアスラといへるかどうかわからぬが，第七洞の門口(第四卷，Pl. 13–15)にあり，第九洞主室の天井(第五卷，Pl. 83, 84)，第十二洞主室の天井(第九卷，Pl. 69)にあり，第六洞，第三十九洞の天井にある。[2] たゞこれと似てはゐるけれども鳥にのり，牛にのることによって，その名稱のあきらかなヴィシュヌ Viṣṇu (毘紐天)，マヘシュヴァラ Maheśvara (大自在天)[3] は第八洞(第五卷，Pl. 13, 17)でも，第三十五洞でも，門神のごとく門口にゐ，また第十二洞(第九卷，Pl. 69)には主室天井にゐる。

讚仰者と門神(守護神)のほかに役務神といってよいものがある。そのひとつは，塔をになひ，

1　西晉法立，法炬譯『大樓炭經』(大正大藏經，第一卷，p. 287, 288)卷二，阿須倫品第五には，アスラの五城が須彌山下四十萬里にありといふ。キジィル溪谷洞(Schlucht-Höhle)には日月を手にした多臂神がゑがゝれてゐる。たぶん，アスラ神であらう。 A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, Pls. XXVI, XXVII, Fig. 4.

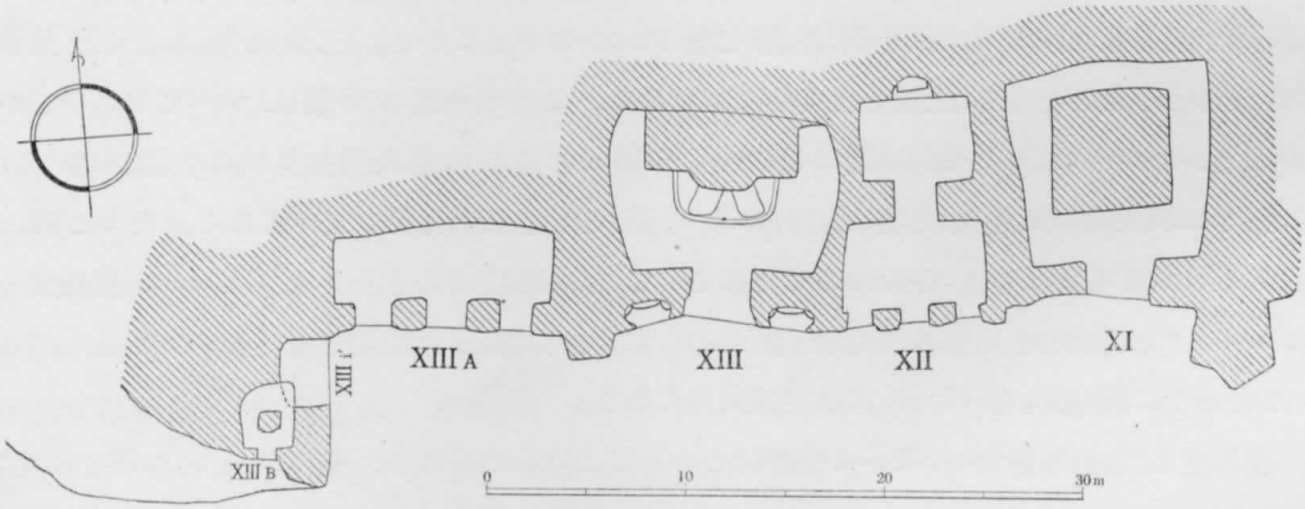
2　曇曜譯『大吉義神呪經』(大正大藏經，第二十一卷，p. 571)卷上には「八阿修羅あり，毗摩質多羅阿修羅王，修質多羅阿修羅王，羅睺阿修羅王，苦婆唎阿修羅王，鉢羅度阿修羅王，茂至連達羅阿修羅王，那纏豆囉阿修羅王，那菓阿修羅王等の眷屬輔相はこの呪を護るべし」といひアスラの加護を信じてゐる。

3　悪魔洞(Teufels-Höhle)および第三群マヤ洞(Māyā-Höhle)には三面多臂の牛にのった像がある。 A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 297, 410.

梁をさゝげるヤクシャたちである。こゝではその矮軀と異貌から侏儒とよんだが，ものをになふといふ點からはギリシャ，ロゥマのアトランテスである。第七洞，第八洞（第四卷，Pl. 58, 59, 76，第五卷，Pl.56—58）のやうに，つくばって塔をになふのを本義とし，第九洞前室（第六卷，Pl. 28）のやうに，あぐらで，ものをさしあげたのを第二次とし，第七洞門口のごとく，たちあがって塔をさしあげたの（第四卷 Pl.21）を第三次とし，またその各層の，童子のごとく跳躍してゐるの（Vol. VI. Pl. 22）は，さらにまた第四次の變化をしたものである。また梁や桁をさゝへたのも，第九洞列柱の桁（第六卷，Plan V），第九，第十洞前室天井の侏儒（第六卷，Pl. 33–35，第七卷，Pl. 38）を本義とし，第八洞主室上層の侏儒（第四卷，Pl. 46）を第二次とし，第十二洞前室天井の侏儒（第九卷，Pl. 38）を第三次とし，第八洞主室上層の侏儒（第五卷，Pl. 40）を第四次の變化とする。

かうした，ものをさゝへるヤクシャとちがふが，交脚菩薩，すなはち彌勒の足をさゝへて地中より上半身をあらはした女神がある。寶冠をつけ，胸がふくらんでゐる。大地母神であるといへよう（第一卷，Pl. 34, 114，第九卷，Pl. 10）。ガンダァラでは降魔成道佛の足下に大地母神（Mahāpṛithivī）をみるが[1]，交脚像，すなはち彌勒像にほどこしたものはない。

1 A. Grünwedel, *Buddhist Art*, p. 100. A. Grünwedel, *Alt-kutcha*, Pl. III–IV, Fig. 2. この孔雀洞には，合掌の大地神が上半身をあらはしてゐる。



第八圖　第十一洞—第十三洞平面圖

Fig. 8. Plan of Caves XI–XIII.

第十一洞

第一章　第十一洞

〔外壁〕 五華洞のうち，第九洞と第十洞とは，もとより一對洞であるが，第十一洞から第十三洞にいたる三洞は，また外壁の面をひとしうしてゐる。そのうへ列柱よりなる第十二洞を中心とし，左右に拱門と明窓をひらいた第十一洞と第十三洞とがあって，いちおう，シムメトリカルな配置になってゐる。この第十一洞から第十三洞にいたる岩壁は，その空白にたくさんの佛龕を彫ってゐるが，このうはばは丘上の雨水をさけるため，一様にたかい石垣をきづいてゐる。(第八卷, Pl. 1)

〔石窟〕 第十一洞には前室がない。裝飾のない拱門の入口をはいると，內部は方柱を中心にした塔廟窟である。東西長は南壁で 4.10m，北壁で 5.50m，南北長はほゞ 5.00m，梯形にちかい方形で，方柱は東西 3.40m，南北 3.70m の方形である。天井までのたかさ約 13.00m，天井は平天井である。南壁に明窓と門口のあるほかは，なにも窟としての造構はない。各壁面が不規則であるのみならず，佛龕の配置はまったく無秩序である。そのうへ，北壁はほとんどなにもなく，佛龕の追刻も東西南の三壁にかぎられてゐる。(第八卷, Pl. 3)

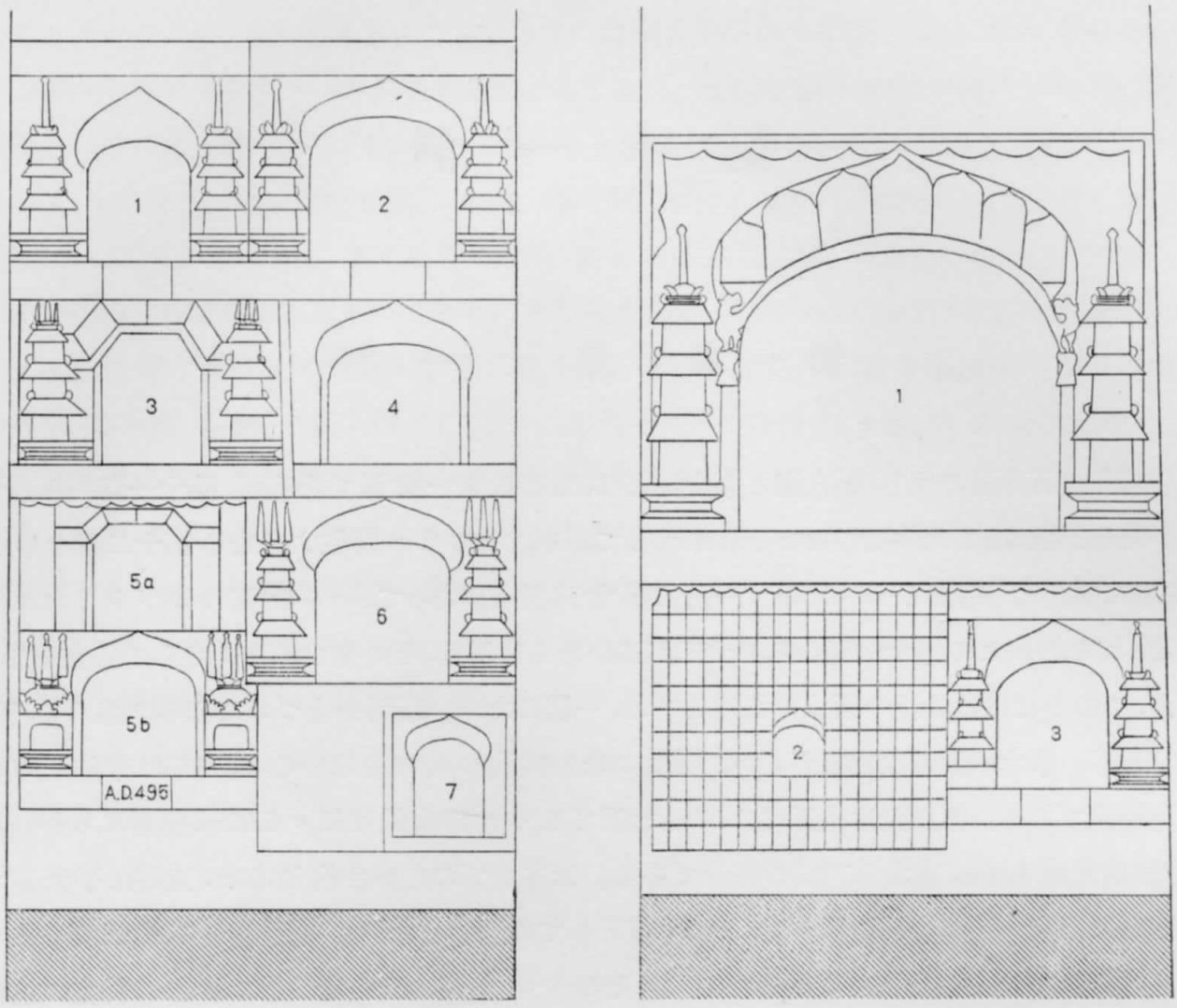
いま窟內の床は，おくにゆくほどあがってゐる。しかし，さらへてみると，不規則で凹凸がある。東房の床などをみると，いかにも未完成といった感がふかい。(Plan I)

1　南　　壁

この壁は，もつとも保存がよい。しかし，すそはいたんでゐるし，全面に補彩がある。そのうへ，すそは，いくらかうまってゐるらしい。

〔拱門〕 たゞの拱門で，なんの造構もない。アァチになった側壁に追刻の佛龕があるのみである。それも保存がわるく，いたんでをり，またあくどく彩色されてゐる。こゝのは追刻といふけれども，さう時代のはなれたものではない。方柱上層の佛像などに比較すると，この石窟の開鑿にひきつゞきおこなはれた追刻であることがわかる。(第八卷, Pl. 4, 5)

〔明窓〕 明窓にも，なんの造構もない。たゞ拱門より大きなアァチ形が切りひらかれてゐるのみである。こゝにも追刻の佛龕が，不規則に壁面を占めてゐる。しかし天井の部分は，あらけづ



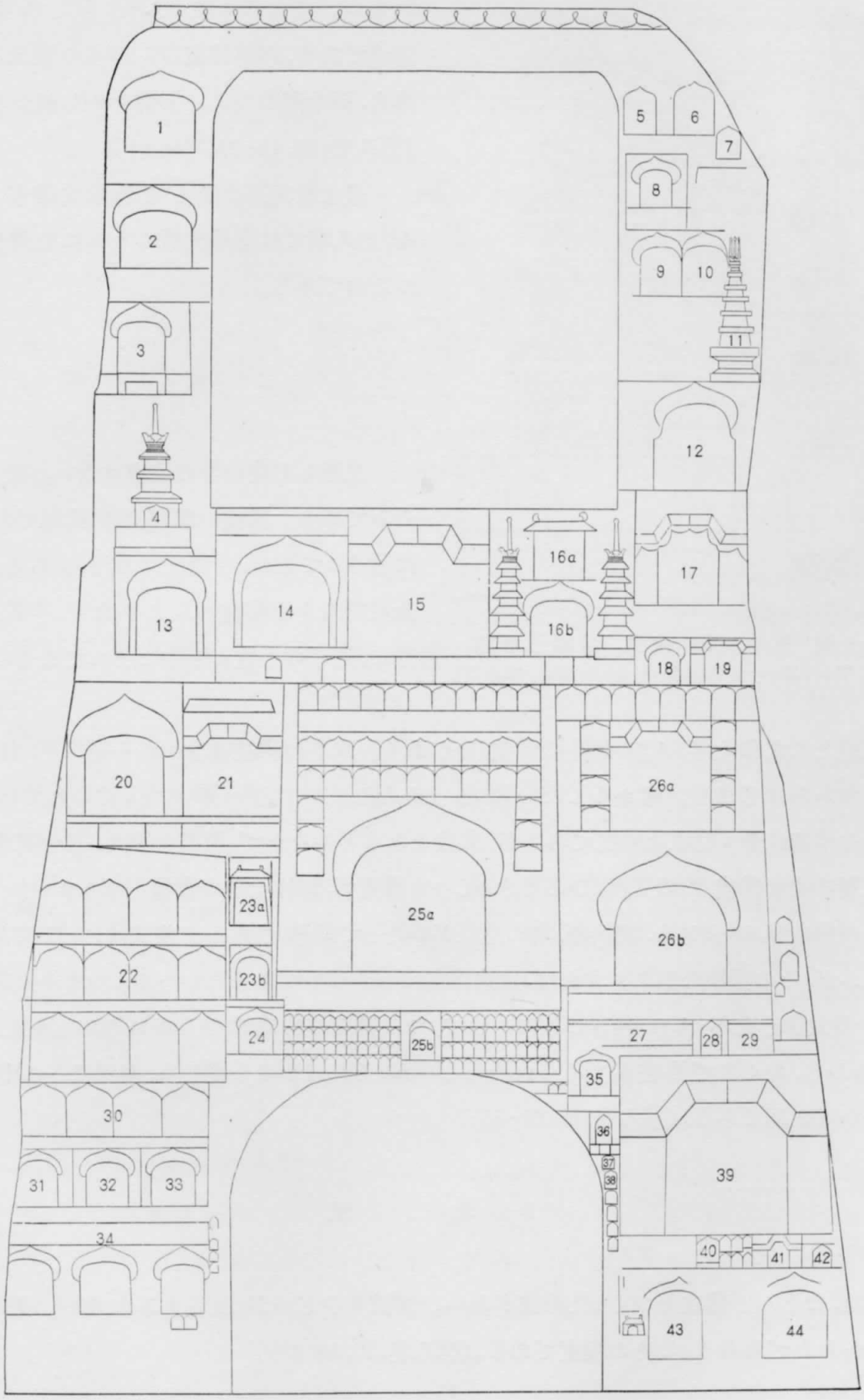
東側 East Reveal.　　西側 West Reveal.

第九圖　第十一洞 明窓 佛龕配置圖　Fig. 9. Distribution of Niches on Reveals of Window, Cave XI.

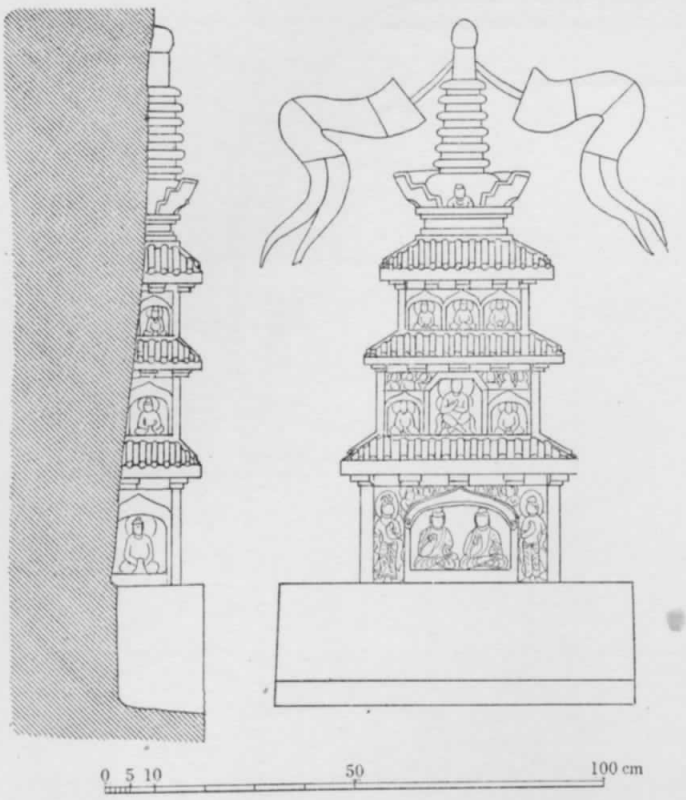
りのまゝ放置されてゐるのみならず，かなり大きな崩落がある。(Plan II)

追刻の佛龕は佛像やゝ細づくりで，中國式の服裝をし，佛龕の兩わきに浮彫塔をもつことで特色がある。しかも，東壁下部の佛龕(5)に太和十九年(A.D. 495)の佛龕があるから，みなそのころの製作であることが察せられる。さうしてみると未完成第三洞が外部に二基の双塔をつくつたことも，このころの佛龕に多い左右の双塔浮彫と，無關係でないことが察せられる。(第八卷, Pl. 6−10)

〔壁面〕 拱門と明窓にのこされた壁面は，これまた全面に追刻の佛龕がある。そのうち中央拱門上にある佛龕(25)だけは，石窟開鑿の計畫中にあったかともおもへるが，拱門上緣との接合の無造作なところをみると，やはり追刻であらう。とにかく，この佛龕を中心にして，上下左右に多數の佛龕がある。上層二個所に木造式層塔が彫ってある。これは一對でなく，偶然このあたりに彫られたものとおもふが，第五洞南壁上層の双塔などは，これからヒントをえた設計ではないかとおもはれる。佛龕の左右に双塔をあらはすことは，西壁の中位と下層の二個所(16, 39)のみである。だから，この左右の塔は，さういふ流行をみないまへ，明窓の諸龕よりはさきにつくられたのかと



第十圖　第十一洞 南壁 佛龕配置圖　　Fig. 10. Distribution of Niches on South Wall, Cave XI.



第十一圖　第十一洞　南壁　浮彫三層塔
Fig. 11. Three-Storeyed Pagoda on South Wall, Cave XI.

おもふ。それに佛像がふっくらして，第九，第十洞式であり，西部佛龕(17, 26b)の樂天列なども第九，第十洞のつよい影響をかんがへしめる。(第八卷, Pl. 11–24, Plan I II)

最上層天井に接して蓮華文帶がある。第七，第八洞では蓮華文帶のうへに坐佛列像があつたのである。

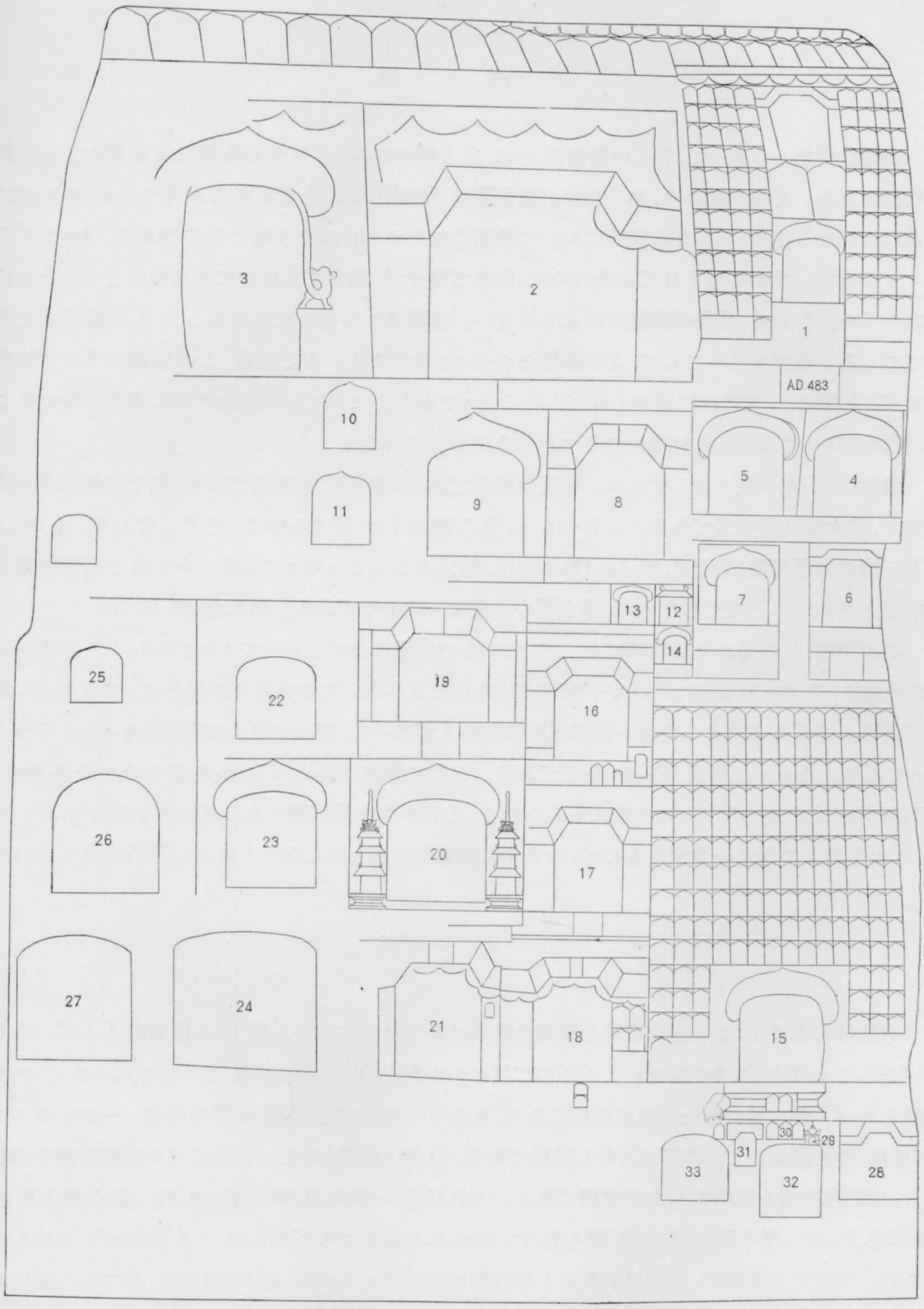
2　東　　壁

東壁も石窟自身の造構はない。追刻の佛龕のみである。佛龕の配列は不規則であり，壁面は波うってをり，中ほどに段さへある。しかし比較的大きな佛龕のみよりなり，中段以下の空隙に，若干の小龕が彫りこまれてゐるのをみる。(Plan IV)

南端最上に太和七年(A.D. 483)の佛龕(1)がある。双塔の佛龕はうへから第二層，南から第二列のあたりからはじまる。南からしだいに北，上からしだいに下へ彫りつゞけられていったらしい。太和七年龕はやゝ特殊な佛龕であるが，佛像をみるとゆたかで，服制も第九，第十洞式である。それに上層中央の佛龕(2)などは，ひどくきゃしゃな佛像で，方柱上層の佛像と相ちかい。またこれよりしたの佛龕(8, 16–21)も，楣拱額，塔の意匠がいたって纖細である。像式は，なほ第九，第十洞式をおそふが，その纖細な點よりすれば，明窓諸龕にちかづいてゐるといへる。つまり太和七年(A.D. 483)から太和十九年(A.D. 495)ごろにかけて，この壁面の佛龕はひらかれたかとおもふ。この壁は，いちおう，おくまで佛龕がつくられたらしいが，それはかならずしも，南部ほどの密度があったかどうかは疑問である。(第八卷, Pl. 25–35)

3　北　　壁

北壁は，ほとんど佛龕をつくった形迹がない。摩滅もひどいが，痕迹もみえない。若干散發的にはつくられたであらうが，その程度である。(第八卷, Pl. 36, 37)



第十二圖　第十一洞東壁佛龕配置圖　Fig. 12. Distribution of Niches on East Wall, Cave XI.

4　西　　壁

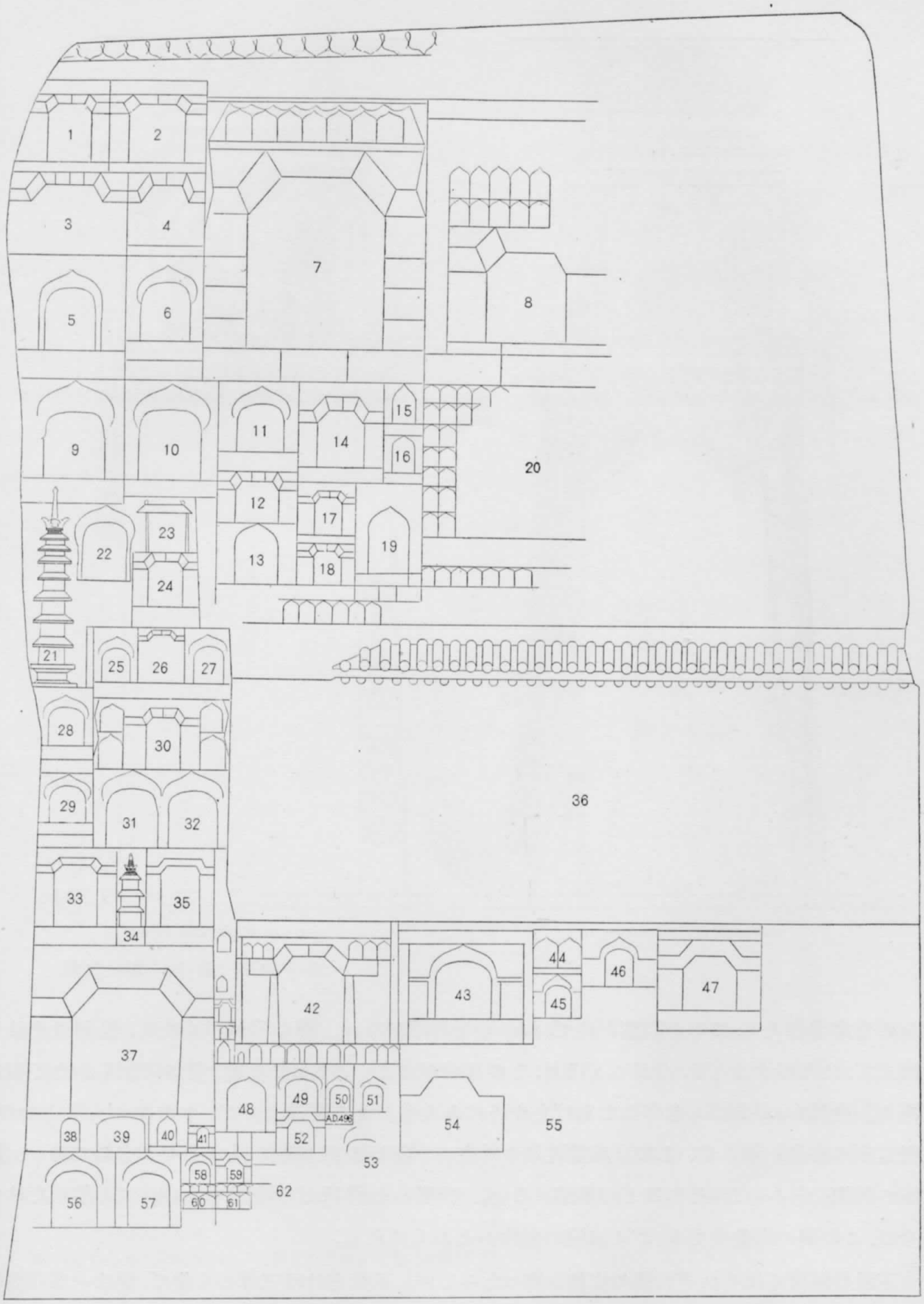
西壁は東壁とちがって，小さい佛龕がみっしりと彫ってある。しかし中層には屋根のしたに佛の列像がある。その規模から，あるひは石窟開鑿の計畫中にあったものかとおもへるが，それでは石窟のいかなる位置，いかなる關係において計畫されたかといふやうなことになると，まったく手がゝりがない。北から彫りはじめたために，南まで達せず，途中でをはつてゐるのはどうしたわけであらうか。しかも，佛像の間隔にゆとりがない。光背さへも彫ってゐない。もと屋根のところまでゞゝゐた壁面をきりこんで，この佛像をつくったのである。ところが，この屋根のうへでは壁面はぐっと後退し，北にゆけばゆくほどふかくなってゐる。これでは屋根のために壁面をひいたより，壁面がひいてゐたから屋根をつくつたやうにおもはれる。

佛像は，かなり堂々としてゐる。頭髮は波狀であり，服裝は中國式であり，第十六洞本尊の式であり，第六洞諸像の式である。くらべると，第六洞よりは，いくらかほっそりしてゐる。しかし，第十三洞の南壁列像(第十卷, Pl. 13–17)よりは，形式がよくとゝのってゐる。いま第十三洞諸像との前後をきめることはできないが，第六洞の諸像よりはのちである。(第八卷, Pl. 46–49)

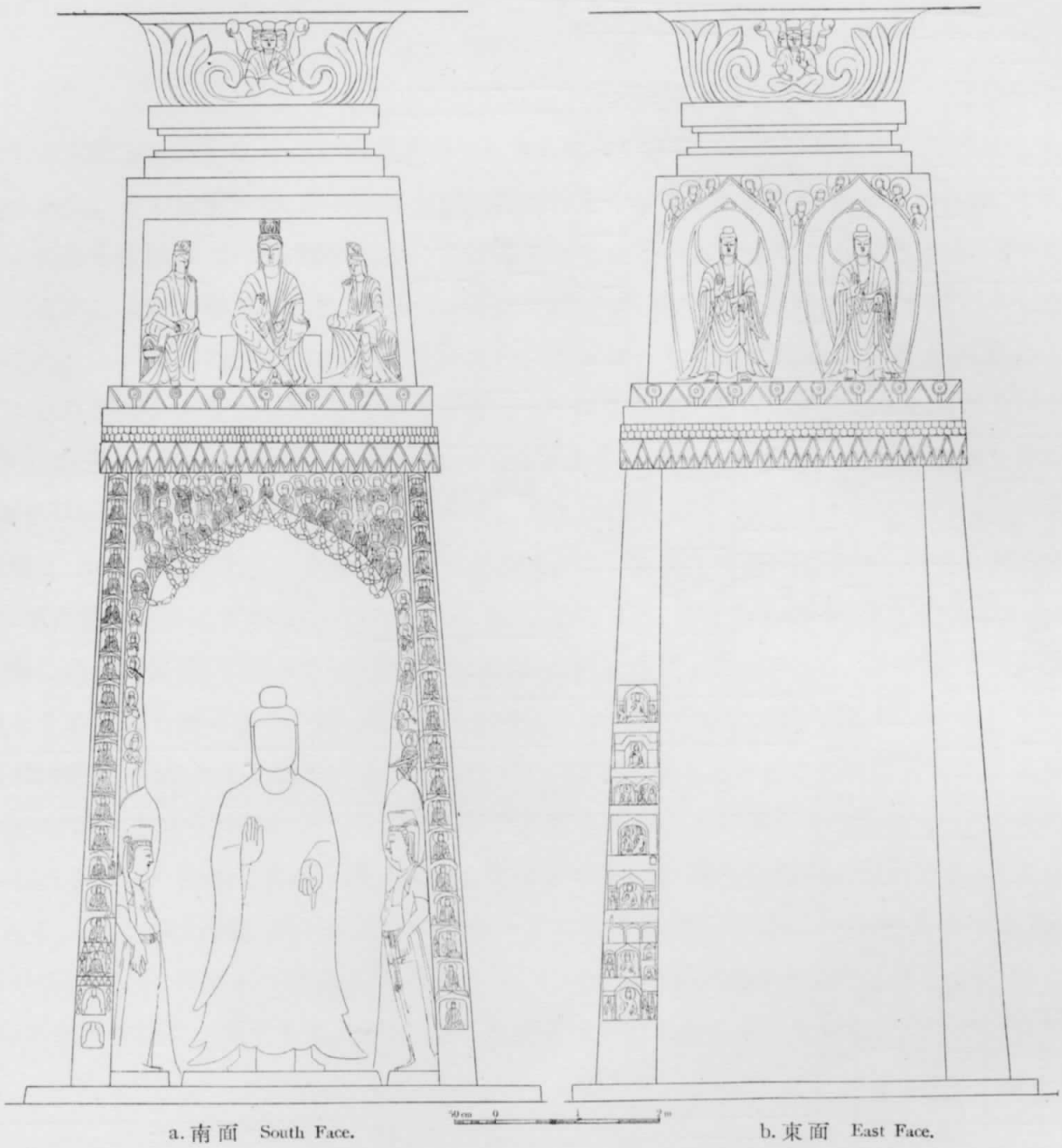
追刻諸龕は，上層および南端において，だいたい東壁に似るといってよいであらう。双塔をもった佛龕は，ほゞ中層中位において一個所(14)みいだされる。このあたりの製作も，さうたうに纖細である。さらに七佛のしたは一律に纖細の作ゆきであって，間々中國式の服制をもったものがまじってゐる。たとへば佛龕(40–62)などである。とくに佛龕(52)にみる，かた膝をたてた菩薩は，拱門西がは(第八卷, Pl. 5 B)の小龕にもみられる。それから七佛列像のあひだにある小龕も，だいたい，このあたりの作と一致するもので，つまり太和末年の作とかんがへられる。(第八卷, Pl. 38–53)

5　方　　柱

方柱はもとより，この石窟造營の意圖を端的にあらはしてゐる。當初の計畫にもとづいたものであることは，いふまでもない。上下の二層にわかれ，したは天蓋の龕，うへはなにもなく，わきの柱もない。たゞちに頂上の五成の壇になり，そのうへに承花と三面四臂の神像，たぶんアスラ(asura)(阿修羅)神の像をおく。四面まったく同樣である。上層の尊像は，たゞ正面だけが交脚菩薩を中心にし，半跏思惟像を脇侍にした三尊制である。これは第一洞本尊(第一卷, Pl. 21)，第七洞上層龕(第四卷, Pl. 32)，第十洞主室本尊(第七卷, Pl. 66 B)にみるところであるが，こんな細づくりのものはない。中國式の服制で，ひだがするどく平行線をつくつてながれ，そのはしばしがつよくはねかへってゐる。他の三面は二體づゝの佛立像である。大きな舉身光をもつが，裝飾の彫りはない。ま



第十三圖 第十一洞 西壁 佛龕配置圖 Fig. 13. Distribution of Niches on West Wall, Cave XI.

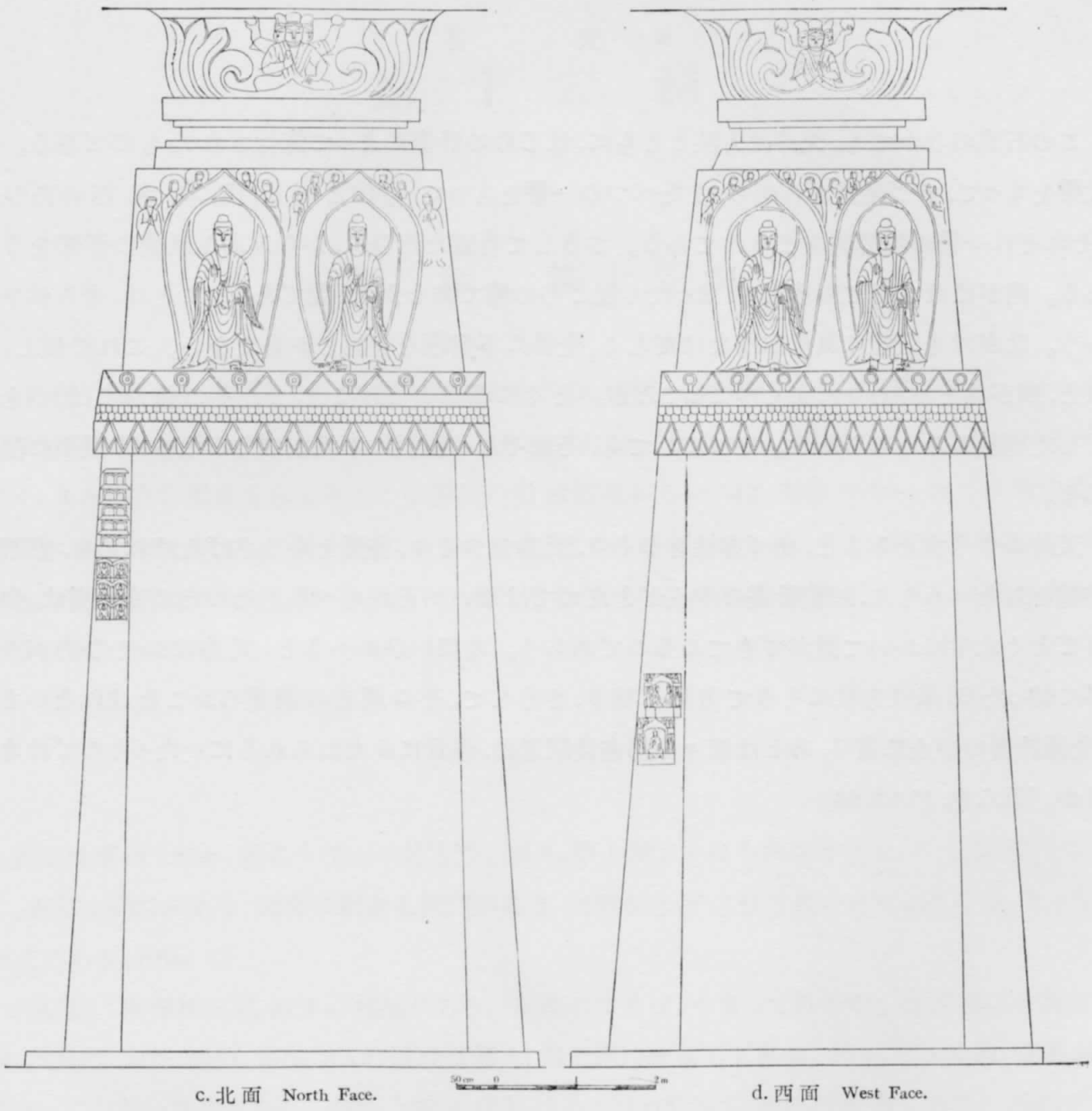


a. 南面　South Face.　　b. 東面　East Face.

第十四圖　第十一洞　方柱

はりの合掌供養者も，ほんの輪廓だけで，肉のもりあげがない。佛の表情はかたく，服制はやはり中國式で，ひだがするどく，ながくとほり，その衣端がつよくとがってゐる。足の彫刻もかたく粗末である。全體が，いかにも忽卒にしあげたやうにみえる。その服制といひ，その細づくりといひ，東壁追刻の佛龕2(第八卷，Pl.32)，西壁追刻の佛龕38(第八卷，Pl.53)に，もっともよく似てゐる。第六洞の佛像にちかいが，それほどの量感はない。西壁の七佛ほどの量感もない。この像式だけでおせば，この洞の諸像中でも，ごく末期の製作かとおもはれる。

下層の四面にはそれぞれ佛の立像を彫ったらしい。正面だけは三尊の立像で，他は一尊の立像である。しかし，はたして，それが完成してゐたかどうかは疑問である。いまあるものはみな近世



c. 北面 North Face.　　d. 西面 West Face.

Fig. 14. Stūpa Pillar of Cave XI.

の泥像である。もとのものが，どんなふうであったかは，まったく想像しがたい。しかし，正面上部の合掌供養者群，隅柱の佛龕列は，すべて北魏の作，その作ふうよりすれば，まづ上層とおなじく太和十年から，その末年にいたる間のものとかんがへられよう。ところが，正面左右脇侍の泥をはがすと，なかから保存のよい，菩薩立像があらはれた。その年代決定はむつかしいが，様式のうへからすると，比較的遼の菩薩像にちかい[1]から，これを遼代の追加とかんがへる。(第八巻，Pl. 54–62)

1 關野貞，竹島卓一『遼金時代の建築と其佛像』，下巻，1935，Pl. 87.

6　天　　井

この石窟のなかでも，天井は方柱とともに，はじめの計畫によって施行されたものである。蓮瓣文帶をもって，まづ諸壁とわかち，またべつの一帶をもって，方柱と境し，南，北，東，西のあひだに，それぞれ一帶の境界線をまうけてゐる。さうして各區たがひに，からみあふ双龍の浮彫をうめてゐる。南がははすべて剝落して，まったく近ごろの繪であるが，双龍であったことは，まちがひなからう。北がはも全體に風化がはなはだしく，全體に不明瞭な輪廓しかもたない。これに反し，東がはと，西がはとは，わりによくのこってゐる。とくに西部の龍頭には，またその前脚には，いきいきとした刻線がみとめられる。それにしても，それぞれの區劃は不規則であるうへに，壁面に凹凸がある。

天井のやうすをみると，まづ方柱をつくり，天井をつくり，各壁を彫りさげたけれども，東西壁の整備をみないうちに，石窟計畫の中止がきたのではないかとおもへる。そのため東西壁は，今日みるごとく北半において段ができてゐるのであらう。なほいひかへると，天井はおくひろがりの梯形に切ったが，床は方柱にそうて方形に切り，さうして，その兩者の調整のおこなはれないまゝに，全體計畫の中止に遭ひ，あとは個々の佛龕發願者の，恣意にゆだねられるにいたったのではなからうか。(第八卷, Pl.63, 64)

第十二洞

第二章　第十二洞

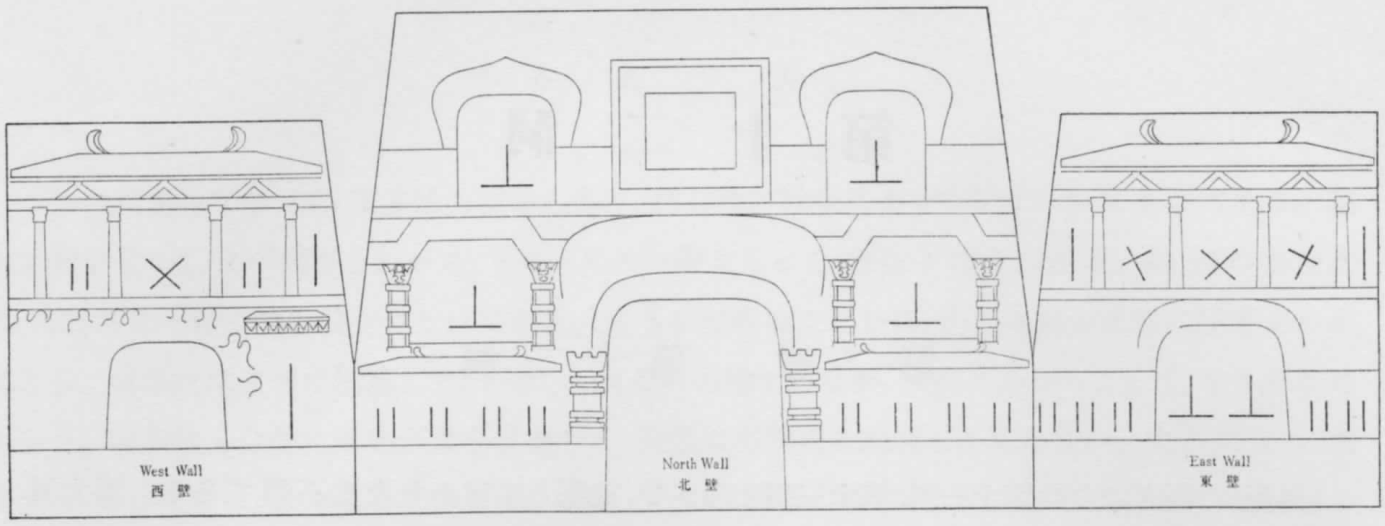
〔外壁〕 兩どなりの第十一洞,第十三洞とちがひ,前壁と主室からなる石窟である。第九洞,第十洞にならひ,前壁は列柱をもち,三間にわかれてゐる。そのうへ,屋根のつくりだしがあったらしく,また小さい梁孔もみえる。この洞前の發掘結果からいへば,洞前10.00mまでは遼の時代の塼床がある(第七卷,Fig. 29)。梁孔のしたには,五つの佛龕といふか,小さい石窟がある。(本書,第十卷,Pl. 50) 外壁にも,はっきりと第十二洞の區ぎりがあるのは,屋根を彫りだした關係からであらう。(第九卷,Pl. 1)

1　前　　室

前室は東西7.20m,南北4.10mの長方形。第九,第十洞よりはるかに小さく,とくにひくい。しかし,南壁に列柱があり,北壁に明窓と拱門があり,各壁が上下二層にわかれてゐるなど,まったく同形式である。(Plan V)

〔南壁〕 南壁は三間,四本の列柱がある。列柱のすそは,うまってゐるので最下部は不明であるが,八角柱,大斗,皿板,基壇などの構成は第九,第十洞におなじである。たゞ,こゝのは,基壇が象頭になってゐないやうである。柱は上端が急にほそくなってゐて,それが特徴である。基壇には各隅に承花(うけはな)があり,承花のあひだに跳躍の童子形がある。もちろん,そとがはは大破してなにもみえないが,柱側の唐草文帶は一部分にのこってゐて,第九,第十洞の缺をおぎなってくれる。うち三面は坐佛の列龕がある。この列柱は大斗よりせまい桁をうけてゐる。桁には一面に天人がとんでゐる。桁の下面の侏儒のやうなものは,まったくみえない。(第九卷,Pl. 2—7)

〔東壁〕 西壁とおなじやうに上下二層にわかれてゐる。その各層のあひだ,天井とのあひだには蓮瓣文帶があり,腰壁に接するところも蓮瓣文帶があったとおもはれる。しかし,下層の半分以下はすべて補修である。こゝは二佛並坐の尖拱龕,うへは交脚菩薩の屋形龕,左右に半跏像を脇侍としてゐるが,この脇侍のそとにも,大きな立像が脇侍のごとくひかへてゐる。屋形龕の形式は第九,第十洞の前室におなじであるが,龕内の帷幕だけがちがふ。(第九卷,Pl. 6, 8—15)



第十五圖　第十二洞　前室　佛龕配置圖　Fig. 15. Distribution of Niches in Ante-Room, Cave XII.

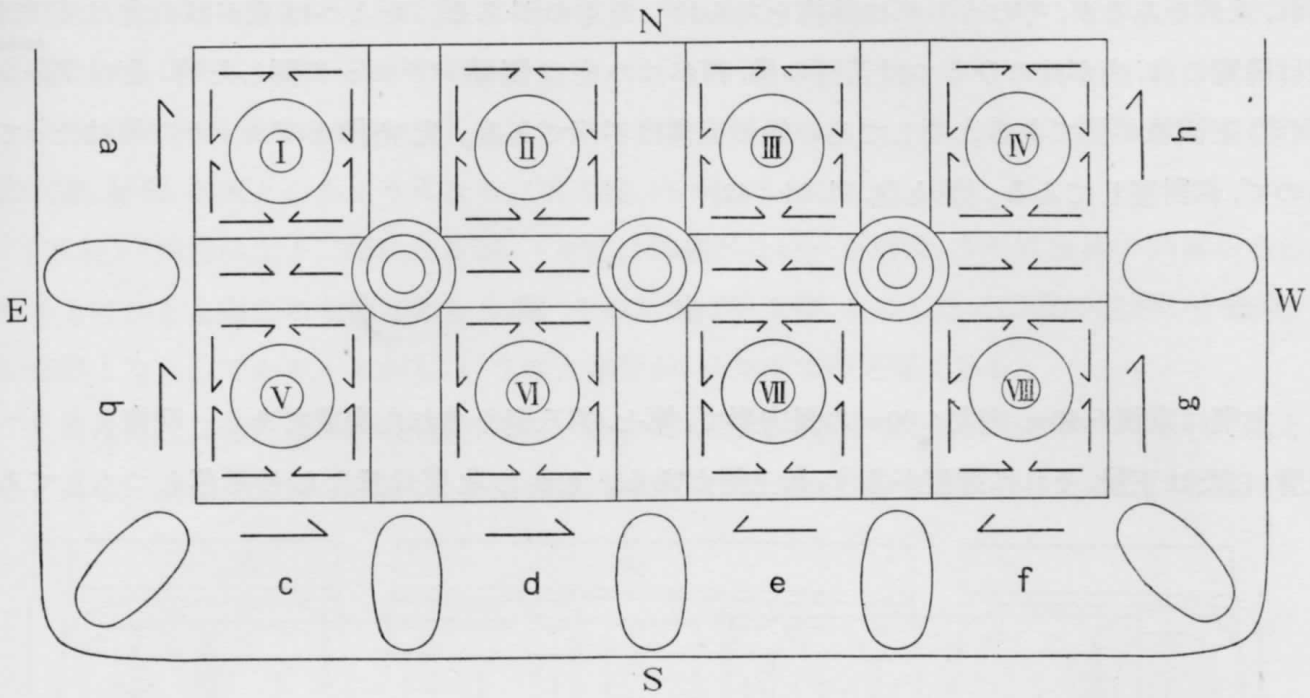
〔西壁〕 上下二層，下層は南北二龕，南壁は三カァシャパ(迦葉)調伏の火龍窟炎上，カァシャパの弟子たちが鎭火につとめてゐる場面，北龕は火龍を鉢中にまるめこんだ場面，佛は天蓋のしたに鉢を手にしてたってゐる。上層は東壁とおなじ屋形龕である。本尊は交脚佛，左右が倚坐佛，なほそのわきに大きな菩薩の立像がある。東壁の交脚菩薩に，交脚佛を對せしめたのは，第九，第十洞にならったのである。たゞ龕內の瓔珞の羅網と，斗拱の獸形飾とは，かはってゐる。天井の折りあげ部とは蓮瓣文帶をもってさかひし，腰壁以下は補修の泥作になってゐる。(第九卷, Pl. 7, 16–22)

〔北壁〕 北壁も上下二層にわかれてゐるが，わかれ目が東西壁よりはるかにたかい。といふのは，北壁では折りあげ部が省略されてゐるからである。腰壁以下は補修の泥壁で不明。下層は二段にわかれ，下段は屋形龕に倚坐佛の列像，過去七佛といふには一體多く八佛である。上段は坐佛の楣拱龕，楣拱をうけたのは三層の層柱である。上層はどちらも尖拱龕，拱額內はどちらも過去佛の列像である。左右の供養者がおびたゞしい。東龕は鹿野苑の初轉法輪，西龕はブダガヤの四天王奉鉢である。最上層には第九，第十洞にならひ，樂天の列龕がある。さうして萬字くづしの欄杆のかはりに，飛天をならべた欄間やうのものがある。

中央には明窓と拱門とがある。(第九卷, Pl. 23–30)

〔明窓〕 明窓は方形である。南がはでも，北がはでも，すこし，ひらいて面とりになってゐる。その斜面の帶に，南がはでは飛天がならび，一部に唐草波狀文があるが，北がはでは禽鳥をいれた波狀の葡萄唐草文があって注意をひく。(第九卷, Pl. 27, 52)

側壁は南半に樹下禪定僧，北半に佛龕がある。もとは樹幹をなかにして，南北に禪定僧が二人ゐたとおもはれる。禪定僧はゆたかな，しかし簡素な表現である。第七，第八洞の明窓をまねたことはあきらかであるが，樹枝のうねりなど生々として，獨特のおもむきがある。木の枝には大きな鉢囊をぶらさげてゐる。天井は平らである。中央には大蓮華，そのまはりに飛天。しかし，この飛天は大蓮華をさゝへず，合掌し，あるひは博山爐を奉じてゐる。(第九卷, Pl. 45–49)



第十六圖　第十二洞 前室 天井 略圖　　Fig. 16. Ceiling of Ante-Room, Cave XII.

〔拱門〕 拱門は,三層になったかざりをもつ尖拱と層柱からなり,第九,第十洞の明窓とおなじであるが,たゞ二層の飛天列と一層の坐佛列の規模が小さくなり,形式化したのは,あとからまねたからであらう。層柱といふけれども,これはかなりちがってゐる。塔身とみえるのは中位の一層のみで,あとは皿板のごときもの四枚,そのうへに,階段狀になつた承花と人物とを,いたゞいてゐる。なかにはいると,左右に筋骨隆々たる力士(Vajra-pāni)像が相對してゐるが,金剛杵(Vajra)はもってゐない。天井は交龍である。第一,第二洞拱門の龍が破損してゐるのに,こゝはほゞ完好である。さうして完好ではあるが,ほそく,いくらかよわいのが目だつ。(第九卷, Pl. 28, 43, 44)

〔天井〕 天井は折りあげ格天井である。東西に一本,南北に三本の梁がはしり,八區の格間にわかれてゐる。格間の中心には大蓮華があり,梁の交叉點にも大蓮華があり,つがう十一個の大蓮華が燦としてかゞやいてゐる。格間のなかの蓮華が,八角形にかこまれてゐるのは三角持ちおくりの遺制である。梁のうへ,梁のわきには一面に飛天を彫ってゐるが,たいてい二體づゝ相對向せしめ,整然としてゐる。よくみると,梁上は逆髮飛天であり,格間は高髻飛天である。

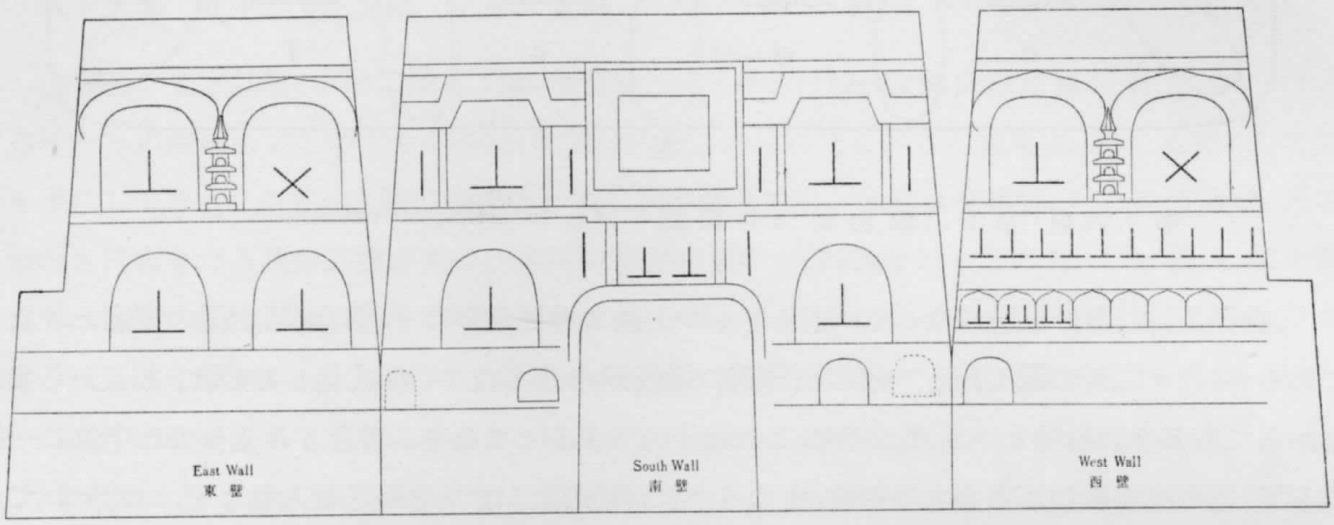
折りあげ部は東西南の三面にのみある。大きな侏儒がたちあがって,梁を圓光の頭にうけてゐる。逆髮で腰衣をつけた,ふつうの侏儒で,樂を奏してゐるだけがめづらしく,とくに南がは中央のものは,兩手をふりあげておどってゐる。侏儒たちがうけた梁には,また,侏儒形の飛天がとんでゐる。

たちあがって,支輪のかはりをしてゐる侏儒のあひだには,佛龕がある。特別に龕形をなさず,たゞ擧身光をおふのみであるが,その光背のうへには,まるいおほひがかぶさってゐる。八區にわ

かれ，八佛をみるが，そのうちには佛傳をあらはしたものがある。たとへば東がはの北は定光佛，南は降魔の佛，南がはのひとつは苦行の佛，西がはの南は髑髏バラモンに關した佛，北はアショカ(Aśoka)(阿育)王因緣の佛である。そしてその他の五佛は不明である。定光佛とアショカの佛はたってゐるので，相對應してゐる。(第九卷，Pl. 31–42)

2　主　　室

主室は東西6.40m，南北4.80mの長方形で，第七，第八洞をまねた構成である。明窓よりうへは上層，したは下層，それに腰壁があり，最上層がある。しかし北壁はほとんど崩落しつくしてゐる



第十七圖　第十二洞主室佛龕配置圖　Fig. 17. Distribution of Niches in Main Room, Cave XII.

し，腰壁以下はまた補修の泥作である。そのうへ全體の彩色があくどく，あまり狀態のいゝ石窟ではない。

〔南壁〕 明窓と拱門のあひに，二佛並坐の天蓋龕がある。二佛並坐で天蓋龕といふのはめづらしい。兩柱があるから屋形龕の屋根の略されたものともいへよう。明窓は方形，拱門は獸形の拱梁をもつが，隅まるの長方形である。左右は，それぞれ上下一龕づゝ，うへは楣拱龕だが，したは合掌群像にとりまかれた特殊な龕である。下層東龕は二商主トラプシァ(Trapuṣa)とバリカ(Bhallika)の麨蜜を獻ずる光景であるが，西龕はさういふ特定のものでないらしい。二商主奉蜜の龕は合手の相だが，その他はみな擧手形である。上層二龕の楣拱内の飛天は，框をはみだすほどで，その姿態は活力に滿ちてゐる。腰壁はすっかり泥壁でおほはれてゐるが，佛龕とのあひだにせまい一層があり，小さい佛龕がならんで彫られてゐたらしい。大部分は補修だが，二三もとの俤をしのばすものがある。最上層は坐佛の列像である。つぎは飛天によってはりめぐらされてゐる瓔珞の羅網である。坐佛列像は小さく，おとなしい作だが，擧手形のものが二三まじってゐるのは異例である。(第九卷，Pl. 50–60)

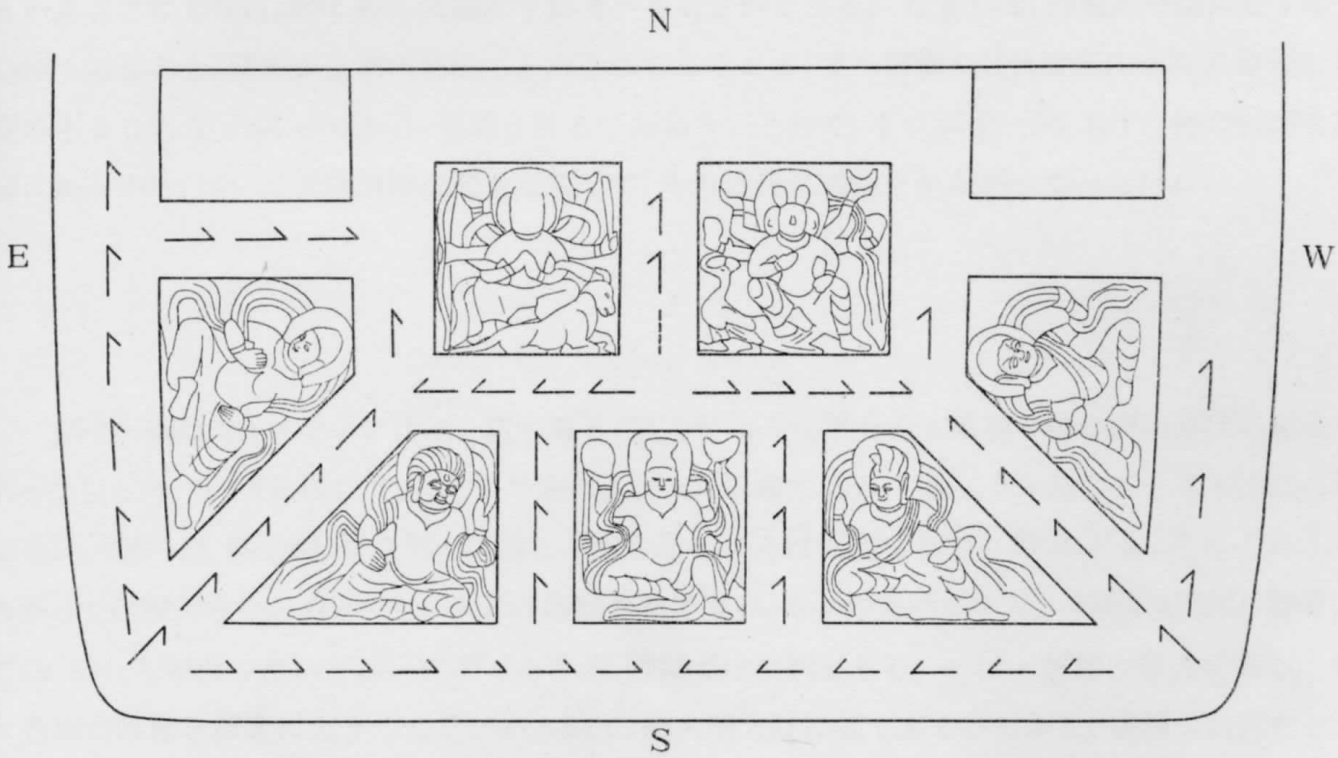
〔東壁〕 東壁の下半も補修である。下層二龕は供養群像をめぐらした龕，上層二龕は尖拱の

龕である。尖拱額のなかは天人たち，拱端は獸形，それをうけるものは布をまいたやうな柱頭の柱，龕と龕とのあひだに三層の塔がある。

佛像は，みな擧手形の坐像だが，上層南龕だけは交脚佛である。最上層は，蓮瓣文帶のうへに坐佛列像，羅網，飛天といふふうになる。(第九卷，Pl. 61, 63–65)

〔西壁〕 西壁は上下二層になるが，下層には佛龕がない。下層は，うへに坐佛の列像がある。九體あるけれども過去の七佛であらうか。そのしたは飛天帶，そのしたは二段に追刻の小龕列，それが整然とならんでゐる。しかし，いまは大部分が，はりぼての泥壁である。

上層は南北二龕になり，尖拱龕である。あひだに三層塔があってこれをわかつこと，東壁とおなじである。南龕は坐佛，拱額には坐佛列像，拱端には鳥形が柱のうへにたってゐる。北龕は交脚



第十八圖　第十二洞主室天井略圖　Fig. 18. Ceiling of Main Room, Cave XII.

菩薩，拱額は合掌の天人たち，拱端は獸形である。最上層は東壁におなじであるが，坐佛列像は，からだつきがよりゆたかである。(第九卷，Pl. 62, 66–67)

〔北壁〕 北壁は，いまみるごとく，いたんでゐるが，できるだけ復原してみると，まづ第八洞主室北壁(第五卷，Pl. 29)のごとくであったらう。上下二層にわかれてゐる。下層は小さい尖拱龕で，一尊の坐佛であったらう。左右のひろい壁に，なにが彫ってあったか，あきらかでない。

上層は，おそらく，まんなかに交脚菩薩が大きな光背を背おうて，すわってゐたであらう。左右には，ほとんど對向して脇侍，たぶん半跏思惟像があったらう。そのわきにさらに小さく，菩薩とも天人ともいへる脇侍の立像があったらしい。それに楣拱額，それから帷幕がたれさがってゐる。

楣拱額のうへは，ちゃうど樂天列龕をつくるほどあいてゐる。たぶん，さういふものがあったのであらう。(第九卷, Pl. 68)

〔天井〕 北端がこはれてゐるが，大部分はのこってゐる。まづ，まはりに飛天をならべた天井なげしやうのものがあり，これから折りあげの支輪のやうに，中央にむかって梁がでゝゐる。實はいくらか，もりあがってゐるが，だいたいは，平天井である。梁は六本，これが中央に二間しかない格天井をさゝへてゐる。梁のうへには，一樣に飛天をならべてゐる。格間はあさく，そのなかいっぱいに神像を彫ってゐる。そのうち中心には，第八洞門口にあったやうに，牛にのったマヘシュヴァラ(摩醯首羅)(Maheśvara)と鳥にのつたヴィシュヌ(毘紐天)(Viṣṇu)とがあらはされてをり，その南がはの梁間には多臂のアスラ(阿修羅神)(Asura)がゐる。そのほかの四體の神像は，名稱不明である。(第九卷, Pl. 69)

終　　章

第十一洞 第十二洞の特徴

第十一洞と第十二洞との特徴を，いっしょに擧げることはむつかしい。第十一洞と第十二洞とは，まったく別個の石窟である。けれども，第十三洞までひきくるめて，五華洞のうち西三洞の特徴といふことになれば，いくらか共通點をかぞへることができる。たとへば，外壁が一樣にとゝのへられてゐること，壁面が追刻の佛龕でしめられてゐること，また佛像や裝飾意匠にかなり共通した點のあることなどが，いちおう，想起されるであらう。それで，まづ第十一洞，第十二洞の特徴を別個にかんがへ，ついで五華洞西三洞を通觀して，その造營の順位をかんがへてみたい。

1

第十一洞はチャイティヤ(塔廟)窟である(第六卷，p. 7)。さうして塔廟下層の四面佛は未完成であったらしい。いづれにしても，この塔廟はかはった塔廟である。第三十九洞のごとき木造式の塔でない。第一洞，第二洞，第六洞の塔廟と一致するところは天蓋である。けれども，そのどれともちがって屋根がない。だから，ふつうの塔形をなさない，たゞの方柱である。鞏縣，天龍山，響堂山では，むしろ屋根のない方が一般的であるが，雲岡では異例である。いはゞ層柱の形式である。たゞ各面の尊像を極度に大きくしたといふ點で，第六洞方柱に似てゐる。しかし，龕制が稀薄だといふことでは，第六洞方柱ともちがってゐる。要するに，第六洞ほど，ひきしまった構成をもってゐないのである。たぶん，第六洞よりのちの形式とかんがへてよいであらう。

天井も特色がある。平天井でありながら格天井になってゐない。東西南北四區にしきってあるが，これでは格天井といへない。第六洞，第三十九洞は格天井になってゐる。格天井になってゐない點では，むしろ第一，第二洞をまなんだのであらうが，第一，第二洞は須彌山上に龍をもち，その龍が塔と密接な構成をなすが，この天井の交龍は塔と遊離し，各區に二頭づゝが相まじはってゐるのみである。その點，やはり第一，第二洞よりのちの形式である。

下層の諸尊がかく未完成であり，上層の諸尊が極度に纖細な樣式であるとすると，それは最初の造作ではなかったかも知れない。まづ方柱のある石窟を開鑿した。しかし，內部の彫刻といふ段どりになって一頓挫がきた。全壁は，やむなく小佛龕の追刻にゆだねられた。さうして，それがあ

る程度すゝんだとき，おそらく諸壁の小龕がほとんど完了にちかづいたとき，いひかへると太和の末年に，はじめて天井，方柱の造作がおこなはれたのでなからうか。下層の天蓋も，そのしたの供養者群も，よわいつくりであって，この見解をたすける。では下層の本尊はどうであったか。それはわからない。たぶん未完成のまゝ，のこされてゐたのではないかとおもふ。したがって，正面左右脇侍のやうに，そののち遼ごろになって，造營がこゝろみられたのであらう。いま，下層の諸佛はしばらくおくが，上層の諸佛像の細づくりであり，衣文の尖鋭化してゐるのをみると，すくなくとも西壁の七佛よりも，のちのものだとおもはれる。

いったい西壁の七佛が，どういふ造形的な意圖をもってつくられたか。それは，あきらかでない。とにかく，これだけの造營であるから，石窟構造の一部として，つくられたものとおもはれるが，それについてはなんの證據もない。といふより，われわれの想像によれば，うへからは天井にそうて梯形に鑿りおろされ，また，したからは方柱にそうて方形に鑿りすゝめられ，そして中間でくひちがひができてゐる。それが，いまもなほ東西壁にのこってゐる。西壁では，とくに顯著なくひちがひになってゐる。それを調整しないで，この七佛立像がつくられてゐる。むしろ，このくひちがひを利用して，屋根さへつくってゐる。かういふことは，石窟の全體計畫が中止されたか，頓挫したかをしめすものである。つまり七佛は，この中絶後の作である。たとへ最初の計畫にあったとしても，とにかく，そのまゝ事もなく實現したものではないとおもふ。してみると，この石窟固有のものとしては，石窟の骨格だけしかない。それに方柱上層の佛像と天井の交龍であるが，それものちの，第二次的の作たることを否定しがたいものがある。

とにかく，異例な方柱の構造が，まづ，第六洞以後だと推定せしめる。場ょからいって，第九，第十洞以後であることも異議がない。それにしても第九，第十洞の完成前に五華洞西三洞の外壁がとゝのへられた形迹のあることは，すでにのべたごとくである（第七卷，p. 12）。つぎは追刻の諸龕を綜合してかんがへてみたい。

追刻の諸龕は明窓，拱門の側壁から南，東，西三壁の全面，また北壁の一部におよんで，全石窟に遍滿してゐるといへる。そのうち第九，第十洞ふうな造形樣式と，第五，第六洞ふうな造形樣式がみられる。前者は南壁，東西壁南邊に多く，その代表は南壁第十七，第二十五，第二十六の諸龕である。後者は東西壁の下部北邊にあり，また拱門，明窓にある。第五，第六洞ふうといふのは，からだが痩身であること，衣文の尖鋭なことであるが，そのうちでも，こゝの小龕は，第五，第六洞よりも，はるかにすゝんでゐるとおもふ。たとへば明窓諸龕，東壁第二龕はそれである。また年號のあるものをもっていへば，前者は東壁太和七年（A.D. 483）の龕(1)が代表し，後者は明窓太和十九年（A.D. 495）の龕(5)が代表する。

だから，すでに太和七年には，この石窟の骨組は，ほゞできてゐたことであらう。たゞ最初の計畫として，各壁を自由な佛龕供養にゆだねたか，計畫變更の結果さうなったのか，それがわから

ない。とにかく太和七年からは，佛龕の追刻がおこなはれた。さうして，それは南壁から東西壁におよび，東西壁は南端から北方にむかひ，各壁はうへからしたにおよんだとみられる。さうして，その最後に拱門とか明窓にいたったのである。西壁下部には太和二十年(A.D. 496)，明窓には太和十九年(A.D.495)の佛龕がある。だから太和末年(A.D. 499)には，ほゞ各壁に佛龕が充滿したことと推測される。その間こゝでは，第九，第十洞ふうの佛龕から，第五，第六洞，もしくはそれよりやゝゆきすぎた様式の佛龕にいたるまで，うつりかはったのである。

2

第十二洞は，一見してあきらかなごとく，第九，第十洞をやゝ縮小して，まねたものである。とくに(1)外壁，(2)列柱，(3)前室東西壁上層屋形龕，(4)門口拱形，(5)天井侏儒，(6)天井格間，(7)主室天井等は，みな第九，第十洞の模倣である。しかし，すべてが第九，第十洞ふうといふわけではない。主室はむしろ第七，第八洞をまねてゐる。とくに(1)北壁上下の龕，(2)周壁の佛龕配置，(3)明窓の樹下禪定僧などは，それである。さういふわけで，その造營が，第七，第八洞以後，第九，第十洞以後であることは，もとよりあきらかである。

佛像の様式は，だいたい第九，第十洞式である。まづ服制がそのとほりである。衣が身體に密著し，ひだがこまかくゑがゝれて，肉體が衣のしたで起伏してゐる。しかし，第九，第十洞と比較していへることは，それより身體つきが，きゃしゃになってゐることである。第九，第十洞より，はるかに量感がたりない。とくに主室の諸像，南壁，東壁最上層の坐佛列像において，しかりである。しかし，注意してよいことは，全體がその様式に統一されてゐることである。顔の表情は，いくらかかたい。衣のひだも便化してかたい。隆起線のひだが極度に便化されてゐて，二本の線のやうにみえる。實は一本の線はひだのはし，他の線は折れかへった，ふくらみのはしである。このひだはこの洞獨特で，各像に一貫してゐる。どこにも第五，第六洞ふうの入りこむ餘地はない。つまり，この洞のできたのは，第五，第六洞形式が，つよく他に影響をはじめる以前でなくてはならない。

第六洞様式の影響は，第十一洞にも，第十三洞にもある。とくに，その七佛立像のごときは顯著である。第十二洞では，各壁のだいたいが完成したのち，主室下層の下部に小さい追刻の佛龕として，第六洞様式があらはれる。明窓のばあひは，樹下禪定の比丘像をこはして，追刻した佛龕がそれである。これらは第六洞様式といっても，その傾向のやゝ極端になったものである。さうして，これは第十一洞，第十三洞の，最後の追刻佛龕にみるところとおなじである。いちおう，太和末年の作とみてよからうとおもふ。

なほ注目されるのは，第七，第八洞，第九，第十洞にならってか，佛傳をあらはした佛龕の多いことである。いま，こゝに列擧してみるとつぎのごとくである。

1) 定光佛布髮本生	前室 天井折上部 東側北	(第九卷, Pl. 39)
2) 禪河苦行佛	前室 天井折上部 南側西	(第九卷, Pl. 36)
3) 降魔成道	前室 天井折上部 東側南	(第九卷, Pl. 38)
4) 四天王奉鉢	前室北壁上層 西部	(第九卷, Pl. 28)
5) 二商主献蜜	主室南壁下層 東部	(第九卷, Pl. 56)
6) 初轉法輪	前室北壁上層 東部	(第九卷, Pl. 29)
7) 三カァシャパ調伏 龍窟炎上	前室西壁下層 南部	(第九卷, Pl. 22)
8) 三カァシャパ調伏 火龍鉢中にあり	前室西壁下層 北部	(第九卷, Pl. 22)
9) アショカ王因縁	前室 天井折上部 西側北	(第九卷, Pl. 41)
10) 髑髏仙, 婆藪仙因縁	前室 天井折上部 西側南	(第九卷, Pl. 40)

三カァシャパ調伏を二つの場面にしたことは, かはってゐる。

3

第十三洞は本尊が交脚菩薩の彌勒であり, 南壁中層に過去七佛の立像があり, 拱門には門神があり, 明窓には香爐供養天人がたち, 腰壁には天の供養者と人間の供養者とがあり, このかぎりでは實に緊密な構成をしめしてゐる。けれども, その他の大部分の壁面は, 不規則な佛龕の追刻よりなる。一貫した秩序がない。かうしてみると, こゝの追刻の佛龕は, はやくから一定の範圍内に, ゆるされてゐたものであることが推測される。したがって, 第十一洞のばあひも, 方柱だけは, ある構想のもとに事をはこびながら, 周壁は, はじめから自由な造像寄進に, ゆだねられたかも知れないのである。すると第十一洞の着手は, 太和七年(A.D. 483)をあまりさかのぼらなくてもよいことになる。追刻諸龕のつくられた太和七年から, 太和十九年(A.D.495)ごろまでが, ほゞこの石窟の開鑿に要した期間とみられる。つまり, この石窟の開鑿に, すくなくとも十二, 三年はかゝつたのである。これは一般に石窟開鑿の期間を暗示するものとして參考になる。第七, 第八洞のやうに, 一貫した計畫のもとに遂行されたものは, いくらかみじかい期間にしあげられたかも知れないが, すくなも十年から十五年, あるひはそれ以上の年月を, 要したものとかんがへてよからう。いま第十一洞について特徴をあげてみると,

1) 場所からいって第九, 第十洞についでつくられたこと。

2) したがって, 佛像なり, 莊嚴が第九, 第十洞ふうにできあがってゐること。

3) いな, それよりも一段と便化してゐること。

4) しかし，第五，第六洞をまねた造像のあること。しかし，これは石窟造營中の後半にかぎられるかも知れないこと。

このことは第十三洞にもあてはまる。また，若干の留保をすれば，第十二洞にもあてはまる。つまり，第四項の第五，第六洞ふうの造像がはじまるまでに，この小さい石窟が完了したとすればよいのである。さういふふうに，終末の時期に若干ちがひがあるとしても，着手の時期は，ほゞ三洞ともおなじころであったとおもはれる。いひかへると，太和七年(A.D. 483)ごろである。

さうして，このときには，第七，第八洞はもとより完了してゐた。第九，第十洞は大部分完成をみてをったとはいへ，五華洞西三洞の外壁調整のために，西端の塔を削去されうるほど，部分的には未完了の部分があったらしい。さうして第五，第六洞，そのうちとくに第六洞は，おそらく，その絶大な氣魄をもって，すでに着手されてゐたであらう。そのうち，その清新な樣式は，つひにこの三洞造營に影響をもちはじめたが，それは，おそらく太和の十年(A.D. 486)以後のことであったとおもふ。

圖　版　解　説 (1)

第八卷　第十一洞

Pl. 1.　五華洞外景

五華洞のうち，東の二洞，つまり第九，第十洞が一對であって，したがって外壁もひとつになってゐる。これに對し五華洞の西三洞は，おのおの別個のつくりである。しかし，外壁だけは三洞一様にとゝのへられ，そのうへ西端の第十三A洞までふくんでゐる。岩壁のたかさは約17.00 m，そのうへに約6.00 m ばかりの石づみがある。これは，こゝを高くしないと，丘上の雨水が，みなこの前面におちてくるからである(本書，第一卷，Map 2)。この石づみは碎石をつんだものであるが，なかなか堅牢で，當初の經營かとおもはれる。いま，岩壁上層に梁孔の並列をみ，その最上層に水平の溝のとほってゐるのをみる。たぶん，こゝに棟があって，ふきおろしの片がは屋根があったものとおもふ。總じて，この三洞外壁が第九，第十洞より突出してをることをおもふと，この外壁の開鑿は第九，第十洞よりおくれてゐないやうにおもはれる。この東端に第十洞西端の塔があるべくして，ないのは，すくなくとも，第九，第十洞のをはらないうちに，この外壁のとゝのへられたことを暗示してゐるとおもふ(本書，第七卷，p. 12)。

第十一洞の拱門と明窓，第十二洞の列柱，第十三洞の拱門と明窓のほかに，この外壁には，たくさんの佛龕の鑿られてゐるのをみる。それについては第十卷で，まとめて述べたい。(外壁總高約23.00 m)

Pl. 2.　第十一洞外壁

明窓のわりに拱門は小さい。ねもとは多少まだうまってゐるらしい。明窓のうへに左右二つづゝの梁孔がある。東端にはもうひとつあったかも知れない。外壁の佛龕が，なんら層位づけられてゐないのは，外壁に建造物のあったとする說に不利のやうであるが，建物がなかったといひきるわけにもいかない。明窓右手のくろい孔は方約2.00 mの小石窟(本書，第十卷，Pl. 52)である。(明窓總高12.40 m)

Pl. 3.　洞內南部

この石窟は，まんなかに大きな方柱がある。方柱によってのこされた四方の空間を，東西南北の名でよぶと，これは南房といふことになる。拱門から一歩ふみこんで，東をみたところである。右手に拱門の東側がみえ，左手に方柱の南面がみえ，中間に東壁の南部がみえてゐる。こゝには石窟の上層部はあらはれてゐない。(門高3.00 m)

Pl. 4A.　拱門東側

B.　拱門西側

なんのかざりもない拱門である。あらけづりの鑿あとが天井にのこってゐる。左右は追刻の小龕でいっぱいである。それに，なんの秩序もない。いま門口をせまくするために壁がつくってあって，入口と小さい明窓がある。東側(A)は二佛並坐の龕があり，うへに坐佛の龕が三つばかりあり，したに交脚菩薩の龕があり，その他空所に千佛の小龕が充塡されてゐる。よくみると二佛並坐の龕と交脚菩薩の龕とは一組であるらしい。西側(B)は中位に二佛並坐の龕(Rub. IIF)，したにまた二佛並坐の龕があり，うへに四つ，もとは六つの佛龕があったらしい。したの二佛並坐の龕はほとんど消滅してゐる。(門高3.00 m)

Pl. 5A.　拱門東側諸佛龕

B.　拱門西側諸佛龕

A. したの交脚菩薩龕は楣拱龕であるらしいが，この二佛並坐龕は尖拱龕である。拱額には過去七佛の坐像がある。二佛は破損がはなはだしいが，龕外には脇菩薩がたち，拱額のうへには，また合掌の天人がたってゐる。みなやゝ細手の像である。最上層にくゝった張幕がある。うへは擧手の坐佛龕，小さい龕であるが，くゝった帳幕がついてゐる。わきに合手と擧手の小さい坐佛龕がある。

B. やゝ整然と四つの佛龕がならんでゐる。そとにも，おなじやうな佛龕があったらしいが，それは上層にひとつあったゞけで，下層は小さい千佛龕であったらしい。四つのうち，うへの二龕と南したの一龕は，みな擧手の坐佛で，尖

拱額，左右の天蓋下に侍側の天人がたってゐる。北したの一龕は，腰をかけた菩薩像で楣拱額である。左脚をよせ，右脚をねさせてゐるので，やゝ異様であるが，おそらく交脚菩薩像の變形であらう。したにみえてゐるのは中層の二佛並坐の楣拱龕である。その天蓋かざりがうつくしく，をりかさなった垂幕と三角飾のほかに圓形と三角形のかざりがある。後期の佛龕によくあらはれる裝飾である。（門高 3.00 m）

Pl. 6. 明窓 西側

明窓にも，なんのかざりもない。あらけづりのまゝほってあったとみえ，こゝに追刻の佛龕が彫られたのである。上段は二佛並坐の龕(1)，尖拱龕であるが，拱額に七佛の列龕をおさめてゐるのは異例である。また龕傍に木造塔をうつした三層塔の浮彫(Rub. I J)をつくってゐるのもめづらしい。南がはの塔は，わづかに基壇がのこってゐるのみである。佛龕の拱梁はやゝゆるんで圓にちかく，拱端の獸形もやゝ生氣をかく。木造塔は五成の基壇のうへにたち，各層には坐佛をおさめた二つの龕をならべてゐる。屋根は本瓦ぶき，各層左右に鴟尾のみえるのは，繪そらごとといへよう。五成の露盤，承花，覆鉢，相輪，柱頭の火焔形も，型のごとくである。

下段の南半は千佛龕(2)，中央にやゝ大きい坐佛龕がある。北半は坐佛の尖拱龕(3)（Rub. I B）である。これにも木造形式の三層塔があってめづらしい。寶壇中央の銘區は刻字なく，左右に男女，僧侶の供養者たちが浮彫にされてゐる。南半がくろく，北半が白くみえるのは，ちやうど中間に明障子があって，そとがはの彩色のみが，直射光できえたからである，（窓高 4.10 m）

Pl. 7 A, B. 明窓 西側 二佛並坐像

前圖，Pl. 6 の上段佛龕の本尊二佛である。どちらも細手のきゃしゃな佛である。顔はながい。耳もながい，頸もながい。目はほそく，眉はつりあがってゐる。鼻がとがり，口も兩端がつよくあがってゐる。衣は，左肩から右肩にまはり，そのはしが，まへにさがるとゝもに左腕にかゝってゐる。右手は胸にあげてひらき，のちにいふ施無畏の印 abhay$_a$ mudrā，小指だけはすこしをりまげてゐる。左手はどちらもまへにだし衣端をとるが，指の位置には小異がある。兩腕にかゝった衣は袖のごとく，襟のあひだからは内衣をむすんだ帶がたれさがってゐる。ひだは簡單な刻線であるが，服制はあきらかに中國式（第六洞式）である。衣のしたにみえる膝は大きく，かたく，やゝ形式的である。（像高 0.93 m）

Pl. 8. 明窓 東側

東がはの全景であるが，だいたい三段にわかれ，そのうへ南と北とにわかれてゐる。よくみると，大きなのが八龕あったらしい。最下南端のひとつ(7)は，わづかに龕傍のわきに天人をのこすのみだが，二佛並坐の龕であったことは，からうじて察せられる。そのうへ，このあたりの一尊，あるひは二尊の小龕は，みな粗末なつくりで，しかも未完成のものが多い。このうへの一龕(6)は，この明窓に多い形式，つまり左右に浮彫塔をもった尖拱龕である。こはれてゐるが坐佛の龕である。このあたりにめづらしくゆたかな面相でうつくしい。拱額の坐佛も，どっしりとし，この壁面ではいちばん最初につくられた佛龕かとおもはれる。ことに膝のしたからたれて，ひろがってゐる衣に特色がある。

このうへの二佛並坐の佛龕(4)は，西がはの大龕に似てゐるが，塔形はなく，合掌の脇侍がすぐれてゐる。最上南半の佛龕(2)は一尊の坐佛らしく，顔面は破損してゐるが，のこったそのからだと膝がしらとは，なかなかしっかりしてゐる。寶壇には供養者の列像があり，左右には三層塔がたってゐる。

上段北半の龕(1)もおなじく坐佛の尖拱龕，左右に塔形(Rub. I F)，拱額に七佛をおさめること，他の諸龕に一致してゐる。中段はめづらしく楣拱龕(3)である。兩がはに木造塔形(Rub. I D, E)を彫り，龕内に交脚菩薩像をおさめ，足下に獅子がゐるが，これらはみな未完成である。拱額内にはあさく飛天を彫ってゐる。このしたは太和十九年（A.D. 495）の佛龕(5)（Rub. I c）である。上下二龕，したに刻文造像記がある。（窓高 4.10 m）

Pl. 9. 明窓 東側 太和十九年龕 (5)

明窓東側，下段北半の二龕(5)は，太和十九年の佛龕である。よくとゝのってゐて，上層が交脚菩薩の楣拱龕，下層が三尊坐佛の尖拱龕である。つまり，したが現在の釋迦牟尼佛 Śākyamuni Buddha，うへが將來の彌勒菩薩 Maitreya Bodhisattva で，それはしたの刻文にいふとほりである。したがって，拱額の七佛は，いふまでもなく過去の七佛である。龕内左右に合掌の天人像を配し，龕外左右に單層の塔を浮彫にする。楣拱龕の左右の間には合掌の天人立像をおくが，その左右には，小佛龕をたて一列にならべて，柱のごとくしてゐる。最下の寶壇に刻文の造像記(Rub. I c)があり，その左右に四人の僧侶と，四人の男女の像がある。男も女も頭巾をいただいてゐるらしい。どちらも，ながい外套をき，男は袴子，女は下裳をつけてゐる。まんなかの四人は僧

倍である。太和十九年(A.D. 495)といへば，遷都後一年であるが，それでもまだ，こゝでは，かういふ北方の服裝がおこなはれてゐたのである。(下層龕高 0.85 m)

Pl. 10. 明窓 東側 太和十九年龕(5) 造像記

そまつな刻文である。文字は抑揚のない線よりなり，草書ふうにかるく書いてある。

唯大代太和十九年四
月廿八日。弟仲呂凋昏
七。妻周爲亡夫故常
山太守田文虎。亡息思
須。亡女阿覺。釋迦文佛
彌勒二軀。又爲亡夫亡
息亡女。生々値慶。遭
三寶。彌勒下生。丶丶道。
若墮三塗。速洽解脫。
問法解之。悟无生忍□時。
一切菩三有。同福慶。所
願如此。

問は閒の意であらうが，字は閒にみえる。なほ供養者像のわきに題名があるが，かならずしもその形容と一致しないのはふしぎである。南端男子像わきに「比丘丶丶」，つぎ男子像わきに「比丘道丶」，つぎ僧形わきに「比丘丶丶」，つぎ僧形わきに「比丘惠容侍佛」，つぎ僧形わきに「比丘尼丶丶」，つぎ僧形わきに「比丘尼法丶」，つぎ女子像わきに「比丘周丶」，つぎ女子像わきに「比丘女阿道」とある。

してみると左端の供養男子は亡息思須，つぎは亡夫常山太守田文虎，右端の供養女子は亡女阿覺，つぎは供養者である妻周氏であらうか。文中に釋迦文佛と彌勒とをいふから，したが釋迦，うへが彌勒だといふことがわかるとともに，太和十九年(西暦 495)ごろの造像が，かくのごときものだといふこともわかり，紀年のすくない雲岡造像の様式研究によい參考資料である。(銘區高 0.15 m)

Pl. 11. 南壁 上部

南壁上部を東方からないめにみあげたところである。明窓は大きく，左右の壁はほんのわづかしかない。天井に接するところに繪ばかりの帳幕があり，明窓のうへに崩落した天井がある。拱門がひくいので，明窓とのあひだには，かなりひろい空間があって佛龕をつめこんでゐる。この寫眞では明窓のしたにそうた一層の佛龕を注意されたい。窓したに三龕ある。中央は交脚菩薩の楣拱龕(15)，東方は坐佛の尖拱龕(14)である。これは，たぶん一組であらう。西方は左右に浮彫五層塔をもった上下一雙の佛龕(16)で，うへは交脚菩薩，したは二佛並坐である。したは尖拱龕，うへは屋形龕である。龕傍の浮彫五層塔は，Pl. 14 にま正面にみえてゐる。塔基のしたに，塔を兩手でさしあげた侏儒が上身をあらはしてゐる。この三龕のしたは倚坐佛の尖拱龕(25a)である。龕傍左右に脇侍がたち，龕内左右に天人がたってゐて，その細部は Pl. 22, 23 に，ふたゝびあらはれるが，こゝではその高さ 3.04 m，幅 2.70 m の全體が注意される。最下に基壇があり，基壇のうへにせまい蓮辨文帶があり，左右に合掌供養者をかさねた，せまい柱がたち，最上で樂天の列龕をはさんでゐる。樂天列龕のしたには瓔珞を奉じた化生 aupapāduka が一列にならんでゐる。瓔珞のしたには弧狀にたくりあげた帳幕がある。さうして帳幕のしたから尖拱の左右にかけて，千佛の列龕がある。第七洞から第十洞までには，まったくみなかった龕形式である。しかし，その構成の要素は各石窟のものとも一致し，けっしてとっぴなものではない。(窓高 4.10 m)

Pl. 12. 南壁 下部

前述(Pl. 11)の佛倚像龕(25 a)が拱門のうへにみえ，そのした拱門とのあひだに，より小さい千佛龕が四段，段ごとに二十二龕ならべてある。總數八十八佛，さうして，そのまんなかをみると，交脚菩薩の尖拱龕(25b)がある。その幅をおなじくしてゐるので，おそらく，うへの佛倚像龕(15a)と一組となるものかとおもはれる。この龕のしたに拱門がみえる。ちゃうど Pl. 3 の反對側である。(門高 3.00 m)

Pl. 13. 南壁 上部 東半

天井に接するところに，めづらしく運辨文帶がある。そのしたに帳幕がみえる。いまみられるのは，ほとんど彩繪であるが，しかし，もともと，こゝには帳幕があったことゝおもふ。明窓のわきはせまく，幅 1.10 m くらゐ，うへより一列に佛龕がならび，最下に三層塔がたってゐる。

最上層は二佛並坐の尖拱龕(1)，つぎも同様(2)，しかし，前者はあさい，そまつな彫りである。そのしたは坐佛の尖拱龕(3)で，臺脚のついた座牀がめづらしい。臺座のまへに博山爐をなかにして二人の僧形がたってゐる。浮彫三層塔(4)については，Pl. 24 においてのべる。窓下の三佛龕(14–16)については，すでに Pl. 11 にのべたが，こゝでは，それにならぶ下層の二佛並坐の龕(13)について一言したい。これは尖拱龕で，このあたりの佛龕によく似て拱額内に過

去の七佛をいれ，拱端に獸形をもち，獸形のしたに籐几のやうな柱頭のある傍柱をもつ。龕形のそとが方形に區ぎってあるので，上端に帷幕をつけてゐる。した基壇の墨線はもとより近世の加彩である。（窓高 4.10 m）

Pl. 14, 南壁上部西半

この最上層の蓮辨帶は，西壁にかけてかなりよくのこってゐるのがわかる。うへ二つは坐佛の尖拱龕(5, 6)，そのわきに小さい坐佛龕(7)がある。二龕のしたには，かなり手のこんだ坐佛の尖拱龕(8)がある。これに對し，そのしたの坐佛尖拱龕二個(9, 10)は，大まかなつくりである。一雙龕で，一方は通肩，他方は衣端で右肩をつゝんだ式である。このわきに獨立して浮彫五層の塔(11)があり，そのうへにどこに屬するかわからない二體の供養者がゐて，一方は香爐をさゝげてをり，他方は合掌してゐる。上層の最下は，やゝまとまった坐佛の尖拱龕（12）である。拱額の七佛，拱端の獸形，龕傍の柱形など，すべてこのあたりの佛龕（3, 8, 13, 14）に一致してゐる。これは基壇がない。基壇にあたるところは，したの龕の樂天列になってゐる。したの龕（17）とは一組らしい。交脚菩薩の楣拱龕である。これには基壇があって，中央の銘區をのこして，左右に僧形，男女の供養列像を彫つてゐる。こゝには西壁上層の南部が，かなりみえてゐる。（窓高 4.10 m）

Pl. 15. 南壁下部東半

下層の最上層は一部分かくれてゐる。そのつぎの層は左右一組の佛龕(20, 21)よりなる。東方が坐佛の尖拱龕で，西方が交脚菩薩の楣拱龕である(Rub. I I.)。尖拱龕の形式は，さきにもいった七佛拱額，獸形拱端の部類に屬するが，左右の二龕をとほして弧形の帷幕があり，楣拱龕のうへに天蓋様のものをもつのが特色であり，基壇にはあさい彫りで纖細な供養者列像をつくってゐるのが注意をひく。それから四龕三段の千佛區(22)，その最上部に飛天のもつ瓔珞網がある。この西には上下一組の交脚菩薩と坐佛(23)があり，菩薩が屋形龕にはいってゐるのは窓下三龕の一つ（16 a）に一致する。このしたに，なほ二佛並坐の尖拱龕(24)がある。以上は下層，明窓と拱門とのあひだの諸龕に平行するもので，中層ともいひうべきところであり，これからしたは拱門のわきになる。したがって，破損もひどい。まづ三層になり，最上は四個からなる千佛龕（30），中間は一組の尖拱龕(31, 32)と，二佛並坐の尖拱龕(33)，最下は上緣に帷幕をもった列佛帶をとほすのみで，したの三龕（34）はほとんどのこってゐない。このうち最上の千佛龕四個（30）は，うへの四龕三段の千佛區(22)にはいるべきものとおもふ。すると合計十六佛となって，『法華經』（大正大藏經，第九卷，p. 157—160）化城喩品第七にいふ過去の十六佛[1]をあらはすものかも知れない。そのうちには阿彌陀佛（第六佛）もあり，釋迦牟尼佛（第十六佛）もある。（門高 3.00 m）

[1] 水野，長廣『響堂山石窟』，京都 1937年刊，P. 21

Pl. 16. 南壁下部西半

門上大龕(25)に接して，また上下一組の佛龕(26)がある。うへは交脚菩薩の楣拱龕，したは二佛並坐の尖拱龕，基壇には合掌の天人たちが膝からうへをあらはし，最上層には奏樂の天人列龕がある。それに左右兩端に柱のやうにかさねられた跪坐の供養者たちもめづらしい。尖拱龕のうへには奏樂の天人たちが輕快にとび，楣拱龕のわきには，千佛龕を意味する小佛龕がつがう八つある。このしたにはせまい一帶があり，まづ過去の七佛龕（27）があり，二佛並坐龕（28）があり，また坐佛と交脚菩薩の一對龕（29）が左右にならぶ。このした，つまり拱門の西わきは，大きな交脚菩薩の佛龕(39)がある。これは飛天をうめた楣額，左右の三層佛塔，彫りはあさく平面的だが，なかなか豪華である。この東わきに二三の佛龕(35—38)があり，またしたにも小龕（40—42）があり，最下の床に接してもなほ二佛龕（43, 44）があったらしい。とにかく，その徹底的に追刻をかさねて，空白をうめていったあとが知られておそろしい。拱門わき，交脚楣拱大龕（39）の基壇にのこる，かすかな供養者列像をみよ。これをけづって彫りこんでいった 40, 41, 42 の諸龕，また浮彫塔の空白をうめた小坐佛龕，さういふ佛龕がいたるところにみられるし，中央西端大龕(26)のわきにも若干の追刻佛龕がみられる。（門高 3.00 m）

Pl. 17. 南壁上層西部彌勒菩薩龕(17)

このうへの坐佛龕(16)と一組になる佛龕で，交脚菩薩は，あきらかに彌勒菩薩をあらはしたものである。三尊ともやゝ形式化してゐるが，ゆたかな體軀からなり，端正である。寶冠や瓔珞をみても，ひどく簡略化されてゐるが，やはり第九，第十洞ふうの彫像である。光背が省略されてゐて，冠からたれた布片が，肩にひろがる弧狀の天衣（本書，第五卷，Pl. 97, 110）に連續して，それとひとつになってゐるのは，要するに，そのもとの意味がわすれられたゝめであらう。まじへた足くびはよくのび，獅子も小さいながらに生々としてゐる。龕內左右には比丘の供養像を小ぢんまりとあらは

し，楣拱額中にはなにも彫らず，帳幕をたれてゐる。さうして最上に一列奏樂の天人をならべてゐる。列龕にせず，むきだしに樂天を彫ったところが，この佛龕の特色で，門上大龕(25)，その西部の大龕(26)，あるひは第二洞方柱第一層の各龕(本書，第一卷，Pl. 53—56)より，一歩すゝんだ形式である。かうなれば，當然つぎの段階として第六洞上層のごとき，自由な樂天の添加も可能になってくる。樂天は東から螺貝，排管，竪笛，横笛，腰鼓，小鼓，琵琶，琴の順序にならんでゐる。第九洞前室北壁列龕樂天(本書，第六卷，Pl. 13)のばあひには，琴が不明確であったが，こゝではかなりあきらかである。基壇左右に供養列像あり，そまつな彫刻で，顔面などわからないが，一人は僧形で香爐をさゝげ，その他は俗形の男女である。(Rub. II G)(龕高 1.36 m)

Pl. 18, 19. 南壁 下層西部 交脚菩薩龕 (26a)

このしたの坐佛龕(26b)と一組になる交脚菩薩龕である。うへの佛龕(Pl. 17)とおなじやうに，飛天もなにもない簡素な楣拱額で，弧狀の帳幕もいたって形式的である。楣拱額左右の空白に飛天が一對とんでゐる。龕内左右の脇侍天人は，しづかに合掌してたつが，姿態がやゝ窮屈さうである。獅子を左右にひかへ，交脚した菩薩像は Pl. 17 とおなじであるが，上身すらりとして堂々たるものがある。三種の胸かざりもとゝのひ，腕釧もつき，耳朶のかざりもあり，天衣も寶冠の布片も，方式どほりにつくられてゐる。しかも，圓板を三つならべ，新月形をうへにおいた寶冠(Rub. I M)には，小さい禪定形の坐佛が彫ってある。それはあきらかに『觀彌勒上生經』(大正大藏經，第十四卷，p. 419)による彌勒菩薩のしるしである。よくとゝのって端麗であるが，いくらか形式化のあとはおほひがたい。足下の奏樂飛天は，したの坐佛龕(Pl. 20)の最上層にあたるわけである。(龕高 1.06 m)

P. 20. 南壁 下層西部 二佛並坐龕 (26b)

さきの Pl. 18 のしたにあって，それと一組になる佛龕である。龕内並坐の二佛，多寶佛 Prabhūtaratna Buddha と釋迦牟尼佛 Śākyamuni Buddha は體骼もしっかりし，肉つきもゆたかである。左肩から右掖への内衣，すなはち掩腋衣 antarvāsa[1] がみえ，大衣は右肩にもまはってゐる。結跏趺坐にくんだ足の，右の足くびがみえる。衣のひだはひとつおきに段になった線と刻線とをならべてゐる。豐滿な佛像ではあるが，第七，第八洞より，おくれた作であることは，あきらかである。龕傍，柱がはりにたった脇侍の天人は，なかなかはりのある表情をしてゐる。拱端は尾羽と頭とをまげてうまくバランスをとり，兩脚をしっかりふんばった鳥形である。こゝには身體にも尾翼にも，全然線刻の細部をほどこしてゐないので，かへって丸みがよくあらはれてゐる。拱額は，第七，第八洞ほど，つよく壓縮されてゐない，この洞の通性として，これものびやかな曲線からなる。額内には，あさく波狀唐草文をうめてゐるが，唐草は，枝ごとに蓮華をつけ，そのなかに合掌の童子(化生)が上身をあらはしてゐる。たゞ中央の化生はやゝ大きく，そのしたには二羽のむきあった鳥がゐる。かうした化生の唐草文は，彫りがあさい。まったく，この洞にはじめてみる意匠である。龕のしたには，ほそながく蓮辨をならべ，蓮華座の意をあらはし，そのしたには合掌供養の天人像をならべてゐる。さうして，そのまんなかの博山香爐は，上半身をあらはした大地母神とも名づけらるべきものに，たかくさしあげられてゐる。尖拱額のうへに合掌供養者が密集してならび，また合掌跪坐の供養者が，左右兩端に柱のごとくかさなってゐる。これもこの洞に，はじめてみるところである。最上層の天人は，東より排管，腰鼓，横笛，琵琶，小鼓，排管をもってとんでゐる。(Rub. II H)(龕高 1.80 m)

1 掩腋衣，すなはち安陀會 antarvāsa であらうか。どちらも親衣であるが，その區別はあきらかでない(本書，第四卷 p. 48)。

Pl. 21. 南壁 下層西部 交脚菩薩龕 (39)

この交脚龕は，さきの交脚菩薩龕とちがって獨立してゐる。五成の座に腰をかけ，右手をあげてゐる。左手は破損，衣裳は泥作である。寶冠には，禪定佛をいただき，新月形をのせてゐる。左右に脇侍が合掌してたち，またべつに合掌跪坐の供養者がゐる。楣拱額のうちには平面的な奏樂飛天をとばせてゐる。これは彫り方も異常であるが，樂を奏してゐるのが異例である。拱額にそうて，帷幕が弧狀にひきしぼられてゐるが，幅がせまくて目だゝない(Rub. II E)。楣拱のうへ中央にも禪定佛がゐて，左右から有髮，無髮の合掌供養者にとりまかれてゐるものも，めづらしい。外廓にそうて，またこゝにも帷幕がまはってゐる。左右の龕傍には浮彫三層塔(Rub. I I)がある。第一層は二佛並坐，第二，第三層は坐佛をおさめた二龕並列である。基壇にも四つの小佛龕をならべてゐる。龕の基壇には，もと造像記のための方形の區と，その左右に供養者の列像があったらしい。いまは，ほとんど追刻の小龕(40, 41, 42)によってうまってゐる。(龕高 1.06 m)

Pl. 22. 南壁 下層中央 佛倚像龕 (25a)

この龕の全體は Pl. 11, 12 についてみられたい。尖拱額

もかなりのびて，第七洞，第八洞にみるやうな壓縮されたエネルギィはない。一部に破損があり，本尊の左手，左膝，胸におよんでゐる。鼻も，右足も補修である。顔はまる顔で，身體つきもゆたかである。衣文がめづらしく，階段狀で，その中間に刻線がある。すその二重になってゐることは，第十洞前室の諸尊（本書，第六卷，Pl. 27，第七卷，Pl. 6, 9, 19）におなじである。左右の脇侍は合掌，寶冠なく，たかい寶髻をつけ，顔はひきしまってゐる。右脇侍は右半分がほとんど泥の補修である。龕のしたに肉のゆたかな蓮瓣文帶があり，拱額はあはれに破損しながらも，交脚菩薩を中心に合掌跪坐の供養者たちがゐる。（龕高 1.76 m）

Pl. 23A. 南壁下層中央佛倚像龕(25a) 本尊

B. 南壁下層中央佛倚像龕(25a) 左脇侍

A. 補修の部分は，この寫眞でよくわかる。顔もなかなかしっかりしてゐる。耳のやゝそったところに特色があり，頸のうつりゆきがなめらかで，線があらはれてゐないのは異例である。（像高 1.08 m）

B. こゝには龕傍の柱に，布をかぶせたやうな柱頭飾のあることがよくわかる。その柱頭飾のうへに脚をひろげた虎頭の獸がたってゐる(Rub. I K)。虎頭のうへに，合掌の蓮上化生がゐる。龕內には，さきにのべた合掌寶髻の脇侍がゐるが，龕外には寶冠をつけた脇侍がたってゐる。寶冠のあるなしが重要な區別で，これで菩薩とたゞの天人とをわけてゐるのかも知れない。やゝ脚がみじかく，刻線からなる下裳の衣文が，相かさなる卵形で異樣である。胸のかざり，腕のかざりも刻線でしめし，天衣は肩からたれず，兩腕から背なかに大きくひるがへって像の威嚴をそへてゐる。

脇侍のそとに，合掌の供養者たちが上下にかさなりあってゐる。これは，この龕全體の外廓である。足下にある肉太の蓮瓣文帶は基壇上緣のかざりである。（像高 0.90 m）

Pl. 24. 南壁上層東部浮彫三層塔 (4)

この洞には浮彫塔が多いが，これがもっともふかく彫られた浮彫塔で，また獨立した塔形である。基壇が大きく，どっしりとすわり，これに，遞減率のたかい三層の木造塔がある。第一層は二佛並坐龕であるから，多寶塔といへるかも知れない。第二層は交脚菩薩の楣拱龕，これは將來の佛，彌勒である。第三層は坐佛の列龕，おそらく，過去か未來の佛たちであらう。軒に棰はみえない。大きな肘木らしいものがある。頂上には五成の基壇があり，その四方，實は二方しかあらはされてゐないが，そこに階段狀になった承花がある。あひだに化生らしいものがある。つぎは覆鉢部であり，刹柱には六つの相輪があり，いたゞきに寶珠形があり，そこから二旒の幡が左右にひるがへってゐる。塔の左右には脇侍とも，供養者ともいへる天人が二人たってゐる。ごくあさい彫りであるが，橢圓形のかさなった刻線のひだは，Pl. 23B の脇侍に一致する。塔のうへに刻線で天蓋が彫ってある。基壇の香爐をなかにした供養者たちは，なかの七人が僧形，左の三人が男子，右の二人が女子である。左右シムメトリックでないのは，この浮彫塔の供養者と關係があるためであらうか。（塔高 1.34 m）

Pl. 25. 東壁南部

これが東壁の南半である。この寫眞には床に接するところが，すこし足りないが，その他は，天井に接する蓮瓣文帶まで，すっかりみえてゐる。佛龕の配置は，みるとほりの不規則である。むかって右に南壁がみえ，左に方柱南面がすこしみえてゐる。（壁高 13.00 m）

Pl. 26. 東壁南部上半

最上の二龕がみえ，つぎに四龕と二龕が，それぞれにグルゥプになってゐるらしい。天井に接して蓮瓣文帶があり，天井東の間の交龍がみえてゐる。したの四龕は，うへの二つ(4, 5)がほゞ同大，同形式で，一組かも知れない（Pl. 29）が，上下のあひだには大きさのちがひがあって，一組とはいひがたい。また，したの二つ(9, 7)は交脚菩薩龕と坐佛龕であるが，二龕のあひだに，どうしたわけかあきがあり，形式のうへにもちがひがあるので，これも一組とはみとめがたい。これに反し，むかって左方の二龕（8, 9）は一組であるらしい。北がはの坐佛はすっかり補修であるが，南がはの交脚菩薩龕(Pl. 32)はよくのこってゐる。飛天をおさめた楣拱，左右にたった三層塔，いづれも細密なつくりである。この楣拱龕も，楣拱のしたばと，龕の上緣とに二重の帷幔がある。（第一龕高 3.40 m）

Pl. 27. 東壁南部下半

南端に千佛の地文樣(15)がある。最上に天蓋樣のかざりがあり，最下中央に坐佛の龕がある。千佛は總數158ある。大龕の坐佛はかなり補修がある。五成の基壇には左右にうづくまった鹿がゐて，鹿野苑 Mṛigadāva の說法であるらしい。しかし，それにしては，右手が膝のうへにあるのが解しがたい。もちろん，右半身右手の修理ははなだしいが，右手の位置はなにか痕迹のあったものとおもふ。これについで

北方には交脚菩薩の楣拱龕が三段(16, 17, 18)にかさなってゐる。したには，なほいくつかの佛龕があったらしいが，すっかり破損して，補修の泥作のみである。(第十五龕高 4.47 m)

Pl. 28. 東壁 上層

この寫眞は南端がごくわづかみえぬが，東壁上層はほとんど北端までうつってゐる。南端千佛龕(1)のつぎに，交脚菩薩の楣拱龕(2)があり，つぎにほとんど崩壞してゐるが，坐佛の尖拱龕(3)があったらしい。このあとの二龕(2, 3)は帷幕をともにし，一組の佛龕であったことがあきらかである。そのつぎの中層中央部一組の二龕(8, 9)についで，北方に，なほ若干の小龕(10, 11)があったらしいが，いまはまったく後補の泥作である。(第二龕高 3.10 m)

Pl. 29. 東壁 上層南端 太和七年龕(1)と坐佛龕(4, 5)

天井の蓮瓣文帶に接して樂天列龕があり，欄杆にあたる一帶があり，さらにひきしぼった帷幕がある。つぎの一區(1)は上中下三段，左中右の三列，合計九區に分割され，上層右と左は千佛龕，合計八十八のはずであるが，いま右上と左下に三龕を缺き，中段右に一龕を多くもってゐる。上層中央は，交脚菩薩の楣拱龕，坐佛の尖拱龕二，二佛並坐の尖拱龕といふことになる。中層は左右が二段になり，供養者の列像，中央が胡坐の三菩薩である。下層は左右供養者列，中央が造像記である。これだけが一セットで，その造像記の「石廟形像九十五區および諸菩薩」といふに相あたる。

したにほゞ同大同形式の坐佛の二龕(4, 5)がある。むかって右に明窓の東がはがみえ，また南壁上層の浮彫塔(南壁4)の側面がみえる。(龕高 3.10 m)

Pl. 30. 東壁 上層南端 太和七年龕(1) 下部

前述千佛龕の中層，下層の中央とむかって右方とである。中層中央には安坐の三菩薩，それぞれに未敷の蓮華を手にしてゐる。手の配置はシムメトリック，左の顏は修補である。それぞれ肩に題字があって，南端は「文殊師利菩薩」Mañjśrī,中央は「大勢志菩薩」Mahā-sthāmaprāpta, 北端は「觀世音菩薩」Avalokiteśvara といふ。なぜこの三菩薩の組みあはせができたかは，はっきりしない。うへの一龕に阿彌陀佛 Amitābha があり，その脇侍として觀世音，大勢至がえらばれ，他の一龕が釋迦佛として文殊菩薩があらはされたのであらうか。かんたんな三面寶冠をつけ，天衣と下裳をつけてゐるが，どれも刻線のひだである。三菩薩のわきにも供養者列像があり，下層の造像記のわきにも供養者列像があり，僧形には「邑師丶丶」，「邑師法宗」，「邑師曇秀」，「邑師普明」の題名がみえる。上段には手をくるんだ僧があり，下段には柄香爐の僧，蓮華をさゝげた僧があり，簡明にして生々としてゐる。俗形供養者の左衽，男女帽子のちがひも，よくみとめられる。(銘區高 0.38 m)

Pl. 31. 東壁 上層南端 太和七年龕(1) 造佛記

太和七年の造像記である。つくった人は村の善男善女五十四人，つくられたものは石廟形像九十五軀および諸菩薩といふ。諸菩薩は題辭にいふごとく文殊，勢志，觀音の三菩薩であり，石廟形像九十五軀は中央龕の五尊と小龕九十とをさすものであるらしい。さうすると現存の八十六に破損の三つをくはへても八十九であるから，左下の破損部では供養者列の中層にくひいつて，もう一龕あったのであらかう。

「邑師法宗」の題名についで，つぎの造像記がある。

太和七年歲在癸亥，八月卅日，邑義
信士女等五十四人，自惟往因不積，生在
末代，甘寢昏境，靡由自覺，微善所鍾，遭
値聖主，道敎天下，紹隆三寶，慈被十方，
澤流无外，乃使長夜改昏，久寢斯悟，弟
子等，得蒙法潤，信心開敷，意欲仰酬，洪
澤莫能從，遂是以共相勸合，爲國興
福，敬造石廟形像九十五區，及諸菩薩，
願以此福，上爲
皇帝陛下，太皇太后，皇子，德合乾坤，
威踰轉輪，神被四天，國祚永康，十方歸
伏，光揚三寶，億劫不墜，又願義諸人，
命過諸師，七世父母，內外親族，神栖高境，
安養光接，託育寶花，永辭穢質，證
悟无生，位超群首，若生人天，百味天衣，
隨意飡服，若有宿殃，墮洛三途，長
辭八難，永與苦別，又願同邑諸人，從
今已往，道心日隆，戒行淸潔，明鑒
實相，暈揚慧日，使四流傾竭，道風
堂扇，使慢山崩頹，生死永畢，佛性明
顯，登階住地，未成佛間，願生生之處，
常爲法善知識，以法相親，進止俱遊，
形容影響，當行大士，八萬諸行，化度
一切，同善正覺，逮及累劫，先師七世父

かなりよくとゝのった，雲岡第一の造像記であるが，これよ

り以下が缺けてゐるのはどうしたわけであらうか。はじまりには刻線の界があり，末尾に刻線の界がないのは，のちに削去したやうにみえる。あるひは，はじめに記を彫り，のちに供養者列像を彫り，場所に窮したため，かういふことになったのであらうか。（銘區高 0.38 m）

Pl. 32. 東壁 上層中央 交脚菩薩龕 (2)

高さ 3.10 m，幅 3.28 m の大龕である。龕内ひろく，交脚菩薩と半跏思惟像とをおさめ，龕傍にすらりとたった長身の脇侍像を彫ってゐる。みな總體に細づくりである。その點，洞内でもとくにいちじるしい。本尊顔面に，補修があるが，その他は保存がよい。右手をあげ，左手を膝においてゐる。天衣が大きく肩にかゝり，まへで圓環によって X 字形にまじはるほか，襟でをりかへした衣端が左右にひらき，しかも胸もとでそれをむすんでゐるなど，まったく異例の服裝である。三面寶冠もきゃしゃになり，中央には坐佛があらはされてゐる。楣拱額には幕があり，中央水平部と左右の翼部には坐佛龕をならべてゐるが，菱形部には飛天をおさめてゐる。楣拱のうへは，破損してゐるけれども，奏樂の天人たちを彫り，そのうへに，大きな帷幕をつくってゐる。さらに無文の一帶があり，そのうへに樂天の列龕がある。かんらい，この無文帶は第九，第十洞の例でいふと，萬字くづしの欄杆のあるところである。こゝではそれがあらはされてゐないのみならず，この樂天列龕は全壁にとぼってゐない。頗全體のものであるよりも，この二つの龕(2, 3)だけに屬してゐるものらしい。（龕高 3.10 m）

Pl. 33. 東壁 下層中央

こゝには，おなじやうな交脚菩薩龕が上下に三つ(16, 17, 18)(Rub. IIA)さらに交脚菩薩龕と坐佛龕が上下に三つ(19, 20, 21)かさなってゐる(Rub. II B)。そのあひだにどういふ組みあはせがあるのかわからぬが，北のうへ二つ (19, 20) が佛，菩薩の一組であるかとおもはれる。この二つの本尊は，ともに補修の泥作であるが，龕形はほゞ完存し，したは三層塔を左右にした尖拱龕，うへは柱を獨立に切りだした，めづらしい楣拱龕である。第六洞北壁下層の大楣拱龕は柱が獨立するやうに鑿られてゐるが，第七，第八洞北壁上層の大楣拱龕は柱をもってゐない。柱をもつことは第九，第十洞以後にふつうであるが，その柱がこのやうに獨立するのは，ほとんど第十一洞内だけの現象である。楣拱内の飛天は樂を奏してゐる。わりに平面的であるのは上層中央部の交脚菩薩龕(8)におなじであり，楣拱のしたと龕區の上緣に帷幕のあるのも，この洞ではよくみるところである。楣拱のうへに千佛の坐佛龕がならび，龕の端には供養者をかさねて，しきりとする。柱の頂上には帷幕にそうて化生 (Pl. 34) を彫りだし，柱のねもとには小さい僧形の合掌像を彫る。したの供養者の列像は僧ばかりで，かなりふかく彫ってあるのが特色である。しかし，銘區のきりとられたやうにくぼんでゐるのは，どういふわけであらうか。(第十九龕高 1.56 m)

Pl. 34. 東壁 下層中央 交脚菩薩龕 (16, 17)

うへは左右に浮彫三層塔をもった楣拱龕，したは寶髻の脇侍をもった楣拱龕である。楣拱のうへは，一方に天蓋があり (Rub. I A)，供養者の群像があり，他方に千佛の列像がある。また楣拱のうちも，前者には瓔珞を手にした飛天がとんで，楣拱のそとに交錯する弧をえがき，後者はたゞふつうにみる飛天で，べつに帷幕をさげてゐる。五成の座，左右に侍立する供養者，獅子のかはりに跪坐する供養者は，上下ともにおなじである。本尊の交脚菩薩像 (Rub. I K, O) もよく似，やゝ細手のつくりで，その製作のおくれてゐることを暗示するが，服裝の形式はやはり雲岡にふつうみるところのごとくである。下裳のすそにたれたひだが特異である。（第十七龕高 1.60 m）

Pl. 35, 東壁 北部

北部はすっかり破損してゐる。修理した壁もまたいたんでゐる。うへの蓮瓣文帶もまったく繪である。そのしたの列龕は上層二龕 (2, 3) のうへをかざる樂天龕である。したの方に三，四の龕窩をみるのは，もとこゝに佛龕があったためであらう。この圖版によって北壁の破損，また最初から大した佛龕もなかったやうすを察知されたい。（壁高 12.80 m）

Pl. 36. 北壁 東部

Pl. 37. 北壁 西部

東壁北部につゞいて，こゝも破損してゐるので，なにもいふべきものはない。左端にみえる立像は，まったく後世の附加である。たゞこの圖版によって東壁下部，あるひは西壁下部のやうすをみられたい。（壁高 12.60—13.40 m）

Pl. 38. 西壁 北部

これも破損がひどい。下層の七佛列像もすっかり補修の泥作にかはってゐる。（壁高 13.40 m）

Pl. 39. 西壁 南部

この寫眞では西壁のほとんど全部がみえてゐる。南のすみが，天井からほとんど床にちかいところまでみえてゐる。その不規則である點，しかし，角だって西壁と南壁とがまじはってゐる點を注意されたい。（壁高 13.00 m）

Pl. 40. 西壁 南部 上半

Pl. 41. 西壁 南部 下半

西壁も東壁，南壁と同樣に，小龕の追刻でうまってゐる。たゞこゝは，中層に大きな七佛の列像をつくって，單調をやぶってゐる。床の石敷はもとより近世のものである。（壁高 13.00 m）

Pl. 42. 西壁 北部 上半

天井のまはりに蓮瓣文帶がはしってゐる。つぎに合掌供養者の列像があるのは，小龕にかゝはりなくあるので，最初の石窟造營計畫中のものかとおもはれる。

南端六龕の北に，楣拱大龕（7）があり，これらの龕のおくには千佛龕をいたゞいた楣拱龕(8)があり，そのしたにはまた千佛龕にとりまかれた大龕(20)があったらしい。いま大破して，その千佛の一部がみられるのみである。なほ，佛龕群11—19と，この佛龕(20)のした，七佛立像の屋根のうへには，千佛の小龕をならべてゐる。この圖版には，大破してゐるが，ほとんど西壁のおくまでみえてゐる。（第七龕高 2.90 m）

Pl. 43. 西壁 北部 下半

南方からみた西房のやうすである。中段に七佛がならび下段に小龕がみっしりと彫られてゐる。むかって右手に方柱がみえ，左手に拱門の側壁がみえてゐる。（軒高 2.50 m）

Pl. 44. 西壁 上層南部

南端の六龕，うへ二つ(1, 2) はまったく同大同形で，どちらも交脚菩薩の楣拱龕である。上層に七佛をならべたのも下端に蓮華をつけたのも同樣である。方座の左右には，獅子でなく，合掌跪坐の人物がゐる。佛龕 3 と 5, 4 と 6 はそれぞれに一組であるかも知れない。前者はどちらも坐佛であるが，楣拱と尖拱と相對し，合手と擧手と變化をつけてゐる。後者も，楣拱と尖拱とを對せしめたのは，やはり一組のつもりかとおもはれる。楣拱龕 4 は，めづらしく二體の交脚菩薩である。一體は兩手を胸にあげ，一體は片手を胸に，片手を膝において，交脚菩薩の二形式をならべてゐる。坐佛の尖拱龕 6 は寶壇を二段にしきり，さまざまな姿態からなる侏儒像(Pl.45)を彫ってゐる。たゞ上段中央二體だけは香爐をさゝげた俗形の供養者である。

つぎの交脚菩薩の大龕(7)は北端の坐佛の大龕(8)と一對になるのかも知れない。後者は，過半が破損し，本尊も後補である。たぶん，楣拱龕であったらしいが，楣拱をひくゝさげ，うへに千佛小龕を二段にならべ，最上には瓔珞を交錯する飛天を彫る。その形式はまったくあたらしい。寶壇には供養者列像があり，蓮瓣文帶がある。右廂の交脚菩薩像はたしからしいから，めづらしい三尊形式であったといはなければならない。前者，すなはち交脚菩薩の大龕（7）も，楣拱が二重の框どりになってめづらしい。框には連珠文がある。楣拱のうへは七佛の小龕がならび，その最上に帷幕がある。左右の龕壁には合掌の脇侍がたち，方座のまへには合掌跪坐の供養者がゐる。この交脚菩薩に侍する二對の供養者は，この石窟では，いたるところにある。たとへば西壁佛龕 1, 2, 14，東壁佛龕 8, 16, 17, 18 はみなさうである。本尊は本壁諸龕ほどでないが，やゝ細づくりである。龕傍はめづらしく四つに區ぎり，合掌跪坐の供養者たち，飛天，それから坐佛の小像があり，寶壇には僧と男女の供養者列がある。

そのつぎの層は，坐佛の尖拱龕二つ(9, 10)，これで窓のしたになる。拱額は五佛，七佛の過去佛。本尊坐佛は，どちらも擧手形であるが，衣端をにぎる左手は，一方は手の甲をしたにし，一方は手の甲をうへにしてゐる。南の龕は供養者像の寶壇，北の龕は浮彫涅槃像の寶壇(Pl. 45)である。

つぎは三龕(11, 12, 13) が上下にかさなってゐる。したの交脚菩薩の龕(12)と二佛並坐の龕(13)はたしかに一組である(Rub. II K, L)。うへの坐佛龕（11)は獨立してゐる。北隣の交脚菩薩龕(14)とも，高さがちがひ，形式もすこしちがふ(Rub. I G, H)。そのおくに，同大の坐佛尖拱龕が上下に二つ(15, 16)ある。これらのしたに交脚菩薩の楣拱龕二(17, 18)と坐佛の尖拱龕一(19)とがある。この三者の緊密な構成をみると，あるひは一組であるかとおもはれる。

下部南端は浮彫七層塔(21)にはじまる。これにも刹柱のうへから大きな幡が二旒ひるがへってゐる。これにとなりして坐佛の尖拱龕(22)があり，また，交脚菩薩の屋形龕(23)があり，佛倚像の楣拱龕(24)があり，そのしたに交脚菩薩の楣拱龕(26)を中心にして，二佛並坐と坐佛との尖拱龕（25, 27)がある。うへの二龕（23, 24）が一組であり，したの三龕(25—27)が一組であることは，ほゞうたがひがない。そのうちにみる屋形龕(Pl. 45)は，この洞における唯一の例である。傍柱大斗のうへの三つ斗がめづらしい。こゝまでは下層

といっても，七佛の屋根よりうへにある。七佛の列像(36)と同高に七つの龕，一つの塔(28—35)があり(Pl. 41)，これよりしたにはまた多數の佛龕(37—62)がある。(Pl. 41, 46, 48)

七佛の列像は，いまゝでのべてきた追刻の佛龕とちがって大きい。像高約2.30m，いま南からの五佛はよくのこり，こゝにみるとほりであるが，あとはまったく補修の泥作である。列像のうへに屋根をまうけ，椽と瓦を彫りだしてゐる。屋根よりうへで，西壁は北にゆくほどおくまってゐる。これは石窟の開鑿が完成しなかった結果とおもはれる。(軒高2.50 m)

Pl. 45. 西壁上層南部坐佛龕 (10)

獨立した龕であって，尖拱額には五體の坐佛がある。左右に二體の脇侍，まはりに供養者の像をならべてゐる。本尊はふつうの擧手形の坐佛であるが，やゝ形式化してゐる。寶壇に獅子，獅子のあひだに合掌，あるひは香爐をさゝげた供養者たちがをり，そのあひだに涅槃像をつくってゐるのがめづらしい。臺(棺？)のうへによこたはった佛，ひざまづいて足をもってゐるのはマハァカァシャパ Mahā-Kāśyapa (大迦葉)か。たって頭に手をふれてゐるのはだれだかわからない。貧弱ながら二本の沙羅樹 śāla がたってゐる。佛傳像はすくなくないが，涅槃 Nirvāna をあらはすものは，これと第三十五洞内の浮彫のみである(Rub. II D)。

ブッダヤグシャBuddha-yakṣa(佛陀耶舍)と竺佛念譯『長阿含經』(大正大藏經，第一卷，p. 28, 29)卷四には，「マハァカァシャパおくれていたり，アァナンダに佛身を拜せんことを請ふが，ゆるされず，やむなくマハァカァシャパ大香積にむかふと重棺中より兩足がでゝきた」といふ。これにふれてゐるのはマハカァシャパである。(第十龕高1.20 m)

Pl. 46. 西壁下層南端諸佛龕 (25—35)

この昭和十三年(1938)度の寫眞には，ほこりが，いっぱいたまってゐる。最上の三龕(25—27)は一組の佛龕群らしい。交脚菩薩を中心にして，坐佛と二佛並坐と，それぞれ變化がある。南端の塔のしたは二龕(28, 29)が上下にならび，二佛並佛の尖拱龕と坐佛の尖拱龕であるのは，やはり一組のつもりかも知れない。しかし，交脚菩薩をふくまないのは異例である。したの龕の龕傍左右に合掌跪坐の供養者がゐるのはめづらしい。香爐を中心にして左右に合掌跪坐の比丘像が，いきいきと彫られてゐる。つぎの三龕(30—32)は，もとより一組で，うへは獅子をしたがへた交脚菩薩，左右に半跏思惟像がゐる。半跏像の脇侍は當然であるが，ほとんど，足下の獅子を略してゐる，この洞内で，獅子を彫ってゐるのはめづらしい。なほ左右に坐佛の四龕をつくってゐるのは，したの二龕と幅をそろへるためとおもはれる。したの二龕は左右まったくおなじ坐佛の尖拱龕，拱端が半パルメットの唐草文になってゐるのが注意される。二釋迦佛，あるひは釋迦，多寶佛であらうか(Rub. II I, J)。

つぎの三層塔をなかにした二龕(33—35)も一組である。ふつうにみる交脚菩薩の楣拱龕であり，坐佛の楣拱龕であるが，なかに塔をはさんでゐるのが，かはってゐる。塔は一層に二佛並坐をおさめ，多寶塔の名に價する。各層の屋根に鴟尾があるのは現實の木造建築では說明できない。(第三十三龕高1.03 m)

Pl. 47, 48. 西壁下層七佛列像

昭和十三年(1938)には，この西壁の七佛についで，北壁にまはってもうひとつの立像があった。つまり八佛であったのである(Pl. 37, 38)。ところが，南の五體は，ほゞもとのすがたをたもってゐたが，北の三體はみな近ごろの泥作であった。そののち，その補泥をとりのぞいてみると，Pl. 45B にみるごとく，北の二體は，なほもとの像の一部をとゞめてゐたが，北壁の一體は，痕迹もなにもないものであった。この七佛の像はわりに細づくりである。服裝が中國式で，第六洞の佛像によく似てゐる。しかしそれよりも肩幅がせまい。頭髮なんかも變な波狀で，第六洞の佛像より，はるかに形式化してゐる。もしさういふ點から作の前後を判斷すれば，この方が，あとからできたものゝやうにおもはれる。せまい區域におしこまれてゐるせゐか，光背なども略されてゐる。しかし，七佛は，もちろん過去の七佛である。が，さういふものをつくらうとしたことは，第十三洞とも，また第十洞ともおなじである。たゞ追刻の小龕ばかりの壁面に，これだけの大きな七佛列像をつくったのは，どういふ事情であったのか解しがたい。佛像と佛像とのあひだには，かんたんな彫りであるが，一樣にわりに大きい佛龕がある。坐佛もあれば，二佛並坐もあり，交脚菩薩の龕もある。また，そのしたにもっと小さな坐佛龕が不規則に彫られてゐる。この小龕のしたは，各處(Pl. 65, 66)にあらっぽい文字がきざまれてゐる。(軒高2.50 m)

Pl. 49. 西壁下層七佛列像

よくのこってゐる南の五體を北からみたところである。額がひらたく，鼻すぢがとほり，顎がでゝゐることは，雲岡佛一般にみるところ，耳のうしろのふかい彫りこみも，また

さうである。顔をふかく彫り，すそをあさく彫り，こゝにみるやうに，まへに大きくかたむいてゐる。みな右手をあげ，左手をさげた同形である。足の彫りはおそまつであり，床も荒けづりであり，まへにつよく傾斜してゐるのは，したからみることを考慮にいれてのことらしい。

南端北向の小壁に，浮彫三層塔を彫り，坐佛の尖拱龕を彫ってゐる。塔の第一層は二佛並坐で，多寶塔とおもはれるが，したよこに供養者の小像を彫ってゐる。(軒高 2.50 m)

Pl. 50. 西壁下層北部

このやうに，おくほど，したほど，いたんでゐる。したの諸龕(48—55)はみな修補の泥作である。うへは現存する最おくの一龕(47)が坐佛の楣拱龕，つぎが坐佛の尖拱龕(46)，これも本尊は補修。そのつぎは，うへが坐佛の二龕(44)，したが坐佛の一龕(45)であるが，したには天蓋がとびだしてゐるし，うへには帷幕が二龕よりも北にのびてゐたらしい。はじめに楣拱の大龕があり，のちに 44, 45, 46 の小龕が彫られたのでないかとおもはれる。もし，さういふ大龕が，はじめにあったとしたら，44 の二佛龕は楣拱上隅の千佛龕の一部にすぎなかったことになる。これについで，やゝ大きな二佛並坐の楣拱龕(43)がある。うへ一列，左右一列に千佛の列龕をならべてゐるのは，めづらしい。(第四十二龕高 1.50 m)

Pl. 51. 西壁下層南端交脚菩薩龕 (37)

この像は下半身が補修である。右手も補修である。水瓶をもった左手も，もとのものではない。しかし，上半身はよくのこり，瓔珞もあり，寶冠もとゝのってゐる。寶冠のまんなかに禪定佛があり，まはりに旋回する焔のごときものがみえるのはめづらしい。顔貌は，よくとゝのつてゐるが，やゝ形式的である。楣拱額には飛天をうめ，まんなかに合掌の交脚菩薩像がある。楣拱額のうへには奏樂の天人がたち，そのうへには禪定の坐佛が帷幕のしたに十體ならんでゐる。樂天の衣裳が全身をまとってゐるのは第九，第十洞，第一，第二洞にみないところである。拱額のしたばは，三角垂飾と帷幕とがあり，左廂は崩壞するが，右廂の脇侍はよくのこつてゐる。豐滿な肉つきの，うすものをまとった菩薩形である。左手にたかくさしあげてゐるのは香爐か，燈火であらうか。しかし，左廂の崩壞も，けっして，このごろにおこったものではない。この部分に，なほ當時における追刻の小龕がみられる。(Rub. II c)

したの小龕 38 は未成，小龕39は補修，40, 41は小さいながらに，まとまった尖拱龕であって，裳かけ座が目だつ。そのした 58 の尖拱龕は本尊が坐佛であるが，拱額內に交龍のゐるのがめづらしい。(脇侍高 0.90 m)

Pl. 52, 53. 西壁下層南部交脚菩薩龕 (42)

前者についで，もうひとつ北にゆくと，この佛龕(42)になる。東壁第十九龕(Pl. 33)に似て，二本の傍柱が獨立してうきだしてゐる。それに，柱のうへに化生がつき，ねもとに比丘の合掌立像がある。それに楣拱內の平面的に彫られた樂天，そのうへの千佛列龕も一致してゐる。內部は，交脚菩薩を中心に，左右に半跏思惟像があり，その中間に菩薩の立像がある。交脚菩薩に半跏思惟像をくみあはせたことは東壁第二龕に一致し，また第一洞(本書，第一卷，Pl. 21)，第七洞(第四卷，Pl. 32)，第九洞(第六卷，Pl. 17)，第十洞(第七卷，Pl. 8) など例が多い。諸像はほそい，きゃしゃなつくりで，鯖のやうになった下裳のひろがりは，とくに纖細である。なほよくみると，この纖細な，せまい裳すそのひだは左右の脇侍像にも共通であるが，脇侍の顔，とくに脣のまはりは本尊にそっくりである。左右半跏思惟像のひだや口もとは，それほどに似てゐない。寶壇には坐佛の六龕が追刻され，さらに三龕，また一龕が追刻されてゐるが，前者はみな左右の龕傍に供養者の像をあさくつけたしてゐて，めづらしい。

このした(Pl. 43)には二佛並坐の龕(49)があり，そのしたには交脚菩薩の龕(52)がある。これはもとより一組の佛龕(Pl. 44)である。なほ，この北には坐佛の龕(50)があり，またそのしたにも佛龕(53)の一部があり，南にも坐佛の尖拱龕 (48) がある。この最後の佛龕は，その龕傍にある細身瘦軀の合掌菩薩像が印象的である。(第三十八龕高 1.50 m)

Pl. 54. 方柱南面

方柱南面の全景である。上下二層にわかれ，明窓に對する上層は交脚菩薩を中心とする三尊龕である。左右は半跏思惟像。あくどい彩色ですっかり見ぐるしくなってゐるが，寶冠正面にはたしかに禪定佛がある。三尊ともながい下裳をつけ，大きな天衣をつけ，ほとんど全身をつゝんでゐる。三尊ともほそく，きゃしゃで，西壁第三十八龕に似てゐるが，よりぎこちなく，形式化してゐる。本尊は方臺に坐し，左右脇侍は籐椅子やうのものに坐してゐる。

下層は三尊佛立像であるが，すべて補修であり，極端な補彩がある。光背のそとに瓔珞の羅網ともいふべき一帶があり，それを手にして比丘の合掌像がならんでゐる。さらに，

そのうへにも合掌した比丘の群集がゐる。光背の左右，脇侍のうへには數體づゝの樂天がゐる。その右は，したから腰鼓，小鼓，横笛，排管，？，左は，したから琴，琵琶，竪笛，排管，竪笛といふ順序である。左右の柱には坐佛の龕が一列に上下にかさなってゐる。さうして，そのうへには三角垂飾がある。三角垂飾のうへは鱗狀垂飾，そのうへは無文帶，最後に三角飾と葱頭が交互にならんでゐる。

上層龕よりもうへは，五成の座があり，そのうへには四隅にパルメットの唐草文飾があり，その中間に三面四臂の神像がみえる。左右第一手は不明，第二手は日月をさゝげてゐる。中央の顏は寶冠をつけ，左右はとがり帽をかぶってゐるが，すっかり變化してしまって，第七，第八洞門口のやうなおもかげはまったくない。とにかく，この方柱が，意味のうへでは一個の塔廟 stūpa にほかならぬことは，その上層の構成からあきらかである。（方柱高 13.22 m）

Pl. 55. 方柱南面下層右脇侍と左脇侍

左右脇侍の泥をおとすと，すその一部をのぞいて，わりに保存のよい菩薩像があらはれた。しかし，その樣式は，あきらかに北魏のものでない。體軀はほそく，手もほそい，顏もすっかりちがひ，丸味とゝもにやはらか味がある。長大な耳朶，耳からたれた布片，それが胸わきにたれ，天衣が兩腕にかゝるが，その方式はまったく北魏のものとちがふ。下裳のひだも，まったく別樣で，これに似たものをもとめれば，むしろ大同華嚴寺の菩薩像などであらう。それとともに彫法などもちがひ，一般にあさく，もっとも幅ひろのところで背面に接してゐる。雲岡の一般彫像では，もっとも幅のひろいところはむしろ壁から遊離し，そのおくのせまいところで壁に接してゐて，そのため，ほとんど丸彫像のごとくみえるのである。いま，これの製作年代をたしかめる資料はないが，華嚴寺菩薩像との一致から，いちおう，遼代の製作といふことがかんがへられる。つまり，なにかの事情で彫りのこされてゐたところに，これを彫ったものとおもふが，左脇侍の左がはの小龕が，みな北魏の製作であることからすると，やはり，あら彫り程度にはつくってあったものかとおもはれる。右脇侍右わきの小龕には，あたらしいものがあるやうである。（像高 3.37 m）

Pl. 56A, B. 方柱南面下層右脇侍と左脇侍頭部

A. 寶冠が略されてゐる。顏がまるく，耳もまるく，やはらか味がある。白毫 ūrṇa のあとがあり，瞼はゆたかで目の切れこみがふかく，その線は波うってゐる。口にはいはゆる古拙な微笑なく，脣はゆたかで，やはらか味がある。頸はほそく，北魏の像ほどつよくない。

B. 破損してゐるが，寶冠はひくい。右脇侍とは，かなり表情がちがふ。眉目がやゝつりあがり，口が大きく，頰がふくらんでゐる。耳がひどく長大で，とゝから布片がたれさがってゐる。この寫眞でみても，いくらかわかるやうに，石の肌が，あまりいたんでゐない。

Pl. 57A. 方柱南面下層左脇侍側面
B. 方柱南面下層左脇樂天像

A. プロフィルをみても，なめらかである。やはらか味があり，やさしいが，量感がたりない。むかって右端にみえるのは，方柱の隅柱にある坐佛龕のかさなりである。坐佛はほそく平面的で，しかも，衣文は右肩をおほふ式ばかりであるのは異例である。

B. 左脇侍光背のうへにある樂天像である。方座に安坐し琴をかなでゝゐる。そのうへは琵琶を奏してゐる。やゝ形式化にすぎ，調子もはづれてゐるが，その面貌その他よりすると，やはり北魏のものであらう。

Pl. 58A. 方柱南面と東面下層
B. 方柱東面下層

これをみると，すっかり泥作であることがわかる。東面は一尊で，左右の脇侍がない。しかも龕底が波うって，とゝのってゐない。東南角の柱の東面には，追刻の小龕がたくさんならんでゐるのをみるが，東北角の柱は凹凸はなはだしく，もとのすがたを察しがたい。（像高 5.08 m）

Pl. 59A. 方柱北面下層
B. 方柱西面下層

いづれも一尊像であるが，みな泥作である。一部分，頭部や臺座に石がみえてゐるが，北魏の像があるやうにはみえない。いな，北魏の像は完成をみなかったものとおもはれる。といふのは，その凹凸のまゝの龕底や，あらけづりの壁面(B)から察せられるのである。西面北端に追刻の小龕が二つみえ，南面西端に柱上にならぶ坐佛小龕がみえる。

Pl. 60. 方柱南面と東面上層

方柱南面の三尊菩薩交脚像がみえ，東面の二像並立像がみえる。のみならず，南面と同樣な天蓋かざりと承花，それに多臂神がみえる。二層の塔形を意圖したことはあきらかであるが，とにかく異樣なつくりである。これからうへに

天井が展開し，各方面に交絡の龍がゐる。

Pl. 61. 方柱 北面と西面 上層

前者のちゃうど反對の西北面である。やはり各面の二佛並立像がみえ，また下層の天蓋と上層の承花，多臂神がみえる。とともに，こゝにも天井各區の交龍のすがたが，みとめられる。

Pl. 62. 方柱 西面 上層 二佛並立像

龕形をなさず，天蓋も屋根もない。なにか，さういふものを木でつくって，とりつけたかとおもはれるが，あきらかでない。すらりとたった痩せがたの佛立像，光背も板のごとく彎曲がない。重厚な中國式の服裝をしてゐるが，第六洞なんかよりは，はるかにきゃしゃであり，形式化してゐる。頂上は南面同樣五成の臺座があり，そのうへの左右に承花，まんなかに多臂神がゐる。第二手に日月をもち，第一の面に寶冠をつけ，左右に三角とがり帽をいたゞいた異形神である。

Pl. 63A. 天井 北區

B. 天井 南區

天井は四區にわかたれる。各壁とのあひだには蓮瓣文帶があり，方柱とのあひだ，各區のあひだには，せまい無文帶があって，くぎってゐる。南區は幅せまく，しかも浮彫はまったく崩落してゐる。しかし，やはり龍の浮彫であったことは，その西南にのこる一端によってたしかめられる。北區もほそながい梯形で，東西シムメトリックに龍が盤踞してゐる。（南區東西長 4.50 m）

Pl. 64A. 天井 東區

B. 天井 西區

東區も梯形で，おくほど幅がひろい。だから，交龍もおくの方が大きく盤踞してゐる。ながい角，ながい耳，ながい頭に，おそろしい齒なみをみせて相對してゐる。胴はながいが，はねかへった四肢がある。龍尾のまはりに，唐草文化した雲文がある。補彩がひどいので，鱗文その他，線刻の意匠はみとめがたい。

西區は，おくの方がやゝ幅ひろくなることで，東區に照應してゐる。交龍の形式はみなおなじであるが，北區が，南區についでいたんでゐる。こゝには北壁のあれた狀態がうかゞはれる。（東區南北長 7.70 m，西區南北長 7.80 m）

Pl. 65A-D. 西壁 下層 七佛列像 像間小龕 造像記

A. 藥師留離光佛の龕は，西壁七佛のあひだ，第四像と第五像のあひだにある。坐佛の小龕で，そのしたにある文字に，藥師留離光佛 Bhaiṣajyaguru とあるのがめづらしい。北魏時代の造像記には，ほとんどみない佛名である。

佛弟子祁□
□，發心造藥師
留離光像一軀，
願々從心。

たゞ龍門古陽洞には孝昌元年(A. D. 525)比丘尼僧□造像記[1]に藥師の名がみえるが，單獨でなく，彌勒，觀音と併稱されてゐる。しかも，その像は龕の上隅につくられた，小さい坐佛の龕であるらしい。（龕高 0.21 m）

B. おなじく七佛第四，第五像のあひだの坐佛小龕のしたにある。

弟子□□
造像一區，
願ゝ從心。（龕高 0.13 m）

C. 西壁七佛のあひだ。第二像と第三像とのあひだ。

弟子王丶丶丶爲七
世父母，發心丶丶丶
□母爲丶丶丶佛
丶丶妻初丶丶月日。

この四行三十字ばかりの文字は，あとからできた三つの小龕によって部分的に削去されてゐる。（小龕高 0.95 m）

D. おなじく七佛第四，第五像のあひだの坐佛小龕，この龕のまはりに彫ってあるから，この龕の造像記とみられる。

佛弟子
□□□，
發心造
像一區。父母男女
□□□□。　（龕高 0.11 m）

1 『龍門石窟の研究』，p. 308，石刻 652.

Pl. 66A-E. 南，東，西壁 造像記

A. 釋迦牟尼の龕。南壁西部下層の交脚菩薩龕(39)，その左わきの浮彫三層塔(Pl. 16)，その刹柱わきにある小龕の造像記である。

淸信女七
世亡父母，造
釋加牟尼佛，
身口安康
丶丶覺□

この小さい簡素な坐佛が，釋迦牟尼佛であることがわかり，興味がある。（龕高 0.16 m）

B．東壁南部下層，鹿野苑佛龕(15)の一隅にある坐佛小龕のしたにある。横に一行，むかって右から左によまれる。

候后云爲亡母

このうへにある二小龕に對するものであらう。(全文長 0.30 m)

C．太和廿年（A.D. 496）の銘。これは西壁下層中央にある坐佛小龕（50）にある(Pl. 51)。寶座の左端に一行「太和廿年七月」とあるのみ。あとはみえない。

D．東壁南部下層の坐佛小龕(30)にある造像記。

太和□
七月十
爲丶
丶丶
丶丶
造

とよめるだけで，このしたの一二字分が削去されてゐる。(銘區幅 0.16 m)

E．西壁中央下層，佛龕(37)と（42）とのあひだの小佛龕にある。三字あるが，よみがたい。造像者の題名であらうか。（銘記高 0.06 m）

Pl. 67A–D. 各壁浮彫塔形

A．覆鉢塔。明窓東側，太和十九年龕（5b）のかたはらにある塔である。もちろん一對である。これは二佛並坐であるから多寶塔である。覆鉢形であるのがめづらしい。（高 0.67 m）

B．三層塔。西壁南部中層佛龕のあひだにある塔(34)である。これも多寶塔である。各層の屋根に鴟尾のみえるのは，この洞内木造塔の一般的形式であるが，かういふことは實際の塔にはありえない。（高 0.95 m）

C．三層塔。南壁西部下層佛龕(39)のわきにある塔である。これも多寶塔である。（高 0.97 m）

D．七層塔。西壁南部上層に獨立してゐる塔(21)である。第一層坐佛，第二層倚坐佛，第三層坐佛二龕，第四層二佛並坐，第五層三尊交脚菩薩，第六と第七層は，それぞれあさい彫りの三坐佛である。各層に變化をつけたことがわかる。五成の臺座，まんなかに刻文でもいれる方板あり，左右に二比丘，二童子がゐる。刹柱のうへには，左右に幡がはためいてゐる。（高 1.95 m）

圖　版　解　説 (2)

第九卷　第十二洞

Pl. 1. 第十二洞 外壁

第十一洞と第十三洞との中間にあり，正面に列柱のある石窟である。四本の柱で，三つの間が區ぎられてゐる。柱はすっかり面がいたみ，東端は大きく崩落してゐる。柱の上部にはなにかの造構，軒ぐみとか屋根形とかがあったとおもはれるが，これも磨滅してない。上部も，第十二洞だけに應ずるやうに，壁のきりこみがある。さうして，こゝに四，五の佛龕が鑿られてゐる。(門口幅 1.40 m)

Pl. 2. 外壁 列柱

列柱を東からみたところである。手まへが東端柱で，つぎが東柱である。東柱でも南三面はすっかり摩滅してゐるが，東面はすこしのこってゐる。あさい浮彫裝飾で，龜甲つなぎ，完全な龜甲のなかには跳躍の人物があり，半分の龜甲には唐草文(Rub. V D)がある。第九洞前室北壁門口の環つなぎ唐草文(本書，第六卷，Rub. III F)からの變形である。柱頭は急にほそくなり，そのうへに皿板と大斗にあたるものがみえてゐる。柱基の承花もみえてゐる。また上部，下部に明障子をはめたための加工があり，それは西柱，西端柱にもみとめられる。

Pl. 3. 前室 南壁 中央

こゝには南壁の中央，西柱と東柱とがみられる。柱は八角，うへがすこしほそく，いくらか「ちまき」ふうになってゐる。こゝには三面がみえるが，坐佛の列龕をうめてゐる。北正面は九段二列，左右斜面は九段一列である。皿板の下面には線刻の蓮華文があり，大斗のくりかたにも蓮瓣帶があり，大斗の側面には三角垂飾文 (Rub. V A,B) がある。柱のうへには桁がとほり，桁には飛天が一列にとんでゐる。それからうへは天井の折りあげ部で，こゝに坐佛がならんでゐる。

柱基には，第九洞，第十洞の列柱にみるやうな基壇があったが，象形にはなってゐなかったらしい。いまは修理の泥につゝまれて，たゞ各隅の承花(Rub. V C)と，そのあひだにある跳躍の人物がのこってゐるのみである。床はなほ數十センチ土中にうまってゐるのである。(門口幅 1.40 m)

Pl. 4. 前室 南壁 東部

上部が崩落してゐる。東端柱は西面の唐草文帶がほんのすこしのこり，西北斜面と北正面に，それぞれ一列の列龕がのこってゐる。柱頭はなく，柱基の摩滅もひどいことになってゐる。(柱間 1.20 m)

Pl. 5. 前室 南壁 上部

列柱の柱頭と桁の關係がよくわかるであらう。天井は格天井になってゐて，その梁のねもとに，これをさゝへるかのやうに奏樂と舞踊の天人がゐる。東隅には竪笛の樂人，東柱のうへには腰鼓の樂人，西柱のうへには小鼓の樂人，そのあひだには舞踊の人物がゐる。みな顏は大きく，腰布をまとひ，たすきをかけるのみで，頭上は逆髮のものがある。つまり，第九，第十洞前室の侏儒 (本書，第六卷，Pl. 33—35，第七卷，Pl. 38)におなじである，

Pl. 6, 7. 前室 南壁と東西壁

やゝないめになってゐるが，この二枚の寫眞で南壁の全景がわかる。この寫眞で，とくに注意されるのは東柱西北斜面と西柱東北斜面のしたから三つ目の佛龕である。この二つの佛龕は，相照應して下半部にへんな唐草の面をのこしてゐる。列龕を彫るまへに，かうした唐草文帶でおほはれてゐた時期があったのであらうか。まったく不可解な唐草文帶である。

東西壁はそれぞれ上下二層になってゐる。腰壁は修補の泥にうめられて，床もすこしうまってゐる。二層のうへは蓮瓣文帶があり，天井の折りあげ部になる。たゞ左右シムメトリィでないのは，西がは梁したの奏樂侏儒がゐない點である。若干破損のあともあるから，落ちてしまったのかも知れない。(前室東西長 7.30 m，南北長 4.10 m)

Pl. 8. 前室東壁上部

東壁上層の屋形龕と，そのうへの折りあげ部の二龕と，それをわかつ奏樂の侏儒がみられる。侏儒はどちらも逆髪形で，琵琶を彈じ，竪笛をふいてゐる。それに崩落した南壁，にぎやかな北壁，さうして蓮華飾の天井をみよ。（軒長約 4.35 m）

Pl. 9. 前室東壁上層屋形龕

屋形龕は三間よりなるが，なほ左右に餘白があるので，けっきよく五間にみえる。中央は交脚菩薩，左右は半跏思惟像，そのつぎは合掌立侍の天である。屋形龕の形式は第九，第十洞前室のそれ（本書，第六卷，Pl. 17，第七卷，Pl. 8）によく似てゐるが，この方がきゃしゃである。三つ斗，叉手束をみると，その差がよくわかる。中央叉手束左右の鳥形は，この洞のみにみられる。また，かはってゐるのは各間ごとにつくられた三角垂飾と帷幕のかざりである。柱に唐草文の裝飾なく，不規則に小佛龕のあるのは追刻である。屋上に沓形の鴟尾，三角唐草飾（Rub. III G,H），まんなかと左右に兩翼をあげた鳥形がある。（軒幅約 4.35 m）

Pl. 10. 前室東壁上層屋形龕交脚菩薩像

菩薩はやゝかたい表情である。寶冠（Rub. IV L）は大きく，まんなかに坐佛がある。板狀の頸かざり，獸首の頸かざり，瓔珞の頸かざり，これには腹のうへで圓環がついてゐる。それに，耳からたれたかざりがあり，また頭髮が左右肩にかゝる。寶冠からさがった布帛，左右にはねた布片，さうして肩におほふ天衣，みな形式どほりである。膝にかゝる下裳のひだは二本の線からなり，めづらしい。左右に獅子，足下に足をうけた女神が上半身をあらはしてゐる。女神であることは胸のふくらみでわかる。たぶん，大地母神であらう。しかし，なぜこゝに大地母神があらはされるかはわからない。釋尊は降魔成道の際，地神の證明をもとめた。そのときあらはれたのが，かくのごとき大地神 Mahāpṛithivī であったことは，いろいろの例がある。[1] 左右わきに小さい合掌の供養者がたってゐる。柱のいたゞきは急にほそくなり，南壁列柱のかたちに一致してゐる。柱のねもとがこはれてゐるが，こゝにも合掌跪坐の供養者がゐたらしい。（柱間約 1.30 m）

1 A. Grünwedel, *Buddhist Art in India*, London 1901, p. 100.

Pl. 11. 前室東壁上層屋形龕右廂半跏思惟像

右廂のうへにも三角垂飾帶と帷幕とがある。半跏像の表情がやゝかたいことは本尊に似てゐる。顏はほゞ正面にむかふが，身體はやゝなゝめ，たれた脚をよこにだしてゐる。思惟相をあらはす左手は，第三指以下をかるくをり，第三指をつよく頰につけてゐる。頸かざりは本尊にやゝおとるが，おなじ方式をもちひてゐる。それに寶冠（Rub. IV M）は大きい。椅子は胴をしぼった籐，あるひは竹の椅子（筌蹄）であり，背後によりかゝる依屏がついてゐる。この依屏は第六洞南壁維摩居士の背後にみるものである。柱はさきにいふごとく上端がほそく，柱基にまるい礎石らしいものがある。

廂外に合掌の供養者がたってゐる。寶髻はうしなはれてゐるが，大衣が全身にかゝり，右腕までふかくつゝんでゐるのは，いはゆるソフオクレス型の像から脱化したものであらう。（柱間約 1.05 m）

Pl. 12. 前室東壁上層屋形龕左廂半跏思惟像

前者にまったくおなじである（Rub. IV N）。この三尊はひだが二本の線よりなるやうにみえるが，よくみると隆起線のひだが退化したものである。隆起がすくないのと，隆起のおさまったところで，刻線がつよくはたらいてゐるため，二本の線よりなるやうにみえるのである。二本の線よりなるひだは雲岡，龍門になく，饗堂山石窟あたりからはじまるものである。（柱間約 1.05 m）

Pl. 13 A. 前室東壁上層屋形龕屋根一部
B. 前室東壁上層屋形龕叉手束
C. 前室東壁上層屋形龕三つ斗

A. これは屋根の中央部である。ま正面むきの，翼をはった鳥形がみえる。彩色はあたらしい。左右の三角飾は第九，第十洞の火焰（第六卷，Pl. 10, 17, 18，第七卷，Pl. 5, 8）から變化したものであるが，こゝのは唐草文になってゐる。

B. 叉手束のうへにも皿板と斗をおいて桁をうけてゐる。この中央の叉手にかぎって左右になにかの實をくはへた鳥がゐる。羽翼をおさめ，屋上の鳥よりはやさしい。ガンダァラ[1]でも，ハッダでも[2]，佛龕のわきによく一つがひの鳥を點じてゐることがある。かなり場所がちがってゐるやうであるが，その遺制であらうか。（Rub. III A）

C. 平三つ斗であるのは石造のためかも知れない。軒の出も，きはめてすくない。通例の三つ斗であるが，斗のしたにくりがたがあり，さらにそのしたに板狀の皿板らしいものがみえる。法隆寺でも大斗には皿板があるが，拱にはない。拱や叉手束に一々皿板があるとすると，それはめづらしい。それから，桷のはし，下端にまるいものがついてゐ

る。はたしてなんのかざりであらうか。現在の木造建築には，これを指唆するやうな遺構はなにもない。北魏，百濟の寺址から出土して棰瓦と稱する蓮華飾を，いま棰の先端につくやうにかんがへてゐるが，あるひはこれのやうに下面についたのではなからうか。（斗拱高約 0.22 m）

1 A. Grünwedel, *Buddhist Art in India*, Fig. 81.

2 J. Meunié, *Shotorak* (Mémoires de la délégation archéologique française en Afghanistan, Tome X), Paris 1942, Pl. XV.

Pl. 14A-C. 前室東壁上層屋形龕鳥形

彩色のすっかり後補であることがわかる。背地面のくろいところは，みな赤色である。おそろしく正面きった顔，つよい兩翼のそり，するどい爪をそろへた足，なかなかみごとである。側面形は，大きな尾と羽とが兩脚のうへでバランスをたもってゐる。形式は中國の傳統をもった鳳凰であり，朱雀であるが，佛教でいへばガルダ garuḍa（迦樓羅），すなはち金翅鳥である。（鳥形高約 0.36 m）

Pl. 15. 前室東壁下層

すっかり後補である。腰壁および下半部は，ほとんど信頼するに足りない。拱額の繪もあくどい。たゞ二佛並坐の尖拱龕であったこと，布をまいたやうな柱頭かざりのあったこと，拱端に鳥形のあることはわかる。ところが，どうしたことか，この鳥形は逆である。ふつう拱梁がさがってきて，外にむかって回轉してそれが鳥の胴になり，そのはしが鳥頭になる。それで鳥頭はそとがはにあり，しかも嘴を主尊の方にむけて，うちにむかふのである。ところが，このばあひはまったく逆である。これでは，拱端がしまらない。右端の獸頭になってゐるのは，もとより後補である。また左右は上下にわかれ，したに筌蹄に腰をかけた合掌供養者のゐることは，南端の一軀から察せられる。復原像がみな双髻にしてゐるのと，一軀を僧形にしてゐるのは，したになにか痕迹があってのことであらうか。うへは合掌跪坐の天人像二段，南端の一二軀はよくできてゐる。蓮瓣文帶は上層龕に屬するものであるが，中央部は尖拱額のために缺けてゐる。（幅 4.15 m）

Pl. 16. 前室西壁上部

Pl. 8 に對應する寫眞で，西壁の上層と天井の折りあげ部である。折りあげ部の隅の樂天は螺貝をふいてゐる。中央のはこはれて落ちてゐるらしい。上層屋形龕は東壁にほゞおなじである。北壁，南壁，天井との接合のやうすがよくわかるであらう。（軒幅 4.25 m）

Pl. 17. 前室西壁上層屋形龕

だいたいの構成は東壁と同様であるが，本尊は交脚佛，左右は倚坐佛になり，各間の內部は瓔珞の羅網になり，三つ斗が獸形になってゐる。柱基の跪坐合掌像はすこしのこり，柱上の小龕はみな追刻である。三佛三尊のくみあはせは，佛龕として唯一の例である。（Rub. III E,F,I）（柱間約 1.55 m）

Pl. 18. 前室西壁上層屋形龕佛交脚像

面相は東壁に似て，やゝかたい。右手をあげ，手間の幔網相がよくうかゞへる。左手はひざ頭におき，衣端をにぎってゐる。衣は通肩で，右手と左手からさがった衣が三角形になって，まへにたれる。足下は蓮座を彫るやうにまるくのこしながら，たゞ荒けづりのまゝでゐる。右の獅子頭は補修，光背の火焔はのちの彩繪である。光背のうへに，文様はないが彎曲したおほひがある。左右の菩薩はやゝ大きく，脇侍らしい存在である。（柱間約 1.55 m）

Pl. 19. 前室西壁上層屋形龕左廂佛倚像と左端脇侍

面相は本尊によく似てゐる。右手の幔網相がよくみえる。左手，左膝はみな補修である。左右足下に，柱基にみるやうな合掌跪坐の供養者像がゐる。廂外の脇侍は大きな寶冠をつけ，下裳と肩からさがる領巾をつけ，背なかから兩腕にかゝる天衣をまとふ。左手は腿にあて，右手は蓮華のごときものをもって胸にあげてゐる。そのすがたは，なかなか堂々としてゐる。（柱間約 1.13 m）

Pl. 20A. 前室西壁上層屋形龕右端脇侍
B. 前室西壁上層屋形龕右廂佛倚像

A. 廂外の右端脇侍である。寶冠正面の蓮華から，なにか房のやうなものがさがってゐる。[1] 右手には蓮華の蕾をもち，左手には水瓶をもってゐる。むかって左端にみえるのは，南壁西端柱の列龕である。

B. おとなしい面相である。あげた右手はをれ，衣端をにぎった左手は完存する。衣は通肩で，身體に密着する。足部の摩滅はひどい。足下左右に合掌跪坐像のあること，左廂におなじである。（柱間約 1.02 m）

1 A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Berlin 1912, Fig. 228, 335.

Pl. 21A. 前室西壁上層屋形龕斗拱
B. 前室西壁上層屋形龕叉手束
C. 前室西壁上層屋形龕三つ斗

A．北端の三つ斗と叉手束である。彩繪は，みなのちの加彩である。獸面と獸形のあるのが東壁との相違である。(Rub. III B)

B．叉手束の中央，大斗のかはりに獸面があり，左右に唐草をくはへた鳥形がある。東壁のとちがって，これは翼をひろげて，沈府君石闕の朱雀[1]に似る。

C．三つ斗であるが，斗は省略され，まんなかは獸面，左右は獸形の上半身になってゐる。その點，第一洞方柱（本書，第一卷，Pl. 36, 37）の斗拱に似るが，獸形はこの方がしまってゐない。（斗拱高約 0.24 m）

1 V. Segalen, G. de Voisins et J. Lartigue, *Mission archéologique en Chine*, Atlas Tome I, Paris 1923, Pl. XVIII, XIX.

Pl. 22. 前室西壁下層

上端の蓮瓣文帶はよくのこってゐる。腰壁以下は補修の泥作である。南北二龕は連續して三カァシャパ Kāśyapa（迦葉）の調伏をあらはす。南龕は，釋尊の端坐する火龍窟の鎭火につとめてゐるところ，北龕は火龍を鉢におさめたところである。南龕が壁面の大部分を占め，例のごとく山嶽重疊としてゐるが，南半はほとんど補修の泥作である。水をはこぶ仙人たちはかなり多く，北半だけで九體をみる。みな高髻，鬚髯をつけ，腰布だけで，痩せこけた上體をむきだしてゐる。本尊は結跏趺坐の佛，右手をあげ，左手を腰にしてゐる。光背はみな補修である。

北龕は天蓋下の立像，頭部はうしなふが，蓮座のうへにたってゐる。光背は無地の擧身光，衣は全身をつゝみ，右手の鉢から火龍が頭をだしてゐる。これに對し，左がはには，合掌の跪坐像があり，おどろいてみあほぐカァシャパ仙がある。上段には，二體の合掌跪坐と一體の合掌飛天とがゐる。火龍を鉢中におさめたものを，鎭火とべつにあらはしたのは，これが唯一の例である。左右の群像は，なかなかいきいきと表現されてゐる。（幅 4.10 m）

Pl. 23. 前室北壁と東壁

北壁は南壁とちがひ，ほとんど垂直にたち，折りあげ部がない。それで，それだけ東西壁にくらべてたかく，それを上下二層にわけると，また各層は，東西壁の各層よりもたかくなる。その關係は，この北壁東半部についてみられたい。（北壁全幅 7.20 m）

Pl. 24. 前室北壁中央部

うへに明窓があり，したに拱門がある。拱門の下半は，破損して補修である。左右の異樣な層塔も承花以外は補修らしい。たゞ龕內の二佛並坐と交脚菩薩はもとのものをしめし，承花のあひだの半身の人物も，もとのものらしい。層柱のうへ，蓮瓣文帶のしたに尖拱額がある。拱額內には，九體の坐佛，下緣には樂天，上緣にはたゞの飛天をならべ香爐を獻じてゐる。下緣は幅があるが，實は拱梁にあたり，そのはしに，小さいながら鳥形があり，こゝにも第九，第十洞の模倣（本書，第六卷，Pl. 9, 13, 14，第七卷，Pl. 8）がみとめられる。（門口幅 2.10 m）

Pl. 25. 前室北壁下層西部

腰壁以下をべつとして，蓮瓣文帶からしたを上下二層とする。うへは楣拱龕，したは屋形龕。屋形のなかには四軀の佛倚像がある。東西合して八軀の佛倚像は，なにを意味するのか。彌勒と過去七佛の八體像はガンダァラにも往々ある。あるひは，さういふものから變化したものであらうか。像そのものは，ほとんど補修で，光背のあひだの合掌化生 aupapāduka はもとのもの，鴟尾と三角飾をもった屋根は輕快で，また鳥形が小さく點ぜられてゐる。

うへの龕は楣拱の三尊龕，まんなかの佛は蓮座のうへに坐し，擧手形である。左右の脇侍も，小ぢんまりとよくまとまってゐる。龕傍には層塔，各層に坐佛の龕がある。（西部幅 2.65 m）

Pl. 26. 前室北壁下層東部

構造も保存狀態も，まったく西部におなじである。たゞ西部の方がよくとゝのって，すぐれてゐる。（東部幅 2.20 m）

Pl. 27. 前室北壁上層明窓

明窓は四角にきられてゐる。たゞの明りとり窓で，ほかの明窓のやうな拱門形をしない。まはりの唐草文，流雲文は後人の加筆，うちの斜面には，坐佛を中心に奏樂の飛天がならび，したの斜面には唐草波狀文を彫る。うへの樂天龕は左右からのつゞきで，西から(5)橫笛，(6)琴，(7)琵琶，(8)竪笛，(9)箜篌，(10)琴となり，琴が二つもある。(Rub. IV c-1)（明窓幅約 1.95 m）

Pl. 28. 前室北壁上層西龕

西龕は四天王奉鉢の龕である。まんなかの佛はたかい蓮座のうへに結跏趺坐し，鉢を手中に按じてゐる。左右の壁に小さく四天王の奉鉢跪坐像がある。尖拱龕の構成は東龕におなじであるが，拱端龍形のしたに矩形があり，これを

さゝへる侏儒がたってゐる。そのそとは，やはり四段になり，うへ三段は合掌跪坐の天人たち，した一段は合掌立像の天人である。樂天は西から(1)舞踊，(2)小鼓，(3)排管(簫)，(4)琵琶，(5)横笛である。

Pl. 29. 前室 北壁 上層 東龕

東龕は鹿野苑 Mṛigadāva における初轉法輪の佛である。鹿が左右にすわり，まんなかに三寶をあらはす三つの法輪 cakra がある。本尊は結跏趺坐，右手をあげ，左手は衣端をとり，手の甲をみせてゐる。尖拱額は大きく，九體の坐佛があり，拱端には龍形がある。龍や光背の火焔は近時の加彩である。龕傍は四段にわかれ，うへ三段は合掌跪坐の天人たち，した一段は合掌の比丘たちと合掌した俗形の男たちで，みな立像である。五人の比丘たちは，いふまでもなくカウンディニヤ Kauṇḍinya(憍陳如)以下，はじめて度せられた五比丘である。俗形男子は不明であるが，しいていへばトラプシァ Trapuṣa (提謂)とバリカ Bhallika (波利)の商人たちであらうか。それは事件が相ちかいこと，またふつうの造像では，男女の供養者をあらはすのに，こゝは男ばかりの像であること，さういふことでトラプシァ，バリカとする可能性はつよい。いづれにしても，かういふものが，かういふふうに點ぜられるのは，群像の構成がさほど緊密でないからである。

Pl. 30. 前室 北壁 上層

これが北壁の上半である。うへは樂天の列龕で天井とさかひし，したは蓮瓣文帶で下層とわかたれる。中央に明窓があり，左右にひとつの佛龕がある。左右のはしがすこしきれてゐるが，天井なり，下層の一部をくはへたながめは，實に豪華である。樂天の列龕をまうけたところは第九，第十洞の模倣であるが，萬字くづしの句欄はない。そのかはりか，欄間やうのものがとぼり，一區ごとに飛天がある。(明窓幅約 1.95 m)

Pl. 31, 32. 前室 天井

天井は東西の梁に南北の梁が三ヵ所でまじはってゐる。交叉點には二重の大蓮華があり，梁には飛天がならぶ。さうして，この梁をうけて東西南の三方に奏樂の侏儒がゐる。侏儒は支輪の役をはたし，この部分(Pl. 31)が折りあげ式になってゐる。侏儒のあひだには一個づゝ坐佛の龕がある。格間のなかには大蓮華がある。まはりが隅とりの八角形のやうになってゐるのは第九，第十洞前室にみる三角持おくりの遺意であらう。梁の側面にもそれぞれ二體づゝの天人がとんでゐる。北がはは折りあげ部がなく，北壁上緣の樂天列龕がならんで，にぎやかである。總じて，この天井は彫刻が豐富で，豪華である。

Pl. 33. 前室 天井 東南部

背地はみな赤色である。そのうへ煤でいぶされてくろくなってゐる。一々の彫刻は，べつにすぐれてもゐないが，全體はよくとゝのって豪華である。天人の走向など，わりに單純である。主として對向の原理である。梁上はすべて逆髮形，格間のなかは高髻形である。蓮華は，梁上は二重になり，格間は一重で八瓣である。子房のなかに蓮の實はない。

Pl. 34. 前室 天井 東部

こゝからみると，にぎやかである。東がはの折りあげ部がま正面にみえ，南がはの侏儒がなゝめにならび，格天井のふかさがよくしめされてゐる。

Pl. 35. 前室 天井 折上部 西南隅

前室の西南隅をみあげたところ，折りあげ部西南の侏儒を中心に，西がはの佛龕がならび，南がはの佛龕もならぶ。西がはは蓮瓣文帶をもって西壁の上層とくぎられるが，南がはは天人のとんだ桁があり，それが南がはの列柱にのってゐる。天井西南の格間 VIII がみえ，西端梁上の蓮華がのぞいてゐる。

Pl. 36. 前室 天井 折上部 南側 佛坐像 (d)(e)

むかって左端が中央の間，東の禪定坐佛である。中央が西の苦行佛である。これをわかつのに手をあげておどってゐるやうな侏儒がゐる。左足は補修である。つぎの侏儒は小鼓をうってゐる。

Pl. 37A. 前室 天井 折上部 南側 禪定佛 (d)
B. 前室 天井 折上部 南側苦行佛 (e)

A. 蓮座のうへにすわった禪定の佛である。通肩で無地の擧身光をもち，そのうへにもアァチ形のおほひがある。左右に脇侍二體，天人二體がゐる。顏の表情も衣文のひだもかたい。光背のうへに逆髮の天人が大きくとんでゐる。

B. 雲岡唯一の苦行佛である。曇無讖譯の『佛所行讚』(大正大藏經，第四卷，p. 24)卷三に「尼連禪河 Nairañjanā のかたはら，寂靜はなはだたのしむべし，菩薩は，すなはち，かしこにおいて，一處にしづかに思惟す，．．．．，專心に齋

戒行をおさめ，身を節し餐をわする，淨心に齋戒をまもるは行人のたへざるところ，寂默して禪思し，つひに六年を經歷せり，日に一麻米をくらひ，形體きはめて消羸せり」といふ。結跏趺坐して禪定にいるが，やせこけて肋骨がたち，眼がおちこんで，しわが全身に目だってゐる。右に三人(Pl. 36)，左に三人の人物は，苦行中の菩薩(太子)に，「自在天 Iśvara をうやまふごとく」(『佛所行讃』卷三，p. 24)心をつくして供養したといふ五比丘たちであらうか。左の比丘は，ゆかたな肉つきをし，偏袒右肩，右手に水瓶をもってゐる。佛は蓮座(蓮趺)に坐し，無地の擧身光をおふてゐる。

Pl. 38. 前室天井折上部東側定光佛(a)と禪定佛(b)

大きな琵琶を奏する侏儒と竪笛をふく侏儒によってしきられて，定光佛の龕(a)と降魔の龕(b)とがある。前者は點景人物がすくないが，後者は魔衆が多く，ひろい面積を占めてゐる。降魔の本尊は，蓮座上に結跏趺坐するが，擧手の相である。左に魔王パァピィヤァン Pāpīyān (波旬)がゐて劍をぬきかけてゐる。かたはらに，これを制してゐる魔の子(薩陀)がゐる。『佛所行讃』には，これにあたる記事をみぬが，グナバドラ Guṇabhadra (求那跋陀羅 394—468) 譯の『過去現在因果經』(大正大藏經，第三卷，p. 639—640)卷三には，「魔の子，すなはち，すゝんで父をいさめていふ，菩薩の淸淨は三界に超越し，神通智慧，明了ならざることなく，天龍八部ことごとくともに稱讃す，これ父王のよく摧屈するところにあらざるなり，惡をなしてみづから禍咎をまねくべからずと」といふ。まさにこれである。ついで「魔に三女あり，形容儀貌きはめて端正，妖冶巧媚，よく人をまどわすこと，天女中においてもつとも第一となす，重ずるに名香をもってし，よき瓔珞をおぶ，一を染欲と名づけ，二を能悅人と名づけ，三を可愛樂と名づく，．．．．，ときに三天女菩薩にまうしていはく，仁者の至德は天人のうやまふところ，まさに供侍あるべし，われらいま年盛時にあり，ねがはくば左右に侍せんと，菩薩こたへていはく，なんじ小善をうゑて天身となることをえたるも，無常をおもはず妖媚をなす，形體うるはしといへども心たゞしからず，淫惑不善なり，死してかならず三惡道中に墮すべし，鳥獸の身をうけ，これをまぬかること，はなはだかたし，なんじら，いま定意をみださんとするは淸淨心にあらず，いますなはち去るべし，われ相もちひずと。ときに三天女は變じて老姥となり，頭はしろく，面しわみ，齒はおち涎をたれ，肉きえて骨たち，腹の大なること鼓のごとく，杖にさゝへられて羸步し，みづから復することあたはず」と。『佛所行讃』はこのこともべてゐない。この右がはの像は三女であり，そのうへは老姥に化せられた三女である。さらにうへの方には，左右とも魔衆の異貌怪容がむらがってゐる。『因果經』卷三は，うへについで「(魔王)この念をなすとき，そのもろもろの軍衆忽然として來至し，虛空に充滿す，形貌おのおの異る，あるひは戟をとり劍をあやつり，頭に大樹をいただき，手に金杵をとり，種々の戰具みなことごとく備足す，あるひは猪，魚，驢，馬，獅子，龍頭，熊，羆，虎，兕，およびもろもろの獸類の，あるひは一身多頭なる，あるひは面におのおの一目なる，あるひはあまたの目ある，あるひは大腹長身なる，あるひは羸瘦無腹なる，あるひは長脚大膝なる，あるひは大脚肥臏なる，あるひは長爪利牙なる，あるひは頭の胸前にある，あるひは兩足多身なる，あるひは大面傍面なる，あるひは色の灰土のごとき，あるひは身より烟焰をはなつ，あるひは象身に山をになふ，あるひは被髮裸形なる，あるひはまた面色の半赤半白なる，あるひは脣たれ地にいたる，あるひは裘をあげて面をおほふ，あるひは身に虎皮をつける，あるひは師子蛇皮なる，あるひは蛇のあまねく身をまとふ，あるひは頭上に火のもゆる，あるひは瞋目怒臂なる，あるひは傍行跳擲する，あるひは空中に旋轉する，あるひは馳步して吼嚇する，かくのごとき等の，もろもろの惡類行の，あげてかぞふべからざるありて菩薩を圍繞する」といふ。これにあたる。この魔衆の異貌怪容は，『佛所行讃』卷三にも，かなり敍述をみるが，魔子制御，三女變容のことからいへば，『因果經』の方に合するといはなければならぬ。魔子制御，三女變貌のことは第八洞東壁降魔龕(本書，第五卷，Pl. 70B)，第十洞主室の降魔龕(第七卷，Pl. 55, p. 51)にもみとめられた。

Pl. 39. 前室天井折上部東側定光佛(a)

本生談 Jātaka は實に多い。けれども定光佛から授記されたといふはなしは，とくに釋迦牟尼佛の出生とつよいむすびつきがあったといふのか，とくに重要視されたテェマであった。グナバドラ Guṇabhadra の『過去現在因果經』(大正大藏經，第三卷，p. 621, 622)には，開卷第一にこの定光佛の因緣をのべてゐる。そのとき儒童スメェダ Sumedha (善慧)は普光如來(定光佛)Dīpaṃkara にたてまつらんために銀錢五百を投じて五莖の花をかひ，また頭髮をしいて佛にふましめたといふ。この右の花枝を手にした像と布髮の像とは，ともにスメェダである。髮をふんだ佛は，足をひらいてたち，右手を衣のなかからだしつゝ胸にあげてゐる。單純ながら，がっちりした體格で，おちついてゐる。左に小さい水瓶をもった菩薩がたち，そのうへに三體の合掌供養者をあ

さく彫ってゐる。

Pl. 40. 前室天井折上部西側坐佛 (g)

折りあげ部，西がは南半である。蓮座のうへに結跏趺坐，右手をあげた佛がゐる。左右は二段になり，うへには合掌跪坐の天人たち，したには籐几(筌蹄)に腰をかけたバラモンがゐる。いづれも，そとがはの手になにかもち，うちがはの手をあげ，佛にむかって話かけてゐるやうすである。手中にあるものは，右は髑髏であり，左は鳥であるらしい。その點，第九洞明窓の左右にゐたバラモン（本書，第六卷，Pl. 46）とおなじである。また，六世紀前半の碑像[1]にも，おなじものがみえる。敦煌第百二十N洞のたちあがったバラモンも鳥をもってゐるらしい[2]。これには，對應するもう一體のバラモンはゐない。松本榮一氏は，この仙人を，その『敦煌畫の研究，圖像篇』（東京 1937年刊，p. 757, 758）において，『大智度論』(大正大藏經，第二十五卷，p.76)卷三にみえるヴァスVasu（婆籤）仙人にあてゝゐる。

ヴァス仙人は在家仙人たちに加擔して天祀のために殺生噉肉すべきをとき，出家仙人たちにのろはれて地中に陷沒した。足よりしだいに地中に陷沒していったが，かれはつひにその言をかへようとはしなかった。この因緣で，このち，天祀中で羊をころすには，「ヴァス仙人王法」により，ヴァスなんじをころすといって刀をとったといふ。

髑髏をもったバラモンについて，第六卷（p. 66, 67）では一二の解釋を提出しておいたが，まだ，それでいゝともおもへない。一方のバラモンの手中にあるものが，あきらかに鳥であるとすると，髑髏バラモンときりはなして，ヴァス仙人とした方がよいとおもふ。したがって，髑髏のバラモンは，單獨に前述のごとく髑髏うりのバラモンと解してよいであらう。しかしながら，髑髏に關するはなしは，もうひとつある。それは東晉のサンガデェヴァ Sangadeva（僧伽提婆）譯『增壹阿含經』（大正大藏經，第二卷，p. 650—652）卷二にみえるムリガシィルシァMṛigaśīrṣa（鹿頭梵志）のはなしである。

ムリガシィルシァは星宿にあかるく，醫藥に長じたバラモンであった。髑髏をたゝいて，一々その性別と死因と，またその療法と，それから死後轉生の場所をいひあてた。けれども，涅槃にはいったウダヤUdaya（優陀延）比丘の髑髏については，これを察知することができず，釋尊に歸服して，つひに比丘となったといはれる。

[1] J. le Roy Davidson, *Traces of Buddhist Evangelism in Early Chinese Art* (Artibus Asiae, Vol. XI, No. 4), Ascona 1948, Fig. 5. A. Priest, *Chinese Sculpture in the Metropolitan Museum of Art*, New York 1944, Pl. XLIII.

[2] P. Pelliot, *Touen-houang*, Pl. CCLXII.

Pl. 41. 前室天井折上部西側阿育王因緣像 (h)

こゝの奏樂の侏儒は崩落したらしい。佛は東がはの北龕に應ずるやうにたってゐる。右手を胸にあげ，左手はのばして鉢をうけてゐる。これになにかさゝげようとする童子たちがゐる。みな蓮座にのってゐる。右には脇侍がゐて蓮座のうへにたってゐる。右うへには跪坐の天人，左うへにはたちあがった童子がゐる。光背のうへには逆髮形の飛天がみえ，さらにうへには格間 IV の西がはの飛天二體がみえてゐる。

涼州沙門慧覺の譯した『賢愚經』（大正大藏經，第四卷，p. 368, 369）卷三には阿輸迦施土品第十七といふのがある。それによると，あるとき釋尊はシュラヴァスティ Śravastī（舍衞城）のジェタヴァナァラマ Jetavanārama（祇樹給孤獨園）にゐた。あるあさアァナンダと食を乞ひに城中にはいった。みると道路で子どもがあそんでゐる。土をあつめ宮舍をつくり，倉庫をつくり，財寶五穀をみたてゝあそんでゐる。その一人が釋尊をみとめ，崇敬の念禁じがたく，布施の心をおこし，穀物に擬した土を釋尊にたてまつらうとした。しかし，小さくてとゞかぬので，他の子どもをふみ臺にしてたてまつった。釋尊は，それで「われ涅槃ののち百年，この子は國王となり，アショカ Aśoka（阿輸迦）と名のるであらう。この王三寶を興顯し，わが舍利をわかって八萬四千の塔を閻浮提にあまねくつくるであらう」といった。先頭にたった童子こそアショカ王の前身であらう。壁面に龜裂があり，佛の一部分は缺除してゐる。

Pl. 42 A–C. 前室天井折上部奏樂侏儒

A. これも逆髮形である。腰衣をつけ，またX字形にまじはる紐を肩にかけてゐる。小さい圓光をつけ，腰鼓をうってゐる。南がは東方の侏儒である。

B. 大きく口をあけてゐるのが特異である。うたひながら兩手をうち，おどってゐるのであらう。左の脚は補修である。南がは中央の侏儒である。

C. 逆髮がいちじるしく，耳がながい。顏面のしわもふかい。おなじ侏儒でも，面貌はかなりちがってゐる。南がは西端の侏儒である。

Pl. 43 A–B. 拱門西側東側

拱門左右はふかく彫って金剛力士をあらはす。しかし力

士は下半部補修である。背後の光背，天衣などもぬりこめられて，うかゞひがたい。やゝ細ながい寶冠をつけ，目は大きくみひらき，眉は左右につりあがってゐる。肩もふとく，にぎった拳がつよい。どうしたのか，かんじんの金剛杵をもってゐない。しかも破損したやうにもみえない。まはりに，なんの裝飾もなく，たゞ南がはのせまいふちに連珠文があるのみである。拱門の兩がはにあった層塔が，ふかくこの面にもあらはれてゐる。階段狀になった承花がおもしろく，そのあひだに童子の上身もうかゞはれる。塔身のうへしたに板狀のものがあり，さらにすこしあいて，もう一枚づゝあるのも，當初からのものらしい。西がはは佛倚像，東がはも佛倚像であるらしい。天井の交龍が一部分みえてゐる。(西側幅 1.85 m，東側幅 1.60 m)

Pl. 44. 拱門天井交龍

天井の交龍(Rub. III D)は頭を南がはにおき，中央でまじはってゐる。頭部は相むかひ，枝のある角をふりたてゝゐる。耳はながい。顎にまいたひげがある。まへ脚は中央でそろへ，あと脚は大きくふんばって，なかなか力がある。四肢の，肘にあたるところは，羽毛のごとき，大きなはねかへりがある。とくに東の龍の，うしろ右脚には，大きな半パルメット唐草がついてゐる。なほ空白には，いろいろ斷片的な唐草が點ぜられ，背後の地は赤くぬられてゐる。(幅約 1.30 m)

Pl. 45. 明窓東側

Pl. 46. 明窓西側

四角な明窓の床はとゝのへられてゐない。主室のがはにも，斜面になった緣どりがあり，うへと左右に禽鳥葡萄唐草文を彫る。前室がはでは，しただけが唐草文で，その他は飛天であった。東西側(Rub. IV E,F)は北半が佛龕で，南半が樹下比丘像である。だがよくみると，佛龕は第二次の作である。もともと樹下比丘像が全面にあったものとおもふ。無憂にも半分以上がけづりとられてゐる。佛龕の最高面が樹下比丘部の背地よりひくいことは，このことを證してあまりがある。もとは樹幹を中心に，左右一體づゝの比丘禪定像があったのであらう。こゝから天井の大蓮華と飛天とがみえてゐる。(龕高約 1.16 m)

Pl. 47A. 明窓東側坐佛龕

B. 明窓西側二佛並坐龕

A. 坐佛を中心にした尖拱龕，作ゆきは，すっかり前者におなじである。尖拱額がすこしひくゝ，こゝに一列の坐佛龕がある。もっとも簡明直截な佛の表現である。寶壇の供養者は比丘形のみである。(龕高約 1.16 m)

B. 二佛並坐の尖拱龕である。やゝ細手のつくり，衣も寬濶で，腋のくぼみ，ひざのまるみもかくれてゐる。左右に天蓋があり，脇侍菩薩がたち，拱額には過去の七佛，そのうへに合掌の天人たち，みな細づくりで，第五洞外の小窟に似る。最上に弧をゑがく帷幕があり，最下の臺には，銘匾をまんなかにして，比丘の立像，供養者の立像が，ごくあさく彫ってある。ほそいつくり，服裝も中國ふうになって，製作年代のさがることをものがたってゐる。(龕高約 1.16 m)

Pl. 48A. 明窓東側樹下比丘像

B. 明窓西側樹下比丘像

左右ほとんどおなじである。すっぽりと頭から大衣をまとひ，手もくるんでゐる。顏はゆたかな，さうしてひき目のやさしい瞑想的な表情である。樹枝はとくにうねり，先端に葉がつく。どちらも枝に鉢囊をさげてゐる。水瓶は樹幹のがはにあったのであらう。佛龕をつくるにあたり，うちくだかれた樹幹や比丘像のあとが無慙である。(像高東 0.50 m，西 0.56 m)

Pl. 49A, B. 明窓天井

明窓の天井はひらたい。寫眞は，うちからみたもの(A)と，そとからみたもの(B)とである。まんなかに二重になった大蓮華(Rub. IV D)がある，まはりに四體の飛天がゐるが，蓮華をさゝげてゐるのでない。南がはのは合掌し，北がはのは博山爐をさゝげてゐるが，どれも頭を主室の方においてとんでゐる。(蓮華徑約 0.90 m)

Pl. 50. 主室南壁東部

主室は各壁とも上下二層になってゐる。そのうち東西南の三壁は一連で，腰壁があり，また坐佛列像と羅網の飛天よりなる最上層がある。下層の佛龕のしたと最上層坐佛列像のしたとは整然たる蓮瓣文帶がとぼってゐる。全面にけばけばしい彩色があり，そのうへ，下層は，はなはだしい修理があり，腰壁以下はまったくぬりこめてある。(主室南北幅 4.80 m，東西幅 6.25 m)

Pl. 51. 主室南壁中央部

上下に明窓と拱門とがある。この點も，第九，第十洞に似てゐるが，規模は小さい。明窓のしたに，二佛並坐の龕があ

る。梯形部はあやまった彩色でわかりにくい。めづらしい天蓋の右に，やゝ大きな菩薩立像があるが，これもめづらしくそとをむいてゐる。どちらも胸にあげた手に蓮華の蕾のごときものをもち，さげた手に環，あるひは水瓶をもってゐる。拱門はかんたんで，ほそい柱のうへに龍形の拱端があり，拱梁はおしつけられて水平にちかい。拱門を通じて前室の入口がよくみえてゐる。(門口幅 2.35 m)

Pl. 52. 主室 南壁 明窓

小さい四角の明窓は禽鳥を配した葡萄唐草文(Rub. IV A–C)をふちかざりとしてゐる。めづらしい唐草文である。窓のうへは，小さいが佛の列像である。そのうち，中央の二軀が擧手形であらはされてゐるのが異例である。禪定形の佛は，シムメトリカルな通肩と右腕を衣端でつゝんだ式とを交互におくのが原則であるが，とりちがへたところもある。そのうへに瓔珞羅網をもってとぶ飛天列がある。それが，中央から左右にわかれてとんでゐる。(明窓幅約 2.50 m)

Pl. 53. 主室 南壁 東部
Pl. 54. 主室 南壁 西部

西部と東部の上下兩層の龕をあらはす。うへは楣拱龕であるが，したは群像の龕である。下層龕のしたは，いま泥壁におほはれてゐるが，蓮瓣文帶があったのであらう。そのしたには，せまい一帶があり，小佛龕をならべてゐる。こゝも大修補があり，龕形はすっかり不明である。腰壁以下は完全に泥壁のなかにうまってゐる。いま腰壁が一段まへにだされてゐるのは，やはりこゝに，なにかの像があったためであらう。(東部幅 2.00 m，西部幅 1.80 m)

Pl. 55. 主室 南壁 上層 東龕

これも西龕に應じた楣拱龕であるが，それよりも楣拱の飛天はより活動的で，完全に框よりはみだしてゐる。まんなかに禪定の小坐佛，その左右に合掌の跪坐供養者がゐる。本尊はひくい蓮座に坐し，左右廂に水瓶をもった菩薩らしい脇侍がたち，本尊のすぐ左右にも小さい水瓶をもった脇侍がゐる。この點は，西龕に對應させたものとおもふが，西龕の方がより緊密な構成である。帷幕もこの方がくづれてゐる。蓮瓣文帶のうへにならぶ坐佛は，みな禪定形で，衣の形式もたゞしく交互にあらはされてゐる。

Pl. 56. 主室 南壁 下層 東龕

蓮座以下がこはれてゐる。墨がきの唐草文帶はもと蓮瓣文帶があったところである。光背にそうて一列に逆髮形飛天の小像があり，その中央に小坐佛がある。左右は高髻合掌の供養者群像であるが，中段は逆髮跪坐形であり，下段はとがり帽をつけた俗形男子である。左右四人づゝであるがその足下に坐した駱駝二頭と步行の馬二頭がゐる。いふまでもなくトラプシァ Trapuṣa(提謂)とバリカ Bhallika(波利)のひきゐる隊商である。釋尊成道の直後最初に麨蜜をたてまつった供養者たちである(本書，第五卷，p, 16, 17)。本尊はめづらしい禪定の坐像であるが，成道直後の佛といへば，これでよいのであらう。もっとも手さきは破損のうへ修理されてゐる。

Pl. 57. 主室 南壁 上層 西龕

坐佛を中心にした三尊形式であるが，本尊わきに，小さいながら蓮上の合掌比丘を彫ってゐる。いはゞ原始的な五尊形式である。比丘形，つまり羅漢像は脇侍であるとともに，讃仰者である。本尊は擧手形であるが，右手は補修である。衣のひだがいちじるしい。隆起線のひだから變化したものである。三尊の表情のやゝかたいことは前室の諸龕におなじであるが，楣拱や帷幕の表現はいきいきとしてゐる。框には連珠文をうめ，框内の飛天は，いきほひよく手足をあげて，框外にはみだしさうである。しかも，こゝの天人はみな逆髮形と高髻形である。腰衣をつけ，X字形にまじはる玉かざりをつけ，顏の表情もユッモラスである。これからさがった龕内の帷幕は，たくりあげた部分に，一々獸面をほどこしてゐる。

なほ，この寫眞には，蓮瓣文帶のうへの坐佛列像がみえるが，こゝにも二軀は擧手形であって，ふつうの千佛とちがってゐる。

Pl. 58. 主室 南壁 下層 西龕

坐佛本尊は五成の寶座のうへにすわってゐる。寶座のまへには博山香爐があり，跪坐供養者があり，獅子がゐる。補修はあるが，だいたい，もとのさまをつたへてゐる。龕形をなさず，群像でふちどってゐるのは，下層諸龕の通性である。いちおう，光背にそうて小像の一列があり，香爐をさゝげた飛天がまんなかにゐて，それが龕形となってゐる。そのうへに小さい坐佛があり，その左右に多數の合掌群像を配してゐる。みな高髻の天人である。さらに最下の一段は供養者の立像ばかりであるが，めづらしいのは一人の比丘をのぞいて，他はすべて俗形の男女である。基壇に俗形供養者を彫ることはあるが，かくのごとく左右につくること

はまれである。あるひは，東龕がトラブシァ，バリカの商人像を彫ったから，それにちかい俗形供養者が，こゝにまぎれこんだのであらうか。右の三體はあきらかに女子の像，左の二體は男子像であらう。

Pl. 59. 主室 南壁 最上層 東部

Pl. 60. 主室 南壁 最上層 西部

南壁の最上層である。蓮瓣文帶のうへに坐佛をならべてゐる。やゝ細手の作，西半に擧手形がしばしばあらはれるのは異例である。このうへに，帷幕の形式化して，ちよっとそれとはみとめがたい弧狀がならぶ。それからうへは瓔珞の羅網である。そのはしを兩手ににぎりしめながら，ほとんど水平にとぶ天人がならんで，西壁または東壁にまで移行してゐる。それからうへは天井である。

Pl. 61. 主室 東壁

Pl. 62. 主室 西壁

東壁も西壁も，上下二層になってゐる。坐佛と羅網の最上層があり，まったく補修された腰壁がある。上層の南北二龕は東西壁ともおなじであるが，下層の二龕は東壁だけである。二龕の構成は，だいたい南壁下層の二龕に一致する。たゞわきの供養者にやゝ相違があるのみである。しかし，この二龕は，佛傳中の一節をあらはしたものではないらしい。西壁の下層は坐佛の列像があり，みな擧手形で，九體ある。そのしたは飛天列(Rub. III c)である。そのしたは追刻の小佛龕である。北半は破損してゐるが，南半は整然としてゐる。すくなくとも五龕はあったことがわかる。明窓のなかの佛龕とおなじころ追刻されたものであらう。あるひは，このしたに，もう一層かういふ小龕列があったのかも知れない。それが南壁下層西龕のした (Pl. 56) につゞいてゐるのであらう。これより以下は補修の腰壁である。(西壁幅 4.65 m，東壁幅 4.80 m)

Pl. 63. 主室 東壁 上層 南龕

めづらしい交脚佛の龕である。本尊は，全體に細づくり，左右にうづくまった獅子は，かはった形式である。龕內蓮上に脇侍があり，そのうへに，まるまると彫りだされた飛天がゐる。尖拱額には，坐佛を中心に，左右に四人の跪坐供養者がゐる。左右龕の柱はほそく，このうへにたつ獸形も小さい。龕傍南がはに合掌の天人がたち，北がはに三層の塔がたつ。これも細づくりでよわい。最上層の坐佛列像もほそく，上下二帶の蓮瓣文帶もよわい。(塔高約 1.27 m)

Pl. 64. 主室 東壁 上層 北龕

龕內いっぱいに蓮座がひろがってゐる。やゝ細づくりの坐佛の左右に小さい菩薩の脇侍がゐる。尖拱額には飛天の列があり，まんなかに博山香爐をさゝへてゐる。北端はかなり補修があり，作ゆきもあまり感心しないが，本尊の保存は良好である。南がはに三層の塔形 (Rub. IV J) がある。(塔高約 1.27 m)

Pl. 65. 主室 東壁 最上層

型のごとく蓮瓣文帶にはじまって，坐佛列像があり，帷幕の弧があり，羅網があり，飛天がある。これは南壁，西壁にも一樣である。この壁の列像は，西壁のそれほどまるみがない。

Pl. 66 A. 主室 西壁 上層 南龕

B. 主室 西壁 上層 北龕

A. 南龕は坐佛である。端然たる結跏趺坐で，足のあひだからたれた衣のひだがうつくしい。龕內左右に脇侍があり，そのうへに飛天がある。拱額內は九體の坐佛，拱端は鳥形である。北龕とのあひだに三層塔 (Rub. IV K) がたち，南がはに合掌の比丘像がたつ。平凡な佛龕である。

B. 東壁の交脚佛に對する交脚菩薩の龕である。顏の下半，胸部，兩肩，左手は，まったくの補修である。瓔珞もわりに貧弱である。五成の須彌座に坐し，兩わきの獅子はゐない。拱額內は七體の跪坐合掌像である。拱端は獸形であるが，左半はすっかり破損，いまあるのは補作である。(塔高約 1.29 m)

Pl. 67. 主室 西壁 最上層

東壁の最上層におなじであるが，列坐の佛像は，はるかにまるみがあってつよい。

Pl. 68. 主室 北壁

北壁の崩壞はかくのごとく慘憺たるものである。上下二層にわかれ，したの龕形は小さく，うへの龕形は大きい。上層が楣拱龕であることは第七，第八洞の北壁におなじである。しかし，上龕に光背の一部がかすかにのこってゐるのと，左わきに小さい比丘像ののこってゐるのとをのぞき，その他はなにもない。楣拱のうへもすっかり近ごろの彩繪である。(幅 6.20 m)

Pl. 69. 主室 天井

天井も北端はこはれてゐて，まったく繪であるが，第九洞第十洞の形式で，わりあひに整然としてゐる。中央に格間が二つ，これをもちあげるやうに，三方から梁があつまり，その各區にさまざまの神像がある。梁のうへは，もとより飛天をならべてゐる。飛天のかずと走向とをしめすと，第十八圖のごとくである。

中央東の格間は，大半こはれてゐるが，そこに彫られた神像の左隅に貧弱な牛のゐることがわかる。これに對した中央西の格間の神像には鳥がゐる。前者の面數は不明であるが，六臂であり，後者は五面六臂であることがわかる。してみると，まさに第八洞門口とおなじくマヘシュヴァラMaheśvara（摩醯首羅）とヴィシュヌVisṇu（毘紐天）とにあたる。比較するまでもなく，この方が彫刻は貧弱である。南側中央格間の神像はま正面にむかひ，左右に日月をさゝげた四臂神である。おそらく，アスラAsura(阿修羅)神であらう。その他はみな尋常の形體をそなへた神像である。南側東格間の神像は逆髮の大きな顏で，まるい目，大きな耳がするどい。南側西格間の神像は髮容がかはってゐて，やさしい顏つきである。みな，かた膝をたてゝすわってゐる。